斎藤茂吉著

万葉秀歌

上巻

岩波新書

R2

万葉秀歌 上巻 斎藤茂吉著

R2

9784004000020

1920292008005

ISBN4-00-400002-5

C0292 ¥800E

定価（本体800円＋税）

万葉秀歌(上)

「万葉集入門」として本書の右に出るものはいまだない。万葉の精神をふまえて自己の歌風を確立した一代の歌人たる著者が、長年の傾倒による蘊蓄を傾けて約四百の秀歌を選び、簡潔にしてゆきとどいた解説を付して鑑賞の手引きを編んだ。雄渾おおらかな古代の日本人の心にふれることにより、われわれは失われたものを取り戻す(全二冊)。

斎藤茂吉著

万葉秀歌

上巻

岩波新書

5

序

万葉集は我国の大切な歌集で、誰でも読んで好いものとおもうが、何せよ歌の数が四千五百有余もあり、一々注釈書に当ってそれを読破しようというのは並大抵のことではない。そこで選集を作って歌に親しむということも一つの方法だから本書はその方法を採った。選ぶ態度は大体すぐれた歌を巻毎に拾うこととし、数は先ず全体の一割ぐらいの見込で、長歌は罷めて短歌だけにしたから、万葉の短歌が四千二百足らずあるとして大体一割ぐらい選んだことになろうか。

本書はそのような標準にしたが、これは国民全般が万葉集の短歌として是非知って居らねばならぬものを出来るだけ選んだためであって、万人向きという意図はおのずから其処に実行せられているわけである。ゆえに専門家的に漸く標準を高めて行き、読者諸氏は本書から自由に三百首選二百首選一百首選乃至五十首選をも作ることが出来る。それだけの余裕を私は本書のなかに保留して置いた。

そうして選んだ歌に簡単な評釈を加えたが、本書の目的は秀歌の選出にあり、歌が主で注釈が従、評釈は読者諸氏の参考、鑑賞の助手の役目に過ぎないものであって、而して今は専門学者の高級にして精到な注釈書が幾つも出来ているから、私の評釈の不備な点は其等から自由に補充することが出来る。

右のごとく歌そのものが主眼、評釈はその従属ということにして、一首一首が大切なのだから飽くまで一首一首に執着して、若し大体の意味が呑込めたら、しばらく私の評釈の文から離れ歌自身について反復熟読せられよ。読者諸氏は本書を初から順序立てて読まれても好し、行き当りばったりという工合に頁を繰って出た歌だけを読まれても好し、忙しい諸氏は労働のあいま田畔汽車中電車中食後散策後架上就眠前等々に於て、一、二首或は二、三首乃至十首ぐらいずつ読まれることもまた可能である。要は繰返して読み一首一首を大切に取扱って、早読して以て軽々しく取扱われないことを望むのである。

本書では一首一首に執着するから、いわゆる万葉の精神、万葉の日本的なもの、万葉の国民性などいうことは論じていない。これに反して一助詞がどう一動詞がどう第三句が奈何結句が奈何というようなことを繰返している。読者諸氏は此等の言に対してしばらく耐忍せられんことをのぞむ。万葉集の傑作といい秀歌と称するものも、地を洗って見れば決して魔法のごとく不可思議なものでなく、素直で当り前な作歌の常道を踏んでいるのに他ならぬという、その最

も積極的な例を示すためにいきおいそういう細かしきことになったのである。

本書で試みた一首一首の短評中には、先師ほか諸学者の結論が融込んでいること無論であるが、つまりは私の一家見ということになるであろう。そうして万人向きな、誰にも分かる「万葉集入門」を意図したのであったのだけれども、いよいよとなれば仮借しない態度を折に触れつつ示した筈である。昭和十三年八月二十九日斎藤茂吉。

目次

巻第一

番号	初句	二句	作者	頁
〔四〕	たまきはる・うちのおほぬに		(中皇命)	一
〔六〕	やまごしの・かぜをときじみ		(軍王)	五
〔七〕	あきのぬの・みくさかりふき		(額田王)	七
〔八〕	にぎたづに・ふなのりせむと		(額田王)	八
〔九〕	きのくにの・やまこえてゆけ		(額田王)	一一
〔一一〕	わがせこは・かりほつくらす		(中皇命)	一四
〔一三〕	わがほりし・ぬじまはみせつ		(中皇命)	一五
〔一四〕	かぐやまと・みみなしやまと		(天智天皇)	一七
〔一五〕	わたつみの・とよはたぐもに		(天智天皇)	一八
〔一八〕	みわやまを・しかもかくすか		(額田王)	二三
〔二〇〕	あかねさす・むらさきぬゆき		(額田王)	二五
〔二一〕	むらさきの・にほへるいもを		(天武天皇)	二七

〔一三〕 かはかみの・ゆついはむらに（吹黄刀自）……二六
〔一四〕 うつせみの・いのちををしみ（麻続王）……三〇
〔一六〕 はるすぎて・なつきたるらし（持統天皇）……三二
〔一〇〕 ささなみの・しがのからさき（柿本人麿）……三四
〔三一〕 ささなみの・しがのおほわだ（柿本人麿）……三五
〔三二〕 いにしへの・ひとにわれあれや（高市古人）……三六
〔三九〕 やまかはも・よりてつかふる（柿本人麿）……三七
〔四〇〕 あごのうらに・ふなのりすらむ（柿本人麿）……三八
〔四二〕 しほさゐに・いらごのしまべ（柿本人麿）……三九
〔四三〕 わがせこは・いづくゆくらむ（当麻麿の妻）……四〇
〔四六〕 あきのぬに・やどるたびびと（柿本人麿）……四一
〔四八〕 ひむがしの・ぬにかぎろひの（柿本人麿）……四二
〔四九〕 ひなみしの・みこのみことの（柿本人麿）……四三
〔五一〕 うねめの・そでふきかへす（志貴皇子）……四四
〔五七〕 ひくまぬに・にほふはりはら（長奥麿）……四六
〔五八〕 いづくにか・ふなはてすらむ（高市黒人）……五〇
〔六三〕 いざこども・はやくやまとへ（山上憶良）……五一
〔六四〕 あしべゆく・かものはがひに（志貴皇子）……五三
〔六五〕 あられうつ・あられまつばら（長皇子）……五五
〔七〇〕 やまとには・なきてかくらむ（高市黒人）……五六
〔七四〕 みよしぬの・やまのあらしの（作者不詳）……五八
〔七六〕 ますらをの・とものおとすなり（元明天皇）……五九
〔七八〕 とぶとりの・あすかのさとを（作者不詳）……六一
〔八二〕 うらさぶる・こころさまねし（長田王）……六二
〔八四〕 あきさらば・いまもみるごと（長皇子）……六三

巻第二

〔八八〕 あきのたの・ほのへにきらふ（磐姫皇后）……六五
〔九一〕 いもがいへも・つぎてみましを（天智天皇）……六七
〔九二〕 あきやまの・このしたがくり（鏡王女）……六八
〔九四〕 たまくしげ・みむろのやまの（藤原鎌足）……六九
〔九五〕 われはもや・やすみこえたり（藤原鎌足）……七一
〔一〇三〕 わがさとに・おほゆきふれり（天武天皇）……七三
〔一〇四〕 わがをかの・おかみにいひて（藤原夫人）……七四
〔一〇五〕 わがせこを・やまとへやると（大伯皇女）……七四
〔一〇六〕 ふたりゆけど・ゆきすぎがたき（大伯皇女）……七六

〔二五五〕 あまざかる・ひなのながぢゆ　（柿本人麿）……一二
〔二六二〕 やつりやま・こだちもみえず　（柿本人麿）……一二
〔二六四〕 もののふの・やそうぢがはの　（柿本人麿）……一二
〔二六五〕 くるしくも・ふりくるあめか　（長奥麻呂）……一二五
〔二六六〕 あふみのうみ・ゆふなみちどり　（柿本人麿）……一二六
〔二六七〕 むささびは・こぬれもとむと　（志貴皇子）……一二七
〔二七〇〕 たびにして・ものこほしきに　（高市黒人）……一二九
〔二七一〕 さくらだへ・たづなきわたる　（高市黒人）……一三〇
〔二七五〕 いづくにか・われはやどらむ　（高市黒人）……一三一
〔二七七〕 とくきても・みてましものを　（高市黒人）……一三三
〔二七七〕 ここにして・いへやもいづく　（石上卿）……一三四
〔二七七〕 ひるみれど・あかぬたごのうら　（田口益人）……一三五
〔二二八〕 たごのうらゆ・うちいでてみれば　（山部赤人）……一三六
〔二二八〕 あをによし・ならのみやこは　（小野老）……一三八
〔二二二〕 わがさかり・またをちめやも　（大伴旅人）……一三九
〔二二二〕 わがいのちも・つねにあらぬか　（大伴旅人）……一四〇
〔二二六〕 しらぬひ・つくしのわたは　（沙弥満誓）……一四一
〔二二七〕 おくららは・いまはまからむ　（山上憶良）……一四二
〔二二八〕 しるしなき・ものをおもはずは　（大伴旅人）……一四五
〔二五八〕 むこのうらを・こぎたむをぶね　（山部赤人）……一四七
〔二七五〕 よしぬなる・なつみのかはの　（湯原王）……一四八
〔二九〇〕 かるのいけの・うらみゆきめぐる　（紀皇女）……一四九
〔二九六〕 みちのくの・まぬのかやはら　（笠女郎）……一五〇
〔四一六〕 ももつたふ・いはれのいけに　（大津皇子）……一五一
〔四一八〕 とよくにの・かがみのやまの　（手持女王）……一五二
〔四一九〕 いはとわる・たぢからもがも　（手持女王）……一五三
〔四二〇〕 やくもさす・いづものこらが　（柿本人麿）……一五四
〔四二二〕 われもみつ・ひとにもつげむ　（山部赤人）……一五五
〔四四六〕 わぎもこが・みしとものうらの　（大伴旅人）……一五六
〔四四九〕 いもとこし・みぬめのさきを　（大伴旅人）……一五六
〔四五二〕 いもとして・ふたりつくりし　（大伴旅人）……一五七
〔四七七〕 あしひきの・やまさへひかり　（大伴家持）……一五八

巻第四

〔四八六〕 やまのはに・あぢむらさわぎ　（舒明天皇）……一六〇
〔四八八〕 きみまつと・わがこひをれば　（額田王）……一六二

〔五〇五〕いまさらに・なにをかおもはむ　（安倍女郎）……一六五
〔五一三〕おほはらの・このいつしばの　（志貴皇子）……一六六
〔五二二〕にはにたつ・あさてかりほし　（常陸娘子）……一六六
〔五七四〕ここにありて・つくしやいづく　（大伴旅人）……一六七
〔五九三〕きみにこひ・いたもすべなみ　（笠女郎）……一六八
〔六〇八〕あひおもはぬ・ひとをおもふは　（笠女郎）……一六九
〔六三五〕おきへゆき・へにゆきいまや　（高安王）……一六九
〔六七〇〕つくよみの・ひかりにきませ　（湯原王）……一七〇
〔七〇九〕ゆふやみは・みちたづたづし　（大宅女）……一七一
〔七六九〕ひさかたの・あめのふるひを　（大伴家持）……一七一

巻第五

〔七九三〕よのなかは・むなしきものと　（大伴旅人）……一七三
〔七九七〕くやしかも・かくしらませば　（山上憶良）……一七五
〔七九八〕いもがみし・あふちのはなは　（山上憶良）……一七七
〔七九九〕おほぬやま・きりたちわたる　（山上憶良）……一七九
〔八〇一〕ひさかたの・あまぢはとほし　（山上憶良）……一八〇
〔八〇三〕しろがねも・くがねもたまも　（山上憶良）……一八二
〔八八八〕つねしらぬ・みちのながてを　（山上憶良）……一八三
〔八九三〕よのなかを・うしとやさしと　（山上憶良）……一八五
〔八九八〕なぐさむる・こころはなしに　（山上憶良）……一八六
〔八九九〕すべもなく・くるしくあれば　（山上憶良）……一八七
〔九〇五〕わかければ・みちゆきしらじ　（山上憶良）……一八八
〔九〇六〕ふせおきて・われはこひのむ　（山上憶良）……一八九

巻第六

〔九〇九〕やまたかみ・しらゆふはなに　（笠金村）……一九一
〔九一八〕おきつしま・ありそのたまも　（山部赤人）……一九二
〔九一九〕わかのうらに・しほみちくれば　（山部赤人）……一九三
〔九二四〕みよしぬの・きさやまのまの　（山部赤人）……一九五
〔九二五〕ぬばたまの・よのふけぬれば　（山部赤人）……一九六
〔九四四〕しまがくり・わがこぎくれば　（山部赤人）……一九八
〔九四五〕かぜふけば・なみかたたむと　（山部赤人）……一九九
〔九六八〕ますらをと・おもへるわれや　（大伴旅人）……二〇〇
〔九七二〕ちよろづの・いくさなりとも　（高橋虫麿）……二〇一
〔九七四〕ますらをの・ゆくとふみちぞ　（聖武天皇）……二〇三

〔九七八〕をのこやも・むなしかるべき（山上憶良）……二〇三
〔九九四〕ふりさけて・みかづきみれば（大伴家持）……二〇四
〔九九六〕みたみわれ・いけるしるしあり（海犬養岡麿）……二〇六
〔一〇〇〇〕こらしあらば・ふたりきかむを（守部王）……二〇七

巻第七

〔一〇七四〕かすがやま・おしててらせる（作者不詳）……二〇八
〔一〇七五〕うなばらの・みちとほみかも（作者不詳）……二〇九
〔一〇八七〕あなしがは・かはなみたちぬ（柿本人麿歌集）……二一〇
〔一〇八八〕あしひきの・やまがはのせの（柿本人麿歌集）……二一一
〔一〇八九〕おほうみに・しまもあらなくに（作者不詳）……二一二
〔一〇九五〕みもろつく・みわやまみれば（作者不詳）……二一三
〔一一〇一〕ぬばたまの・よるさりくれば（柿本人麿歌集）……二一四
〔一一一八〕いにしへに・ありけむひとも（柿本人麿歌集）……二一五
〔一一三一〕やまのまに・わたるあきさの（作者不詳）……二一六
〔一一三八〕うぢがはを・ふねわたせをと（作者不詳）……二一六
〔一一四〇〕しながどり・ゐなぬをくれば（作者不詳）……二一七
〔一一七九〕いへにして・われはこひむな（作者不詳）……二一八

〔一二四〇〕たまくしげ・みもろとやまを（作者不詳）……二一九
〔一二六三〕あかときと・よがらすなけど（作者不詳）……二二〇
〔一二六九〕まきむくの・やまべとよみて（柿本人麿歌集）……二二一
〔一二八五〕はるひすら・たにたちつかる（柿本人麿歌集）……二二二
〔一三三六〕ふゆごもり・はるのおほぬを（作者不詳）……二二三
〔一四〇六〕あきつぬに・あさゐるくもの（作者不詳）……二二四
〔一四一一〕さきはひの・いかなるひとか（作者不詳）……二二五
〔一四一三〕わがせこを・いづくゆかめと（作者不詳）……二二六

従属選出歌

〔一〇〕きみがよも・わがよもしらむ（中皇命）……一六
〔一三〕うちそを・をみのおほきみ（作者不詳）……三〇
〔五九〕ながらふる・つまふくかぜの（嘗謝女王）……五九
〔六九〕くさまくら・たびゆくきみと（清江娘子）……五六
〔七七〕わがおほきみ・ものなおもほし（御名部皇女）……六〇
〔八五〕きみがゆき・けながくなりぬ（磐姫皇后）……六六
〔八六〕かくばかり・こひつつあらずは（磐姫皇后）……六六
〔八七〕ありつつも・きみをばまたむ（磐姫皇后）……六六

〔九三〕 たまくしげ・おほふをやすみ（鏡王女）……六九
〔一〇八〕 あをまつと・きみがぬれけむ（石川郎女）……七〇
〔一一二〕 いにしへに・こふらむとりは（額田王）……七九
〔一二四〕 あきのたの・ほむきのよれる（但馬皇女）……八〇
〔一三七〕 あきやまに・おつるもみぢば（柿本人麿）……八五
〔一六四〕 みまくほり・わがするきみも（大来皇女）……九八
〔一七七〕 あさひてる・さだのをかべに（日並皇子宮の舎人）……一〇三
〔一八一〕 みたちせし・しまのありそを（日並皇子宮の舎人）……一〇五
〔一八八〕 あさぐもり・ひのいりぬれば（日並皇子宮の舎人）……一〇三
〔二一一〕 こぞみてし・あきのつくよは（柿本人麿）……一〇六
〔二一三〕 ふすまぢを・ひきてのやまに（柿本人麿）……一〇六
〔二五六〕 けひのうみの・にはよくあらし（柿本人麿）……一一三
〔二七一〕 しはつやま・うちこえみれば（高市黒人）……一一三
〔二七三〕 いそのさき・こぎたみゆけば（高市黒人）……一一三
〔二七四〕 わがふねは・ひらのみなとに（高市黒人）……一一三
〔二七六〕 いももわれも・ひとつなれかも（高市黒人）……一一三
〔二九六〕 いほはらの・きよみがさきの（田口益人）……一二五
〔三〇三〕 なぐはしき・いなみのうみの（柿本人麿）……一二三

〔三〇四〕 おほきみの・とほのみかどと（柿本人麿）……一二三
〔三〇五〕 かくゆゑに・みじといふものを（高市黒人）……一二六
〔三一六〕 むかしみし・きさのをがはを（大伴旅人）……一四〇
〔三二〇〕 ふじのねに・ふりおけるゆきは（作者不詳）……一三八
〔三三九〕 さけのなを・ひじりとおほせし（大伴旅人）……一四六
〔三四〇〕 いにしへの・ななのさかしき（大伴旅人）……一四六
〔三四一〕 さかしみと・ものいふよりは（大伴旅人）……一四六
〔三四二〕 いはむすべ・せむすべしらに（大伴旅人）……一四六
〔三四三〕 なかなかに・ひととあらずは（大伴旅人）……一四六
〔三四四〕 あなみにく・さかしらをすと（大伴旅人）……一四六
〔三四五〕 あたひなき・たからといふとも（大伴旅人）……一四六
〔三四六〕 よるひかる・たまといふとも（大伴旅人）……一四七
〔三四七〕 よのなかの・あそびのみちに（大伴旅人）……一四七
〔三四八〕 このよにし・たぬしくあらば（大伴旅人）……一四七
〔三四九〕 いけるもの・つひにもしぬる（大伴旅人）……一四七
〔三五〇〕 もだをりて・さかしらするは（大伴旅人）……一四七
〔三五一〕 よのなかを・なににたとへむ（沙弥満誓）……一四一
〔三五七〕 なはのうらゆ・そがひにみゆる（山部赤人）……一四八

〔三五九〕あべのしま・うのすむいそに……（山部赤人）……一四八
〔四二八〕こもりくの・はつせのやまの……（柿本人麿）……二三五
〔四二九〕やまのまゆ・いづものこらは……（柿本人麿）……一五四
〔四五〇〕ゆくさには・ふたりわがみし……（大伴旅人）……一五七
〔四五一〕ひともなき・むなしきいへは……（大伴旅人）……一五八
〔四五三〕わぎもこが・うゑしうめのき……（大伴旅人）……一五八
〔四八七〕あふみぢの・とこのやまなる……（舒明天皇）……一六二
〔四八九〕かぜをだに・こふるはともし……（鏡王女）……一六四
〔四九七〕いにしへに・ありけむひとも……（柿本人麿）……二二五
〔五〇六〕わがせこは・ものなおもほし……（安倍女郎）……一六五
〔九〇〇〕とみびとの・いへのこどもの……（山上憶良）……一八七
〔九〇一〕あらたへの・ぬのぎぬをだに……（山上憶良）……一八七
〔九四三〕たまもかる・からにのしまに……（山部赤人）……一九九
〔九六五〕おほならば・かもかもせむを……（遊行女婦児島）……二〇〇
〔九六六〕やまとぢは・くもがくりたり……（遊行女婦児島）……二〇〇
〔一三五〕うぢがはは・よどせなからし……（作者不詳）……二一七
〔一三九〕ちはやびと・うぢかはなみを……（作者不詳）……二一七
〔一六〇〕なにはがた・しほひにたちて……（作者不詳）……一九四
〔一六二〕まとかたの・みなとのすどり……（作者不詳）……一九四
〔一六五〕ゆふなぎに・あさりするたづ……（作者不詳）……一九四
〔一七八〕いなみぬは・ゆきすぎぬらし……（作者不詳）……二一八
〔二六二〕あしひきの・やまつばきさく……（作者不詳）……二二〇
〔二六八〕こらがてを・まきむくやまは……（柿本人麿歌集）……二二一
〔二六六〕あすかがは・ななせのよどに……（作者不詳）……二二六
〔四二六〇〕おほきみは・かみにしませば……（大伴御行）……一二三
参考地名一覧……二二八
改版に際して……二三一

参照注釈書略表

抄……仙覚「万葉集抄」
拾穂抄……北村季吟「万葉拾穂抄」
代匠記……契沖「万葉代匠記」
僻案抄……荷田春満「万葉集僻案抄」
考……賀茂真淵「万葉考」

槻落葉……荒木田久老「万葉考槻落葉」
略解……橘千蔭「万葉集略解」
燈……富士谷御杖「万葉集燈」
攷證……岸本由豆流「万葉集攷證」
檜嬬手……橘守部「万葉集檜嬬手」
緊要……橘守部「万葉集緊要」
古義……鹿持雅澄「万葉集古義」
美夫君志……木村正辞「万葉集美夫君志」
註疏……近藤芳樹「万葉集註疏」
新釈……伊藤左千夫「万葉集新釈」
新考……井上通泰「万葉集新考」
選釈……佐佐木信綱「万葉集選釈」
新解……武田祐吉「万葉集新解」
新講……次田潤「万葉集新講」
講義……山田孝雄「万葉集講義」
総釈……楽浪書院版「万葉集総釈」

巻第一

○

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますら
むその草深野　〔巻一・四〕　中皇命

舒明天皇が、宇智野、即ち大和宇智郡の野（今の五条町の南、阪合部村）に遊猟したもうた時、中皇命が間人連老をして献らしめた長歌の反歌である。中皇命は未詳だが、賀茂真淵は荷田春満の説に拠り、「皇」の下に「女」を補って、「中皇女命」と訓み、舒明天皇の皇女で、のち、孝徳天皇の后に立ちたもうた間人皇后だとし、喜田博士は皇后で後天皇になられた御方だとしたから、此処では皇極（斉明）天皇に当らせられる。即ち前説に拠れば舒明の皇女、後説に拠れば舒明の皇后ということになる。間人連老は孝徳天皇紀白雉五年二月遣唐使の判官に「間人連老」とあるその人であろう。次に作者は中皇命か間人連老か両説あるが、これは中皇命の御歌であろう。縦しんば間人連老の作という仮定をゆるすとしても中皇命の御心を以て作ったということになる。間人連老の作だとする説は、題詞に「御歌」となくしてただ「歌」とあるがためだというのであるが、これは編輯当時既に「御」を脱していたのであろう。考に、

「御字を補ひつ」と云ったのは恣に過ぎた観があっても或は真相を伝えたものかも知れない。

「中大兄三山歌」(巻一・一三)でも「御」の字が無い。然るにこの三山歌は目録には「中大兄三山御歌」と「御」が入っているに就き、代匠記には「中大兄ハ天智天皇ナレバ尊トカ皇子トカ有ヌベキニヤ。傍例ニヨルニ尤有ベシ。三山ノ下ニ目録ニハ御ノ字アリ。脱セルカ」と云っている如く、古くから本文に「御」字の無い例がある。そして、「万葉集はその原本の儘に伝はり、改刪を経ざるものなるを思ふべし」(講義)を顧慮すると、目録の方の「御」は目録作製の時につけたものとも取れる。なお、この「御字」につき、「御字なきは転写のとき脱せる歟。但天皇に献り給ふ故に、献御歌とはかゝざる歟なるべし」(僻案抄)、「御歌としるさざるは、此は天皇に対し奉る所なるから、殊更に御ノ字をばかゝざりしならんか」(美夫君志)等の説をも参考とすることが出来る。

それから、攷證で、「この歌もし中皇命の御歌ならば、そを奉らせ給ふを取次せし人の名を、ことさらにかくべきよしなきをや」と云って、間人連老の作だという説に賛成しているが、これも、老が普通の使者でなくもっと中皇命との関係の深いことを示すので、特にその名を書いたと見れば解釈がつき、必ずしも作者とせずとも済むのである。考の別記に、「御歌を奉らせ給ふも老は御乳母の子などにて御睦き故としらる」とあるのは、事実は問わずとも、その思考の方嚮には間違は無かろうとおもう。諸注のうち、二説の分布状態は次の如くである。中皇命

作説(僻案抄・考・略解・燈・檜嬬手・美夫君志・左千夫新釈・講義)、間人連老作説(拾穂抄・代匠記・古義・攷證・新講・新解・評釈)。「たまきはる」は命、内、代等にかかる枕詞であるが諸説があって未詳である。仙覚・契沖・真淵らの霊極の説、即ち、「タマシヒノキハマル内の命」の意とする説は余り有力でないようだが、つまりは其処に落着くのではなかろうか。なお宣長の「あら玉来経る」説、即ち年月の経過する現という意。久老の「程来経る」説。雅澄の「手纏き佩く」説等がある。宇智と内と同音だからそう用いた。

一首の意は、今ごろは、(たまきはる)(枕詞)宇智の大きい野に沢山の馬をならべて朝の御猟をしたまい、その朝草を踏み走らせあそばすでしょう。露の一ぱいおいた草深い野が目に見えるようでございます、という程の御歌である。代匠記に、「草深キ野ニハ鹿ヤ鳥ナドノ多ケレバ、宇智野ヲホメテ再云也」。古義に、「けふの御かり御獲物多くして御興尽ざるべしとおぼしやりたるよしなり」とある。

作者が皇女でも皇后でも、天皇のうえをおもいたもうて、その遊猟の有様に聯想し、それを祝福する御心持が一首の響に滲透している。決して代作態度のよそよそしいものではない。そこで代作説に賛成する古義でも、「此題詞のこゝろは、契沖も云るごとく、中皇女のおほせによりて間人連老が作てたてまつれるなるべし。されど意はなほ皇女の御意を承りて、天皇に聞えあげたるなるべし」と云っているのは、この歌の調べに云うに云われぬ愛情の響があるためで、

古義は理論の上では間人連老の作だとしても、鑑賞の上では、皇女の御意云々を否定し得ないのである。此一事軽々に看過してはならない。それから、この歌はどういう形式によって献られたかというに、「皇女のよみ給ひし御歌を老に口誦して父天皇の御前にて歌はしめ給ふ也」(檜嬬手)というのが真に近いであろう。

一首は、豊腴にして荘潔、些の渋滞なくその歌調を完うして、日本古語の優秀な特色が隈なくこの一首に出ているとおもわれるほどである。句割れなどいうものは一つもなく、第三句で「て」を置いたかとおもうと、第四句で、「朝踏ますらむ」と流動的に据えて、小休止となり、結句で二たび起して重厚荘潔なる名詞止にしている。この名詞の結句にふかい感情がこもり余響が長いのである。作歌当時は言語が極めて容易に自然にこだわりなく運ばれたとおもうが、後代の私等には驚くべき力量として迫って来るし、「その」などという続けざまでも言語の妙いうべからざるものがある。長歌といいこの反歌といい、万葉集中最高峰の一つとして敬うべく尊むべきものだとおもうのである。

この長歌は、「やすみしし吾大王の、朝にはとり撫でたまひ、夕にはい倚り立たしし、御執らしの梓弓の、長弭(中弭)の音すなり、朝猟に今立たすらし、暮猟に今立たすらし、御執らしの梓弓の、長弭(中弭)の音すなり」(巻一・三)というのである。これも流動声調で、繰返しによって進行せしめている点は驚くべきほど優秀である。朝猟夕猟と云ったのは、声調のためである

が、実は、朝猟も夕猟もその時なされたと解することも出来るし、支那の古詩にもこの朝猟夕猟と続けた例がある。梓弓はアヅサユミノと六音で読む説が有力だが、「安都佐能由美乃」(巻十四・三五六七)によって、アヅサノユミノと訓んだ。その方が口調がよいからである。なお参考歌には、天武天皇御製に、「その雪の時なきが如、その雨の間なきが如、隈もおちず思ひつつぞ来る、その山道を」(巻一・二五)がある。なお山部赤人の歌に、「朝猟に鹿猪履み起し、夕狩に鳥ふみ立て、馬並めて御猟ぞ立たす、春の茂野に」(巻六・九二六)がある。赤人のには此歌の影響があるらしい。「馬なめて」もよい句で、「友なめて遊ばむものを、馬なめて往かまし里を」(巻六・九四八)という用例もある。

○

山越の風を時じみ寝る夜落ちず家なる妹をかけて偲びつ　〔巻一・六〕　軍王

舒明天皇が讃岐国安益郡に行幸あった時、軍王の作った長歌の反歌である。軍王の伝は不明であるが、或は固有名詞でなく、大将軍のことかも知れない(近時題詞の軍王見山を山の名だとする説がある)。天皇の十一年十二月伊豫の温湯の宮に行幸あったから、そのついでに讃岐安益郡(今の綾歌郡)にも立寄られたのであっただろうか。「時じみ」は非時、不時などとも書

き、時ならずという意。「寝る夜おちず」は、寝る毎晩毎晩欠かさずにの意。「かけて」は心にかけての意である。

一首の意は、山を越して、風が時ならず吹いて来るので、ひとり寝る毎夜毎夜、家に残っている妻を心にかけて思い慕うた、というのである。言葉が順当に運ばれて、作歌感情の極めて素直にあらわれた歌であるが、さればといって平板に失したものでなく、捉うべきところは決して免がしてはいない。「山越しの風」は山を越して来る風の意だが、これなども、正岡子規が嘗て注意した如く緊密で巧な云い方で、この句があるために、一首が具体的に緊まって来た。この語には、「朝日かげにほへる山に照る月の飽かざる君を山越に置きて」(巻四・四九五)の例が参考となる。また、「かけて偲ぶ」という用例は、その他の歌にもあるが、心から離さずにいるという気持で、自然的に同感を伴うために他にも用例が出来たのである。併しこの「懸く」という如き云い方はその時代に発達した云い方であるので、現在の私等が直ちにそれを取って歌語に用い、心の直接性を得るという訣に行かないから、私等は、語そのものよりも、その語の出来た心理を学ぶ方がいい。なおこの歌で学ぶべきは全体としてのその古調である。第三句の字余りなどでもその破綻を来さない微妙な点と、「風を時じみ」の如く圧搾した云い方と、結句の「つ」止めと、そういうものが相待って綜合的な古調を成就しているところを学ぶべきである。第三句の字余りは、人麿の歌にも、「幸くあれど」等があるが、後世の第三句の字余りとは

趣がちがうので破綻云々と云った。「つ」止めの参考歌には、「越の海の手結の浦を旅にして見ればともしみ大和しぬびつ」(巻三・三六七)等がある。

○

秋の野のみ草苅り葺き宿れりし兎道の宮処の仮廬し思ほゆ　(巻一・七)　　額田王

額田王の歌だが、どういう時に詠んだものか審かでない。ただ兎道は山城の宇治で、大和と近江との交通路に当っていたから、行幸などの時に仮の御旅宿を宇治に設けたもうたことがあったのであろう。その時額田王は供奉し、後に当時を追懐して詠んだものと想像していい。額田王は、額田姫王と書紀にあるのと同人だとすると、額田王は鏡王の女で、鏡女王の妹であったようだ。初め大海人皇子と御婚して十市皇女を生み、ついで天智天皇に寵せられ近江京に行っていた。「かりいほ」は、原文「仮五百」であるが真淵の考では、カリホと訓んだ。

一首の意。嘗て天皇の行幸に御伴をして、山城の宇治で、秋の野のみ草(薄・萱)を刈って葺いた行宮に宿ったときの興深かったさまがおもい出されます。

この歌は、独詠的の追懐であるか、或は対者にむかってこういうことを云ったものか不明だが、単純な独詠ではないようである。意味の内容がただこれだけで取りたてていうべき曲が無

いが、単純素朴のうちに浮んで来る写象は鮮明で、且つその声調は清潔である。また単純な独詠歌でないと感ぜしめるその情味が、この古調の奥から伝わって来るのをおぼえるのである。この古調は貴むべくこの作者は凡ならざる歌人であった。

歌の左注に、山上憶良の類聚歌林に、一書によれば、戊申年、比良宮に行幸の時の御製云々とある。この戊申の歳を大化四年とすれば、孝徳天皇の御製ということになるが、今は額田王の歌として味うのである。題詞等につき、万葉の編輯当時既に異伝があったこと斯くの如くである。

○

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ
今は榜ぎ出でな　〔巻一・八〕　額田王

斉明天皇が(斉明天皇七年正月)新羅を討ちたまわんとして、九州に行幸せられた途中、暫時伊豫の熟田津に御滞在になった(熟田津石湯の行宮)。其時お伴をした額田王の詠んだ歌である。熟田津という港は現在何処かというに、松山市に近い三津浜だろうという説が有力であったが、今はもっと道後温泉に近い山寄りの地(御幸寺山附近)だろうということになっている。即ち現在はもはや海では無い。

一首の意は、伊豫の熟田津で、御船が進発しようと、月を待っていると、いよいよ月も明月となり、潮も満ちて船出するのに都合好くなった。さあ榜ぎ出そう、というのである。

「船乗り」は此処ではフナノリという名詞に使って居り、人麿の歌にも、「船乗りすらむをとめらが」(巻一・四〇)があり、また、「播磨国より船乗して」(遣唐使時奉幣祝詞)という用例がある。また、「月待てば」は、ただ月の出るのを待てばと解する説もあるが、此は満潮を待つのであろう。月と潮汐とには関係があって、日本近海では大体月が東天に上るころ潮が満始るから、この歌で月を待つというのはやがて満潮を待つということになる、また書紀の、「庚戌泊二于伊豫熟田津石湯行宮一」とある庚戌は十四日に当る。三津浜では現在陰暦の十四日頃は月の上る午後七、八時頃八合満となり午後九時前後に満潮となるから、此歌は恰も大潮の満潮に当ったこととなる。すなわち当夜は月明であっただろう。月が満月でほがらかに潮も満潮でゆたかに、一首の声調大きくゆらいで、古今に稀なる秀歌として現出した。そして五句とも句割がなくて整調し、句と句との続けに、「に」、「と」、「ば」、「ぬ」等の助詞が極めて自然に使われているのに、「船乗せむと」、「榜ぎいでな」という具合に流動の節奏を以て緊めて、それが第二句と結句である点などをも注意すべきである。結句は八音に字を余し、「今は」というのも、なかなか強い語である。この結句は命令のような大きい語気であるが、縦い作者は女性であっても、集団的に心が融合し、大御心をも含め奉った全体的なひびきとしてこの表現があるのである。供

奉応詔歌の真髄もおのずからここに存じていると看ればいい。

結句の原文は、「許芸乞菜」で、旧訓コギコナであったが、代匠記初稿本で、「こぎ出なとよむべきか」という一訓を案じ、万葉集燈でコギイデナと定めるに至った。「乞」をイデと訓む例は、「乞我君」、「乞我駒」などで、元来さあさあと促がす詞であるのだが「出で」と同音だから借りたのである。一字の訓で一首の価値に大影響を及ぼすこと斯くの如くである。また初句の「熟田津に」の「に」は、「に於て」の意味だが、橘守部は、「に向って」の意味に解したけれどもそれは誤であった。斯く一助詞の解釈の差で一首の意味が全く違ってしまうので、訓詁の学の大切なことはこれを見ても分かる。

なお、この歌は山上憶良の類聚歌林に拠ると、斉明天皇が舒明天皇の皇后であらせられた時一たび天皇と共に伊豫の湯に御いでになられ、それから斉明天皇の七年に二たび伊豫の湯に御いでになられて、往時を追懐遊ばされたとある。そうならば此歌は斉明天皇の御製であろうかと左注で云っている。若しそれが本当で、前に出た宇智野の歌の中皇命が斉明天皇のお若い時(舒明皇后)だとすると、この秀歌を理会するにも便利だとおもうが、此処では題どおりに額田王の歌として鑑賞したのであった。

橘守部は、「熟田津に」を「に向って」と解し、「此歌は備前の大伯より伊与の熟田津へ渡らせ給ふをりによめるにこそ」と云ったが、それは誤であった。併し、「に」に方嚮(到着地)を示す用例は無いかというに、やはり用例はあるので、「粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門浪いまだ騒げり」(巻七・一二〇七)。この歌の「に」は方嚮を示している。

○

紀の国の山越えて行け吾が背子がい立たせり
けむ厳橿がもと　〔巻一・九〕　額田王

紀の国の温泉に行幸(斉明)の時、額田王の詠んだ歌である。原文は、「莫囂円隣之、大相七兄爪謁気、吾瀬子之、射立為兼、五可新何本」というので、上半の訓がむずかしいため、種々の訓があって一定しない。契沖が、「此歌ノ書ヤウ難儀ニテ心得ガタシ」と歎じたほどで、此儘では訓は殆ど不可能だと謂っていい。そこで評釈する時に、一首として味うことが出来ないから回避するのであるが、私は、下半の、「吾が背子がい立たせりけむ厳橿が本」に執着があるので、この歌を選んで仮りに真淵の訓に従って置いた。下半の訓は契沖の訓(代匠記)であるが、古義では第四句を、「い立たしけむ」と六音に訓み、それに従う学者が多い。厳橿は厳かな橿の樹で、神のいます橿の森をいったものであろう。その樹の下に嘗て私の恋しいお方が立っておいでになった、という追憶であろう。或は相手に送った歌なら、「あなたが嘗てお立ちなされたとうかがいましたその橿の樹の下に居ります」という意になるだろう。この句は厳かな気持

を起させるもので、単に句として抽出するなら万葉集中第一流の句の一つと謂っていい。書紀垂仁巻に、天皇以二倭姫命一為二御杖一貢二奉於天照大神一是以倭姫命以二天照大神一鎮二坐磯城厳橿之本一とあり、古事記雄略巻に、美母呂能、伊都加斯賀母登、加斯賀母登、由由斯伎加母、加志波良袁登売、云々とある如く、神聖なる場面と関聯し、橿の木がそのあたり一帯に茂っていたものと見て、そういうことを種々念中に持ってこの句を味うこととしていた。考頭注に、「このかしは神の坐所の斎木なれば」云々。古義に、「清浄なる橿といふ義なるべければ」云々の如くであるが、私は、大体を想像して味うにとどめている。

さて、上の句の訓はいろいろあるが、皆あまりむずかしくて私の心に遠いので、差向き真淵訓に従った。真淵は、「円(圓)」を「国(國)」だとし、古兄氐湯気だとした。考に云、「こはまづ神武天皇紀に依に、今の大和国を内つ国といひつ。さて其内つ国を、こゝに囂なき国と書たり。同紀に、雖辺土未清余妖尚梗而、中洲之地無風塵てふと同意なるにて知ぬ。かくてその隣とは、此度は紀伊国を差也。然れば莫囂国隣之の五字は、紀乃久爾乃と訓べし。又右の紀に、辺土と中州を対云しに依ては、此五字を外つ国のとも訓べし。然れども云々の隣と書しからは、遠き国は本よりいはず、近きをいふなる中に、一国をさゝでは此哥にかなはず、次下に、三輪山の事を綜麻形と書なせし事など相似たるに依ても、猶上の訓を取るべし」とあり、なお真淵は、「こは荷田大人のひめ哥也。さて此哥の初句と、斉明天皇紀の童謡とをば、はやき世より

よく訓人なければとて、彼童謡をば己に、此哥をばそのいろと荷田ノ信名ノ宿禰に伝へられき。其後多く年経て此訓をなして、山城の稲荷山の荷田の家に問に、全く古大人の訓に均しといひおこせたり。然れば惜むべきを、ひめ隠しおかば、荷田大人の功も徒に成なんと、我友皆いへればしるしつ」という感慨を漏らしている。書紀垂仁天皇巻に、伊勢のことを、「傍国の可怜国なり」と云った如くに、大和に隣った国だから、紀の国を考えたのであっただろうか。

古義では、「三室の大相土見乍湯家吾が背子がい立たしけむ厳橿が本」と訓み、奠器円レ隣でミモロと訓み、神祇を安置し奉る室の義とし、古事記の美母呂能伊都加斯賀母登を参考とした。そして真淵説を、「紀ノ国の山を超て何処に行とすべけむや、無用説といふべし」と評したが、併しこの古義の言は、「紀の国の山をこえていづくにゆくにや」と荒木田久老が信濃漫録で云ったその模倣である。真淵訓の「紀の国の山越えてゆけ」は、調子の弱いのは残念である。この訓は何処か弛んでいるから、調子の上からは古義の訓の方が緊張している。「吾が背子」は、或は大海人皇子(考・古義)で、京都に留まって居られたのかと解している。そして真淵訓に仮りに従うとすると、「紀の国の山を越えつつ行けば」の意となる。紀の国の山を越えて旅して行きますと、あなたが嘗てお立ちになったと聞いた神の森のところを、わたくしも丁度通過して、なつかしくおもうております、というぐらいの意になる。

○

吾背子は仮廬作らす草なくば小松が下の草を
苅らさね　〔巻一・一一〕　　中皇命

中皇命が紀伊の温泉に行かれた時の御歌三首あり、この歌は第二首である。中皇命は前言した如く不明だし、前の中皇命と同じ方かどうかも分からない。天智天皇の皇后倭姫命だろうという説(喜田博士)もあるが未定である。若し同じおん方だろうとすると、皇極天皇(斉明天皇)に当らせ給うことになるから、この歌は後崗本宮御宇天皇(斉明)の処に配列せられているけれども、或は天皇がもっとお若くましました頃の御歌ででもあろうか。

一首の意は、あなたが今旅のやどりに仮小舎をお作りになっていらっしゃいますが、若し屋根葺く萱草が御不足なら、彼処の小松の下の萱草をお刈りなさいませ、というのである。

中皇命は不明だが、歌はうら若い高貴の女性の御語気のようで、その単純素朴のうちにいいがたい香気のするものである。こういう語気は万葉集でも後期の歌にはもはや感ずることの出来ないものである。「わが背子は」というのは客観的のいい方だが、実は、「あなたが」というので、当時にあってはこういう云い方には深い情味をこもらせ得たものであっただろう。そのほか穿鑿すればいろいろあって、例えばこの歌には加行の音が多い、そしてカの音を繰返した

調子であるというような事であるが、それは幾度も吟誦すれば自然に分かることだから今はこまかい詮議立は罷めることにする。契沖は、「我が背子」を「御供ノ人ヲサシ給ヘリ」といったが、やはりそうでなく御一人をお指し申したのであろう。また、この歌に「小松にあやかりて、ともにおひさきも久しからむと、これ又長寿をねがふうへにのみして詞をつけさせ給へるなり」(燈)という如き底意があると説く説もあるが、これも現代人の作歌稽古のための鑑賞ならば、この儘で素直に受納れる方がいいようにおもう。

○

吾が欲りし野島は見せつ底ふかき阿胡根の浦
の珠ぞ拾はぬ　〔巻一・一二〕　　中皇命

前の続きで、中皇命の御歌の第三首である。野島は紀伊の日高郡日高川の下流に名田村大字野島*があり、阿胡根の浦はその海岸である。珠は美しい貝又は小石。中には真珠も含んで居る。「紀のくにの浜に寄るとふ、鰒珠ひりはむといひて」(巻十三・三三一八)は真珠である。

一首の意は、わたくしの希っていた野島の海浜の景色はもう見せていただきました。けれど、底の深い阿胡根浦の珠はいまだ拾いませぬ、というので、うちに此処深海の真珠が欲しいものでございますという意も含まっている。

「野島は見せつ」は自分が人に見せたように聞こえるが、此処は見せて頂いたの意で、散文なら、「君が吾に野島をば見せつ」という具合になる。この歌も若い女性の口吻で、純真澄み透るほどな快いひびきを持っている。そして一首は常識的な平板に陥らず、末世人が舌不足と難ずる如き渋みと厚みとがあって、軽薄ならざるところに古調の尊さが存じている。これがあえて此種の韻文のみでなく、普通の談話にもこういう尊い香気があったものであろうか。この歌の稍主観的な語は、「わが欲りし」と、「底ふかき」とであって、知らず識らずあい対しているのだが、それが毫も目立っていない。

高市黒人の歌に、「吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ」(巻三・二七九)があり、この歌より明快だが、却って通俗になって軽くひびく。この場合の「見せつ」は、「吾妹子に猪名野をば見せつ」だから、普通のいい方で分かりよいが含蓄が無くなっている。現に中皇命の御歌も、或本には、「わが欲りし子島は見しを」となっている。これならば意味は分かりよいが、歌の味いは減るのである。第一首の、「君が代も我が代も知らむ(知れや)磐代の岡の草根をいざ結びてな」(巻一・一〇)も、生えておる草を結んで寿を祝う歌で、「代」は「いのち」即ち寿命のことである。まことに佳作だから一しょにして味うべきである。以上の三首を憶良の類聚歌林には、「天皇御製歌」とあるから、皇極(斉明)天皇と想像し奉り、その中皇命時代の御作とでも想像し奉るか。

○

香具山と耳梨山と会ひしとき立ちて見に来し
印南国原　〔巻一・一四〕　天智天皇

中大兄(天智天皇)の三山歌の反歌である。長歌は、「香具山は畝傍を愛しと、耳成と相争ひき、神代より斯くなるらし、古も然なれこそ、現身も妻を、争ふらしき」というのであるが、反歌の方は、この三山が相争った時、出雲の阿菩大神がそれを諫止しようとして出立し、播磨まで来られた頃に三山の争闘が止んだと聞いて、大和迄行くことをやめたという播磨風土記にある伝説を取入れて作っている。風土記には揖保郡の処に記載されてあるが印南の方にも同様の伝説があったものらしい。「会ひし時」は「相戦った時」、「相争った時」という意味である。書紀神功皇后巻に、「いざ会はなわれは」とあるは相闘う意。毛詩に、「肆伐二大商一会朝清明」とあり、「会える朝」は即ち会戦の旦也と注せられた。共に同じ用法である。この歌の「立ちて見に来し」の主格は、それだから阿菩大神になるのだが、それが一首のうえにはあらわれていない。そこで一読しただけでは、印南国原が立って見に来たように受取れるのであるが、結句の「印南国原」は場処を示すので、大神の来られたのは、此処の印南国原であった、という意味になる。

一首に主格も省略し、結句に、「印南国原」とだけ云って、その結句に助詞も助動詞も無いものだが、それだけ散文的な通俗を脱却して、蒼古とも謂うべき形態と響きとを持っているものである。長歌が蒼古峻厳の特色を持っているが、この反歌もそれに優るとも劣ってはいない。この一首の単純にしてきびしい形態とその響とは、恐らくは婦女子等の鑑賞に堪えざるものであろう。一首の中に三つも固有名詞が入っていて、毫も不安をおぼえしめないのは衷心驚くべきである。後代にしてかかるところを稍悟入し得たものは歌人として平賀元義ぐらいであっただろう。「中大兄」は、考ナカツオホエ、古義ナカチオホエ、と訓んでいる。

○

渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清明け

くこそ　〔巻一・一五〕　天智天皇

此歌は前の三山の歌の次にあるから、やはり中大兄の御歌(反歌)の一つに取れるが、左注に今案不レ似二反歌一也とあるから編輯当時既に三山の歌とすることは疑われていたものであろう。併し三山の歌とせずに、同一作者が印南野海浜あたりで御作りになった叙景の歌と看做せば解釈が出来るのである。

大意。今、浜べに立って見わたすに、海上に大きい旗のような雲があって、それに赤く夕日の光が差している。この様子では、多分今夜の月は明月だろう。

結句の原文、「清明己曾」は旧訓スミアカクコソであったのを、真淵がアキラケクコソと訓んだ。そうすれば、アキラケクコソアラメという推量になるのである。山田博士の講義に、「下にアラメといふべきを略せるなり。かく係助詞にて止め、下を略するは一種の語格なり」と云ってある。「豊旗雲」は、「豊雲野神」、「豊葦原」、「豊秋津州」、「豊御酒」、「豊祝」などと同じく「豊」に特色があり、古代日本語の優秀を示している一つである。以上のように解してこの歌を味えば、荘麗ともいうべき大きい自然と、それに参入した作者の気魄と相融合して読者に迫って来るのであるが、如是荘大雄厳の歌詞というものは、遂に後代には跡を断った。万葉を崇拝して万葉調の歌を作ったものにも絶えて此歌に及ぶものがなかった。その何故であるかを吾等は一たび省ねばならない。後代の歌人等は、渾身を以て自然に参入してその写生をするだけの意力に乏しかったためで、この実質と単純化とが遂に後代の歌には見られなかったのである。第三句の、「入日さし」と中止法にしたところに、小休止があり、不即不離に第四句に続いているところに歌柄の大きさを感ぜしめる。結句の推量も、赤い夕雲の光景から月明を直覚した、素朴で人間的直接性を有っている。(願望とする説は、心が稍間接となり、技巧的となる。)

「清明」を真淵に従ってアキラケクと訓んだが、これには諸訓があって未だ一定していない。

旧訓スミアカクコソで、此は随分長く行われた。然るに真淵は考でアキラケクコソと訓み、「今本、清明の字を追て、すみあかくと訓しは、万葉をよむ事を得ざるものぞ、紀にも、清白心をあきらけきこゝろと訓し也」と云った。古義では、「アキラケクといふは古言にあらず」として、キヨクテリコソと訓み、明は照の誤写だろうとした。なおその他の訓を記せば次のごとくである。スミアカリコソ(京大本)。サヤケシトコソ(春満)。サヤケクモコソ(秋成)。マサヤケクコソ(古泉千樫)。サヤニテリコソ(佐佐木信綱)。キヨクアカリコソ(武田祐吉・佐佐木信綱)。マサヤケミコソ(品田太吉)。サヤケカリコソ(三矢重松・斎藤茂吉・森本治吉)。キヨラケクコソ(松岡静雄・折口信夫)。マサヤカニコソ(沢瀉久孝)等の諸訓がある。けれども、今のところ皆真淵訓には及び難い感がして居るので、自分も真淵訓に従った。真淵のアキラケクコソの訓は、古事記伝・略解・燈・檜嬬手・攷證・美夫君志・註疏・新考・講義・新講等皆それに従っている。ただ、燈・美夫君志等は意味を違えて取った。

さて、結句の「清明己曾」をアキラケクコソと訓んだが、これに異論を唱える人は、万葉時代には月光の形容にキヨシ、サヤケシが用いられ、アカシ、アキラカ、アキラケシの類は絶対に使わぬというのである。成程万葉集の用例を見れば大体そうである。けれども「絶対に」使わぬなどとは云われない。「日月波、安可之等伊倍騰、安我多米波、照哉多麻波奴」(巻五・八九二)という憶良の歌は、明瞭に日月の光の形容にアカシを使っているし、「月読明少夜者更下乍」(巻七・

一〇七五)でも月光の形容にアカリを使っているのである。平安朝になってからは、「秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり」(古今・秋上)、「桂川月のあかきにぞ渡る」(土佐日記)等をはじめ用例は多い。併し万葉時代と平安朝時代との言語の移行は暫時的・流動的なものだから、突如として変化するものでないことは、この実例を以ても証明することが出来たのである。約めていえば、万葉時代に月光の形容にアカシを用いた。

次に、「安我己許呂安可志能宇良爾」(巻十五・三六二七)、「吾情清隅之池之」(巻十三・三二八九)、「加久佐波奴安加吉許己呂乎」(巻二十 四四六五)、「汝心之清明」、「我心清明故」(古事記・上巻)、「有二清心一」(書紀神代巻)、「浄伎明心乎持弖」(続紀・巻十)等の例を見れば、心あかし、心きよし、あかき心、きよき心は、共通して用いられたことが分かるし、なお、「敷島のやまとの国に安伎良気伎名に負ふものを心つとめよ」(巻二十・四四六六)、「つるぎ大刀いよよ研ぐべし古へゆ佐夜気久於比弖来にしその名ぞ」(同・四四六七)の二首は、大伴家持の連作で、二つとも「名」を咏んでいるのだが、アキラケキとサヤケキとの流用を証明しているのである。そして、「春日山押して照らせる此月は妹が庭にも清有家里」(巻七・一〇七四)は、月光にサヤケシを用いた例であるから、以上を綜合して観るに、アキラケシ、サヤケシ、アカシ、キヨシ、などの形容詞は互に共通して用いられ、互に流用せられたことが分かる。新撰字鏡に、明。阿加之、佐也加爾在、佐也介之、明介志(阿支良介之)等とあり、類聚名義抄に、明可在月 アキラカナリ、

ヒカル等とあるのを見ても、サヤケシ、アキラケシの流用を認め得るのである。結論、万葉時代に月光の形容にアキラケシと使ったと認めて差支ない。

次に、結句の「己曾」であるが、これも万葉集では、結びにコソと使って、コソアラメと云った例は絶対に無いという反対説があるのだが、平安朝になると、形容詞からコソにつづけてアラメを省略した例は、「心美しきこそ」、「いと苦しくこそ」、「いとほしうこそ」、「片腹いたくこそ」等をはじめ用例が多いから、それがもっと時代が溯っても、日本語として、絶対に使わなかったとは謂えぬのである。特に感動の強い時、形式の制約ある時などにこの用法が行われたと解釈すべきである。なお、安伎良気伎、明久、左夜気伎、左夜気久は謂ゆる乙類の仮名で、形容詞として活用しているのである。結論、アキラケク・コソという用法は、アキラケク・コソ・アラメという用法に等しいと解釈して差支ない。（本書は簡約を目的としたから大体の論にとどめた。別論がある。）

以上で、大体解釈が終ったが、この歌には異った解釈即ち、今は曇っているが、今夜は月明になって欲しいものだと解釈する説（燈・古義・美夫君志等）、或は、第三句までは現実だが、下の句は願望で、月明であって欲しいという説（選釈・新解等）があるのである。而して、「今夜の月さやかにあれかしと希望給ふなり」（古義）というのは、キヨクテリコソと訓んで、連用言から続いたコソの終助詞即ち、希望のコソとしたから自然この解釈となったのである。結句を推量とするか、希望とするか、鑑賞者はこの二つの説を受納れて、相比較しつつ味うことも亦可能である。そしていずれが歌として優るかを判断すべきである。

○

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠

さふべしや　（巻一・一八）　額田王

この歌は作者未定である。併し、「額田王下二近江一時作歌、井戸王即和歌」という題詞があるので、額田王作として解することにする。「味酒三輪の山、青丹よし奈良の山の、山のまにい隠るまで、道の隈い積るまでに、委にも見つつ行かむを、しばしばも見放けむ山を、心なく雲の、隠さふべしや」という長歌の反歌である。「しかも」は、そのように、そんなにの意。

一首の意は、三輪山をばもっと見たいのだが、雲が隠してしまった。そんなにも隠すのか、縦い雲でも情があってくれよ。こんなに隠すという法がないではないか、というのである。

「あらなむ」は将然言につく願望のナムであるが、山田博士は原文の「南畝」をナモと訓み、「情アラナモ」とした。これは古形で同じ意味になるが、類聚古集に「南武」とあるので、暫く「情アラナム」に従って置いた。その方が、結句の響に調和するとおもったからである。結句の「隠さふべしや」の「や」は強い反語で、「隠すべきであるか、決して隠すべきでは無い」

ということになる。長歌の結末にもある句だが、それを短歌の結句にも繰返して居り、情感がこの結句に集注しているのである。この作者が抒情詩人として優れている点がこの一句にもあらわれており、天然の現象に、恰も生きた人間にむかって物言うごとき態度に出て、毫も厭味を感じないのは、直接であからさまで、擬人などという意図を余り意識しないからである。これを試に、在原業平の、「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」(古今・雑上)などと比較するに及んで、更にその特色が瞭然として来るのである。

カクサフはカクスをハ行四段に活用せしめたもので、時間的経過をあらわすこと、チル、チラフと同じい。「奥つ藻を隠さふなみの五百重浪」(巻十一・二四三七)、「隠さはぬあかき心を、皇方に極めつくして」(巻二十・四四六五)の例がある。なおベシヤの例は、「大和恋ひいの寝らえぬに情なくこの渚の埼に鶴鳴くべしや」(巻一・七一)、「出でて行かむ時しはあらむを故らに妻恋しつつ立ちて行くべしや」(巻四・五八五)、「海つ路の和ぎなむ時も渡らなむかく立つ浪に船出すべしや」(巻九・一七八一)、「たらちねの母に障らばいたづらに汝も吾も事成るべしや」(巻十一・二五一七)等である。

○

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る　〔巻一・二〇〕　額田王

天智天皇が近江の蒲生野に遊猟(薬猟)したもうた時(天皇七年五月五日)、皇太子(大皇弟、大海人皇子)諸王・内臣・群臣が皆従った。その時、額田王が皇太子にさしあげた歌である。額田王ははじめ大海人皇子に婚い十市皇女を生んだが、後天智天皇に召されて宮中に侍していた。この歌は、そういう関係にある時のものである。「あかねさす」は紫の枕詞。「紫野」は染色の原料として紫草を栽培している野。「標野」は御料地として濫りに人の出入を禁じた野で即ち蒲生野を指す。「野守」はその御料地の守部即ち番人である。

一首の意は、お慕わしいあなたが紫草の群生する蒲生のこの御料地をあちこちとお歩きになって、私に御袖を振り遊ばすのを、野の番人から見られはしないでしょうか。それが不安心でございます、というのである。

この「野守」に就き、或は天智天皇を申し奉るといい、或は諸臣のことだといい、皇太子の御思い人だといい、種々の取沙汰があるが、其等のことは奥に潜めて、野守は野守として大体を味う方が好い。また、「野守は見ずや君が袖ふる」をば、「立派なあなた(皇太子)の御姿を野

守等よ見ないか」とうながすように解する説もある。「袖ふるとは、男にまれ女にまれ、立ありくにも道など行くにも、そのすがたの、なよくとをかしげなるをいふ」(攷證)。「わが愛する皇太子がかの野をか行きかく行き袖ふりたまふ姿をば人々は見ずや。われは見るからにゑましきにとなり」(講義)等である。併し、袖振るとは、「わが振る袖を妹見つらむか」(人麿)というのでも分かるように、ただの客観的な姿ではなく、恋愛心表出のための一つの行為と解すべきである。

この歌は、額田王が皇太子大海人皇子にむかい、対詠的にいっているので、濃やかな情緒に伴う、甘美な媚態をも感じ得るのである。「野守は見ずや」と強く云ったのは、一般的に云って居るようで、寧ろ皇太子に愬えているのだと解して好い。そういう強い句であるから、その句を先きに云って、「君が袖振る」の方を後に置いた。併しその倒句は単にそれのみではなく、結句としての声調に、「袖振る」と止めた方が適切であり、また女性の語気としてもその方に直接性があるとおもうほど微妙にあらわれて居るからである。甘美な媚態云々というのには、「紫野ゆき標野ゆき」と対手の行動をこまかく云い現して、語を繰返しているところにもあらわれている。一首は平板に直線的でなく、立体的波動的であるがために、重厚な奥深い響を持つようになった。先進の注釈書中、この歌に、大海人皇子に他に恋人があるので嫉ましいと解したり(燈・美夫君志)、或は、戯れに諭すような分子があると説いたのがあるのは(考)、一首の甘美な愬えに触れたためであろう。

「袖振る」という行為の例は、「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」(巻二・一三二)、「凡ならばかもかも為むを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも」(巻六・九六五)、「高山の岑行く鹿の友を多み袖振らず来つ忘ると念ふな」(巻十一・二四九三)などである。

○

紫草のにほへる妹を憎くあらば人嬬ゆゑにあれ恋ひめやも　〔巻一・二一〕　天武天皇

右(二〇)の額田王の歌に対して皇太子(大海人皇子、天武天皇)の答えられた御歌である。

一首の意は、紫の色の美しく匂うように美しい妹(おまえ)が、若しも憎いのなら、もはや他人の妻であるおまえに、かほどまでに恋する筈はないではないか。そういうあぶないことをするのも、おまえが可哀いからである、というのである。

この「人妻ゆゑに」の「ゆゑに」は「人妻だからと云って」というのでなく、「人妻に由って恋う」と、「恋う」の原因をあらわすのである。「人妻ゆゑにわれ恋ひにけり」、「ものもひ痩せぬ人の子ゆゑに」、「わがゆゑにいたくなわびそ」等、これらの例万葉に甚だ多い。恋人を花に譬えたのは、「つつじ花にほえ少女、桜花さかえをとめ」(巻十三・三三〇九)等がある。

この御歌の方が、額田王の歌に比して、直接で且つ強い。これはやがて女性と男性との感情表出の差別ということにもなるとおもうが、恋人をば、高貴で鮮麗な紫の色にたぐえたりしながら、然かもこれだけの複雑な御心持を、直接に力づよく表わし得たのは驚くべきである。そしてその根本は心の集注と純粋ということに帰着するであろうか。自分はこれを万葉集中の傑作の一つに評価している。集中、「憎し」という語のあるものは、「憎くもあらめ」の例があり、「憎くあらなくに」、「憎からなくに」の例もある。この歌に、「憎」の語と、「恋」の語と二つ入っているのも顧慮してよく、毫も調和を破っていないのは、憎い(嫌い)ということと、恋うということが調和を破っていないがためである。この贈答歌はどういう形式でなされたものか不明であるが、恋愛贈答歌には縦い切実なものでも、底に甘美なものを蔵している。ゆとりの遊びを蔵しているのは止むことを得ない。なお、巻十二(二九〇九)に、「おほろかに吾し思はば人妻にありちふ妹に恋ひつつあらめや」という歌があって類似の歌として味うことが出来る。

○

河上の五百箇磐群に草むさず常にもがもな常処女にて　(巻一・二二)　吹黄刀自

十市皇女(御父大海人皇子、御母額田王)が伊勢神宮に参拝せられたとき、皇女に従った吹黄刀自が波多横山の巌を見て詠んだ歌である。波多の地は詳でないが、伊勢壱志郡八太村*の辺だろうと云われている。

一首の意は、この河の辺の多くの巌には少しも草の生えることがなく、綺麗で滑かである。そのようにわが皇女の君も永久に美しく容色のお変りにならないでおいでになることをお願いいたします、というのである。

「常少女」という語も、古代日本語の特色をあらわし、まことに感歎せねばならぬものである。今ならば、「永遠処女」などというところだが、到底この古語には及ばない。作者は恐らく老女であろうが、皇女に対する敬愛の情がただ純粋にこの一首にあらわれて、単純古調のこの一首を吟誦すれば寧ろ荘厳の気に打たれるほどである。古調という中には、一つ一つの語にいい知れぬ味いがあって、後代の吾等は潜心その吟味に努めねばならぬもののみであるが、第三句の「草むさず」から第四句への聯絡の具合、それから第四句で切って、結句を「にて」にて止めたあたり、皆繰返して読味うべきもののみである。この歌の結句と、「野守は見ずや君が袖ふる」などと比較することもまた極めて有益である。

「常」のついた例には、「相見れば常初花に、情ぐし眼ぐしもなしに」(巻十七・三九七八)、「その立山に、常夏に雪ふりしきて」(同・四〇〇〇)、「白砥掘ふ小新田山の守る山の末枯れ為無な常葉にもがも」(巻十四・三四三六)等がある。

十市皇女は大友皇子(弘文天皇)御妃として葛野王を生んだが、壬申乱後大和に帰って居られた。皇女は天武天皇七年夏四月天皇伊勢斎宮に行幸せられんとした最中に卒然として薨ぜられたから、この歌はそれより前で、恐らく、四年春二月参宮の時でもあろうか。さびしい境遇に居られた皇女だから、老女が作ったこの祝福の歌もさびしい心を背景としたものとおもわねばならぬ。

○

うつせみの命を惜しみ波に濡れ伊良虞の島の玉藻苅り食す　〔巻一・二四〕　麻続王

麻続王が伊勢の伊良虞に流された時、時の人が、「うちそを麻続の王海人なれや伊良虞が島の玉藻刈ります」(巻一・二三)といって悲しんだ。「海人なれや」は疑問で、「海人だからであろうか」という意になる。この歌はそれに感傷して和えられた歌である。自分は命を愛惜してこのように海浪に濡れつつ伊良虞島の玉藻を苅って食べている、というのである。流人でも高貴の方だから実際海人のような業をせられなくとも、前の歌に「玉藻苅ります」といったから、「玉藻苅り食す」と云われたのである。なお結句を古義ではタマモカリハムと訓み、新考(井上)もそれに従った。この一首はあわれ深いひびきを持ち、特に、「うつせみの命ををしみ」の句に感慨の主点がある。万葉の歌には、「わたつみの豊旗雲に」の如き歌もあるが、またこういう切実な感傷の歌もある。悲しい声であるから、堂々とせずにヲシミ・ナミニヌレのあたりは、稍小きざみになっている。「いのち」のある例は、「たまきはる命惜しけど、せむ術もなし」(巻五・八〇四)、「たまきはる命惜しけど、為むすべのたどきを知らに」(巻十七・三九六二)等である。

麻続王が配流されたという記録は、書紀には因幡とあり、常陸風土記には行方郡板来村としてあり、この歌によれば伊勢だから、配流地はまちまちである。常陸の方は伝説化したものらしく、因幡・伊勢は配流の場処が途中変ったのだろうという説がある。そうすれば説明が出来るが、万葉の歌の方は伊勢として味ってかまわない。

○

春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山　〔巻一・二八〕　持統天皇

持統天皇の御製で、藤原宮址は現在高市郡鴨公村大字高殿小学校隣接の伝説地土壇を中心とする敷地であろうか。藤原宮は持統天皇の四年に高市皇子御視察、十二月天皇御視察、六年五月から造営をはじめ八年十二月に完成したから、恐らくは八年以後の御製で、宮殿から眺めたもうた光景ではなかろうかと拝察せられる。

一首の意は、春が過ぎて、もう夏が来たと見える。天の香具山の辺には今日は一ぱい白い衣を干している、というのである。

「らし」というのは、推量だが、実際を目前にしつついう推量である。「来る」は良行四段の動詞である。「み冬つき春は吉多礼登」(巻十七・三九〇二)「冬すぎて暖来良思」(巻十・一八四四)等の例がある。この歌は、全体の声調は端厳とも謂うべきもので、第二句で、「来るらし」と切り、第四句で、「衣ほしたり」と切って、「らし」と「たり」で伊列の音を繰返し一種の節奏を得ているが、人麿の歌調のように鋭くゆらぐというのではなく、やはり女性にまします御語気と感得することが出来るのである。そして、結句で「天の香具山」と名詞止めにしたのも一首を整正端厳にした。天皇の御代には人麿・黒人をはじめ優れた歌人を出したが、天皇に此御製あるを拝誦すれば、決して偶然でないことが分かる。

この歌は、第二句ナツキニケラシ(旧訓)、古写本中ナツゾキヌラシ(元暦校本・類聚古集)であったのを、契沖がナツキタルラシと訓んだ。第四句コロモサラセリ(旧訓)、古写本中、コロモホシタリ(古葉略類聚抄)、コロモホシタル(神田本)、コロモホステフ(細井本)等の訓があり、また、新古今集や小倉百人一首には、「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふあまの香具山」として載っているが、これだけの僅かな差別で一首全体に大きい差別を来すことを知らねばならぬ。現在鴨公村高殿の土壇に立って香具山の方を見渡すと、この御製の如何に実地的即ち写生的だかということが分かる。真淵の万葉考に、「夏のはじめつ比、天皇埴安の堤の上などに幸し給ふ時、かの家らに衣を懸ほして有を見まして、実に夏の来たるらし、衣をほしたりと、見ますまに〳〵のたまへる御歌也。夏は物打しめれば、万づの物ほすは常の事也。さては余りに事かろしと思ふ後世心より、附そへごと多かれど皆わろし。古への歌は言には風流なるも多かれど、心はただ打見打思ふがまゝにこそよめれ」と云ってあるのは名言だから引用しておく。なお、埴安の池は、現在よりももっと西北で、別所の北に池尻という小字があるがあのあたりだかも知れない。なお、橋本直香(私抄)は、香具山に登り給うての御歌と想像したが、併し御製は前言の如く、宮殿にての御吟詠であろう。土屋文明氏は明日香の浄御原の宮から山の陽の村里を御覧になられての御製と解した。

参考歌。「ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春たつらしも」(巻十・一八一二)、「いにしへの事は知らぬを我見ても久しくなりぬ天の香具山」(巻七・一〇九六)、「昨日こそ年は極てしか春霞春日の山にはや立ちにけり」(巻十・一八四三)、「筑波根に雪かも降らる否をかも愛しき児ろが布ほさるかも」(巻十四・三三五二)。僻案抄に、「只白衣を干したるを見そなはし給ひて詠給へる御歌と見るより外有べからず」といったのは素直な解釈であり、燈に、「春はと人のためめ奉れる事ありしか。又春のうちにと人に御ことよさし給ひし事のありけるが、それが期を過ぎたりければ、その人をそゝのかし、その期おくれたるを怨ませ給ふ御心なるべし」と云ったの

は、穿ち過ぎた解釈で甚だ悪いものである。こういう態度で古歌に対するならば、一首といえども正しい鑑賞は出来ない。

○

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ　〔巻一・三〇〕　柿本人麿

柿本人麿が、近江の宮(天智天皇大津宮)址の荒れたのを見て作った長歌の反歌である。大津宮(志賀宮)の址は、現在の大津市南滋賀町あたりだろうという説が有力で、近江の都の範囲は、其処から南へも延び、西は比叡山麓、東は湖畔迄至っていたもののようである。此歌は持統三年頃、人麿二十七歳ぐらいの作と想像している。「ささなみ」(楽浪)は近江滋賀郡から高島郡にかけ湖西一帯の地をひろく称した地名であるが、この頃には既に形式化せられている。

一首は、楽浪の志賀の辛崎は元の如く何の変はないが、大宮所も荒れ果てたし、むかし船遊をした大宮人も居なくなった。それゆえ、志賀の辛崎が、大宮人の船を幾ら待っていても待ち甲斐が無い、というのである。

「幸くあれど」は、平安無事で何の変はないけれどということだが、非情の辛崎をば、幾らか人間的に云ったものである。「船待ちかねつ」は、幾ら待っていても駄目だというのだから、これも人間的に云っている。歌調からいえば、第三句は字余りで、結句は四三調に緊まっている。全体が切実沈痛で、一点浮華の気をとどめて居らぬ。現代の吾等は、擬人法らしい表現に、陳腐を感じたり、反感を持ったりすることを止めて、一首全体の態度なり気魄なりに同化せんことを努むべきである。作は人麿としては初期のものらしいが、既にかくの如く円熟して居る。

○

ささなみの志賀の大曲よどむとも昔の人に亦も逢はめやも　〔巻一・三一〕　柿本人麿

右と同時に人麿の作ったもので、一首は、近江の湖水の大きく入り込んだ処、即ち大曲の水が人恋しがって、人懐かしく、淀んでいるけれども、もはやその大宮人等に逢うことが出来ない、というのである。大津の京に関係あった湖水の一部の、大曲の水が現在、人待ち顔に淀んでいる趣である。然るに、「オホワダ」をば大海即ち近江の湖水全体と解し、湖の水が勢多から宇治に流れているのを、それが停滞して流れなくなるとも、というのが、即ち「ヨドムトモ」であると仮定的に解釈する説(燈)があるが、それは通俗理窟で、人麿の歌にはそういう通俗理窟で解けない歌句が間々あることを知らねばならぬ。ここの「淀むとも」には現在の実感がもっと活きているのである。

この歌も感慨を籠めたもので、寧ろ主観的な歌である。前の歌の第三句に、「幸くあれど」とあったごとく、この歌の第三句にも、「淀むとも」とある、そこに感慨が籠められ、小休止があるようになるのだが、こういう云い方には、ややともすると一首を弱くする危険が潜むものである。然るに人麿の歌は前の歌もこの歌も、「船待ちかねつ」、「またも逢はめやも」と強く結んで、全体を統一しているのは実に驚くべきで、この力量は人麿の作歌の真率的な態度に本づくものと自分は解して居る。人麿は初期から斯ういう優れた歌を作っている。

○

いにしへの人にわれあれや楽浪の故き京を見れば悲しき　〔巻一・三二〕　高市古人

高市古人が近江の旧都を感傷して詠んだ歌である。然るに古人の伝不明で、題詞の下に或書云高市連黒人と注せられているので、黒人の作として味う人が多い。「いにしへの人にわれあれや」は、当今の普通人ならば旧都の址を見てもこんなに悲しまぬであろうが、こんなに悲しいのは、古の世の人だからであろうかと、疑うが如くに感傷したのである。この主観句は、相当によいので棄て難いところがある。なお、巻三(三〇五)に、高市連黒人の、「斯くゆゑに見じといふものを楽浪の旧き都を見せつつもとな」があって、やはり上の句が主観的である。けれども、此等の主観句は、切実なるが如くにして切実に響かないのは何故であるか。これは人麿ほどの心熱が無いということにもなるのである。

○

山川もよりて奉ふる神ながらたぎつ河内に船出するかも　〔巻一・三九〕　柿本人麿

持統天皇の吉野行幸の時、従駕した人麿の献ったものである。持統天皇の吉野行幸は前後三十二回(御在位中三十一回御譲位後一回)であるが、万葉集年表(土屋文明氏)では、五年春夏の交だろうと云っている。さすれば人麿の想像年齢二十九歳位であろうか。

一首の意は、山の神(山祇)も川の神(河伯)も、もろ共に寄り来って仕え奉る、現神として神そのままに、わが天皇は、この吉野の川の滝の河内に、群臣と共に船出したもう、というのである。

「滝つ河内」は、今の宮滝附近の吉野川で、水が強く廻流している地勢である。人麿は此歌を作るのに、謹んで緊張しているから、自然歌調も大きく荘厳なものになった。上半は形式的に響くが、人麿自身にとっては本気で全身的であった。そして、「滝つ河内」という現実をも免していないものである。一首の諧調音を分析すれば不思議にも加行の開口音があったりして、

種々勉強になる歌である。先師伊藤左千夫先生は、「神も人も相和して遊ぶ尊き御代の有様である」(万葉集新釈)と評せられたが、まさしく其通りである。第二句、原文「因而奉流」をヨリテ・ツカフルと訓んだが、ヨリテ・マツレルという訓もある。併しマツレルでは調が悪い。結句、原文、「船出為加母」は、フナデ・セスカモと敬語に訓んだのもある。

補記、近時土屋文明氏は「滝つ河内」はもっと下流の、下市町を中心とした越部、六田あたりだろうと考証した。

○

英虞の浦に船乗りすらむをとめ等が珠裳の裾
に潮満つらむか　(巻一・四〇)　柿本人麿

持統天皇が伊勢に行幸(六年三月)遊ばされた時、人麿は飛鳥浄御原宮(持統八年十二月六日藤原宮に遷居し給う)に留まり、その行幸のさまを思いはかって詠んだ歌である。初句、原文「嗚呼見浦爾」だから、アミノウラニと訓むべきである。併し史実上で、阿胡行宮云々とあるし、志摩に英虞郡があり、巻十五(三六一〇)の古歌というのが、「安胡乃宇良」だから、恐らく人麿の原作はアゴノウラで、万葉巻一のアミノウラは異伝の一つであろう。

一首は、天皇に供奉して行った多くの若い女官たちが、阿虞の浦で船に乗って遊楽する、その時にあの女官等の裳の裾が海潮に濡れるであろう、というのである。

行幸は、三月六日(陽暦三月三十一日)から三月二十日(陽暦四月十四日)まで続いたのだから、海浜で遊楽するのに適当な季節であり、若く美しい女官等が大和の山地から海浜に来て珍しがって遊ぶさまが目に見えるようである。そういう朗かで美しく楽しい歌である。然かも一首に「らむ」という助動詞を二つも使って、流動的歌調を成就しているあたり、やはり人麿一流と謂わねばならない。「玉裳」は美しい裳ぐらいに取ればよく、一首に親しい感情の出ているのは、女官中に人麿の恋人もいたためだろうと想像する向もある。

○

潮騒に伊良虞の島辺榜ぐ船に妹乗るらむか荒
き島回を　(巻一・四二)　柿本人麿

前の続きである。「伊良虞の島」は、三河渥美郡の伊良虞崎あたりで、「島」といっても崎でもよいこと、後出の「加古の島」のところにも応用することが出来る。

一首は、潮が満ちて来て鳴りさわぐ頃、伊良虞の島近く榜ぐ船に、供奉してまいった自分の女も乗ることだろう。あの浪の荒い島のあたりを、というのである。

この歌には、明かに「妹」とあるから、こまやかな情味があって余所余所しくない。そして、

この「妹乗るらむか」という一句が一首を統一してその中心をなしている。船に慣れないことに同情してその難儀をおもいやるに、ただ、「妹乗るらむか」とだけ云っている、そして、結句の、「荒き島回を」に応接せしめている。

○

吾背子はいづく行くらむ奥つ藻の名張の山を
今日か越ゆらむ　〔巻一・四三〕　　当麻麿の妻

当麻真人麿の妻が夫の旅に出た後詠んだものである。或は伊勢行幸にでも扈従して行った夫を偲んだものかも知れない。名張山は伊賀名張郡の山で伊勢へ越ゆる道筋である。「奥つ藻の」は名張へかかる枕詞で、奥つ藻は奥深く隠れている藻だから、カクルと同義の語ナバル(ナマル)に懸けたものである。

一首の意は、夫はいま何処を歩いていられるだろうか。今日ごろは多分名張の山あたりを越えていられるだろうか、というので、一首中に「らむ」が二つ第二句と結句とに置かれて調子を取っている。この「らむ」は、「朝踏ますらむ」あたりよりも稍軽快である。この歌は古来秀歌として鑑賞せられたのは万葉集の歌としては分かり好く口調も好いからであったが、そこに特色もあり、消極的方面もまたそこにあると謂っていいであろうか。併しそれでも古今集以下の歌などと違って、厚みのあるところ、名張山という現実を持って来たところ等に注意すべきである。

この歌は、巻四(五一一)に重出しているし、又集中、「後れゐて吾が恋ひ居れば白雲の棚引く山を今日か越ゆらむ」(巻九・一六八一)、「たまがつま島熊山の夕暮にひとりか君が山路越ゆらむ」(巻十二・三一九三)、「息の緒に吾が思ふ君は鶏が鳴く東の坂を今日か越ゆらむ」(同・三一九四)等、結句の同じものがあるのは注意すべきである。

○

阿騎の野に宿る旅人うちなびき寐も寝らめや
も古おもふに　〔巻一・四六〕　　柿本人麿

軽皇子が阿騎野(宇陀郡松山町附近の野)に宿られて、御父日並知皇子(草壁皇子)を追憶せられた。その時人麿の作った短歌四首あるが、その第一首である。軽皇子(文武天皇)の御即位は持統十一年であるから、此歌はそれ以前、恐らく持統六、七年あたりではなかろうか。

一首は、阿騎の野に今夜旅寝をする人々は、昔の事がいろいろ思い出されて、安らかに眠りがたい、というのである。「うち靡き」は人の寝る時の体の形容であるが、今は形式化せられている。「やも」は反語で、強く云って感慨を籠めている。「旅人」は複数で、軽皇子を主とし、

従者の人々、その中に人麿自身も居るのである。この歌は響に句々の揺ぎがあり、単純に過ぎてしまわないため、余韻おのずからにして長いということになる。

○

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり
見すれば月かたぶきぬ　〔巻一・四八〕　柿本人麿

これも四首中の一つである。一首の意は、阿騎野にやどった翌朝、日出前の東天に既に暁の光がみなぎり、それが雪の降った阿騎野にも映って見える。その時西の方をふりかえると、もう月が落ちかかっている、というのである。

この歌は前の歌にあるような、「古へおもふに」などの句は無いが、全体としてそういう感情が奥にかくれているもののようである。そういう気持があるために、「かへりみすれば月かたぶきぬ」の句も利くので、先師伊藤左千夫が評したように、「稚気を脱せず」というのは、稍酷ではあるまいか。人麿は斯く見、斯く感じて、詠歎し写生しているのであるが、それが即ち犯すべからざる大きな歌を得る所以となった。

「野に・かぎろひの」のところは所謂、句割れであるし、「て」、「ば」などの助詞で続けて行くときに、たるむ虞のあるものだが、それをたるませずに、却って一種渾沌の調を成就しているのは偉いとおもう。それから人麿は、第三句で小休止を置いて、第四句から起す手法の傾を有っている。そこで、伊藤左千夫が、「かへり見すれば」を、「俳優の身振めいて」と評したのは稍見当の違った感がある。

此歌は、訓がこれまで定まるのに、相当の経過があり、「東野のけぶりの立てるところ見て」などと訓んでいたのを、契沖、真淵等の力で此処まで到達したので、後進の吾等はそれを忘却してはならぬのである。守部此歌を評して、「一夜やどりたる曠野のあかつきがたのけしき、めに見ゆるやうなり。此かぎろひは旭日の余光をいへるなり」(緊要)といった。

○

日並の皇子の尊の馬並めて御猟立たしし時は
来向ふ　〔巻一・四九〕　柿本人麿

これも四首中の一つで、その最後のものである。一首は、いよいよ御猟をすべき日になった。御なつかしい日並皇子尊が御生前に群馬を走らせ御猟をなされたその時のように、いよいよ御猟をすべき時になった、というのである。

この歌も余り細部にこだわらずに、おおように歌っているが、ただの腕まかせでなく、丁寧にして真率な作である。総じて人麿の作は重厚で、軽薄の音調の無きを特色とするのは、応詔、

献歌の場合が多いからというためのみでなく、どんな場合でもそうであるのを、後進の歌人は見のがしてはならない。

それから、結句の、「来向ふ」というようなものでも人麿造語の一つだと謂っていい。「今年経て来向ふ夏は」「春過ぎて夏来向へば」(巻十九・四一八三・四一八〇)等の家持の用例があるが、これは人麿の、「時は来向ふ」を学んだものである。人麿以後の万葉歌人等で人麿を学んだ者が一人二人にとどまらない。言葉を換えていえば人麿は万葉集に於て最もその真価を認められたものである。後世人麿を「歌聖」だの何のと騒いだが、上の空の偶像礼拝に過ぎぬ。

○

嫄女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く　〔巻一・五一〕　志貴皇子

明日香(飛鳥)の京から藤原の京に遷られた後、明日香のさびれたのを悲しんで、志貴皇子の詠まれた御歌である。遷都は持統八年十二月であるから、それ以後の御作だということになる。嫄女(采女)は諸国から身分も好く(郡の少領以上)容貌も端正な妙齢女を選抜して宮中に仕えしめたものである。駿河嫄女(巻四)駿河采女(巻八)の如く両方に書いている。

一首は、明日香に来て見れば、既に都も遠くに遷り、都であるなら美しい采女等の袖をも飜す明日香風も、今は空しく吹いている、というぐらいに取ればいい。

「明日香風」というのは、明日香の地を吹く風の意で、泊瀬風、佐保風、伊香保風等の例があり、上代日本語の一特色を示している。今は京址となって寂れた明日香に来て、その感慨をあらわすに、采女等の袖ふりはえて歩いていた有様を聯想して歌っているし、それを明日香風に集注せしめているのは、意識的に作歌を工夫するのならば捉えどころということになるのであろうが、当時は感動を主とするから自然にこうなったものであろう。采女の事などを主にするから甘くなるかというに決してそうでなく、皇子一流の精厳ともいうべき歌調に統一せられている。ただ、「袖ふきかへす」を主な感じとした点に、心のすえ方の危険が潜んでいるといわばいい得るかも知れない。この、「袖ふきかへす」という句につき、「袖ふきかへしし」と過去にいうべきだという説もあったが、ここは楽に解釈して好い。

初句は旧訓タヲヤメノ。拾穂抄タハレメノ。僻案抄ミヤヒメノ。考タワヤメノ。古義ヲトメノ等の訓がある。古鈔本中元暦校本に朱書で或ウネメノとあるに従って訓んだが、なおオホヤメノ(神)タオヤメノ(女)の訓もあるから、旧訓或は考の訓によって味うことも出来る。つまり、「采女は官女の称なるを義を以てタヲヤメに借りたるなり」(美夫君志)という説を全然否定しないのである。いずれにしても初句の四音ウネメノは稍不安であるから、どうしてもウネメと訓まねばならぬなら、或はウネメラノとラを入れてはどうか知らん。

○

引馬野にほふ榛原いり乱り衣にほはせ旅の
しるしに　〔巻一・五七〕　長奥麿

大宝二年(文武)に太上天皇(持統)が参河に行幸せられたとき、長忌寸奥麿(伝不詳)の詠んだ歌である。引馬野は遠江敷智郡(今浜名郡)浜松附近の野で、三方原の南寄に曳馬村があるから、其辺だろうと解釈して来たが、近時三河宝飯郡御津町附近だろうという説(今泉忠男氏、久松潜一氏)が有力となった。「榛原」は萩原だと解せられている。

一首の意は、引馬野に咲きにおうて居る榛原(萩原)のなかに入って逍遙しつつ、此処まで旅し来った記念に、萩の花を衣に薫染せしめなさい、というのであろう。

右の如くに解して、「草枕旅ゆく人も行き触ればにほひぬべくも咲ける芽子かも」(巻八・一五三二)の歌の如く、衣に薫染せしめる事としたのであるが、続日本紀に拠るに行幸は十月十日(陽暦十一月八日)から十一月二十五日(陽暦十二月二十二日)にかけてであるから、大方の萩の花は散ってしまっている。ここで、「榛原」は萩でなしに、榛の木原で、その実を煎じて黒染(黄染)にする、その事を「衣にほはせ」というのだとする説が起って、目下その説が有力のようであるが、榛の実の黒染のことだとすると、「入りみだり衣にほはせ」という句にふさわしくない。そこで若し榛原は萩原で、其頃萩の花が既に過ぎてしまったとすると、萩の花でなくて萩の黄葉であるのかも知れない。(土屋文明氏も、萩の花ならそれでもよいが、榛の黄葉、乃至は雑木の黄葉であるかも知れぬと云っている。)萩の黄葉は極めて鮮かに美しいものだから、その美しい黄葉の中に入り浸って衣を薫染せしめる気持だとも解釈し得るのである。つまり実際に摺染せずに薫染するような気持と解するのである。また、榛は新撰字鏡に、叢生曰レ榛とあるから、灌木の藪をいうことで、それならばやはり黄葉の心持である。いずれにしても、榛の木ならば、「にほふはりはら」という気持ではない。この「にほふ」につき、必ずしも花でなくともいいという説は既に荷田春満が云っている。「にほふといふこと、〔葉〕花にかぎりていふにあらず、色をいふ詞なれば、花過ても匂ふ萩原といふべし」(僻案抄)。

そして榛の実の黒染説は、続日本紀の十月十一月という記事があるために可能なので、この記事さへ顧慮しないならば、萩の花として素直に鑑賞の出来る歌なのである。また続日本紀の記載も絶対的だともいえないことがあるかも知れない。そういうことは少し我儘過ぎる解釈であろうが、差し当ってはそういう我儘をも許容し得るのである。

さて、そうして置いて、萩の花を以て衣を薫染せしめることに定めてしまえば、此の歌の自然で且つ透明とも謂うべき快い声調に接することが出来、一首の中に「にほふ」、「にほはせ」があっても、邪魔を感ぜずに受納れることも出来るのである。次に近時、「乱」字を四段の自動

詞に活用せしめた例が万葉に無いとして「入り乱れ」と訓んだ説(沢瀉氏)があるが、既に「みだりに」という副詞がある以上、四段の自動詞として認容していいとおもったのである。且つ、「いりみだり」の方が響としてはよいのである。

次に、この歌は引馬野にいて詠んだものだろうと思うのに、京に残っていて供奉の人を送った作とする説(武田氏)がある。即ち、武田博士は、「作者はこの御幸には留守をしてゐたので、御供に行く人に与へた作である。多分、御幸が決定し、御供に行く人々も定められた準備時代の作であらう。御幸先の秋の景色を想像してゐる。よい作である。作者がお供をして詠んだとなす説はいけない」(総釈)と云うが、これは陰暦十月十日以後に萩が無いということを前提とした想像説である。そして、真淵の如きも、「又思ふに、幸の時は、近き国の民をめし課る事紀にも見ゆ、然れば前だちて八九月の比より遠江へもいたれる官人此野を過る時よみしも知がたし」(考)という想像説を既に作っているのである。共に、同じく想像説ならば、真淵の想像説の方が、歌を味ううえでは適切である。この歌はどうしても属目の感じで、想像の歌ではなかろうと思うからである。私かにおもうに、此歌はやはり行幸に供奉して三河の現地で詠んだ歌であろう。そして少くも其年は萩がいまだ咲いていたのであろう。気温の事は現在を以て当時の事を軽々に論断出来ないので、即ち僻案抄に、「なべては十月には花も過葉もかれにつゝ(く?)萩の、此引馬野には花も残り葉もうるはしくてにほふが故に、かくよめりと見るとも難有べか

らず。草木は気運により、例にたがひ、土地により、遅速有こと常のことなり」とあり、考にも、「此幸は十月なれど遠江はよに暖かにて十月に此花にほふとしも多かり」とあるとおりであろう。私は、昭和十年十一月すえに伊香保温泉で木萩の咲いて居るのを見た。其の時伊香保の山には既に雪が降っていた。また大宝二年の行幸は、尾張・美濃・伊勢・伊賀を経て京師に還幸になったのは十一月二十五日であるのを見れば、恐らくその年はそう寒くなかったのかも知れないのである。

また、「古にありけむ人のもとめつつ衣に摺りけむ真野の榛原」(巻七・一一六六)、「白菅の真野の榛原心ゆもおもはぬ吾し衣に摺りつ」(同・一三五四)、「住吉の岸野の榛に染ふれど染はぬ我やにほひて居らむ」(巻十六・三八〇一)、「思ふ子が衣摺らむに匂ひこせ島の榛原秋立たずとも」(巻十・一九六五)等の、衣摺るは、萩花の摺染ならば直ぐに出来るが、ハンの実を煎じて黒染にするのならば、さう簡単には出来ない。もっとも、攷證では、「この榛摺は木の皮をもてすれるなるべし」とあるが、これでも技術的で、この歌にふさわしくない。そこでこの二首の「榛」はハギの花であって、ハンの実でないとおもうのである。なお、「引き攀ぢて折らば散るべみ梅の花袖に扱入れつ染まば染むとも」(巻八・一六四四)、「藤浪の花なつかしみ、引よぢて袖に扱入れつ、染まば染むとも」(巻十九・四一九二)等も、薫染の趣で、必ずしも摺染めにすることではない。つまり「衣にほはせ」の気持である。なお、榛はハギかハンかという問題で、「いざ子ども大和へは

やく白菅の真野の榛原手折りてゆかむ」(巻三・二八〇)の中の、「手折りてゆかむ」はハギには適当だが、ハンには不適当である。その次の歌、「白菅の真野の榛原ゆくさ来さ君こそ見らめ真野の榛原」(同・二八一)もやはりハギの気持である。以上を綜合して、「引馬野ににほふ榛原」も萩の花で、現地にのぞんでの歌と結論したのであった。以上は結果から見れば皆新しい説を排して旧い説に従ったこととなる。

○

いづくにか船泊すらむ安礼の埼こぎ回み行き
し棚無し小舟　〔巻一・五八〕　高市黒人

これは高市黒人の作である。黒人の伝は審でないが、持統文武両朝に仕えたから、大体柿本人麿と同時代である。「船泊」は此処では名詞にして使っている。「安礼の埼」は参河国の埼であろうが現在の何処にあたるか未だ審でない。(新居崎だろうという説もあり、また近時、今泉氏、ついで久松氏は御津附近の岬だろうと考証した。)「棚無し小舟」は、舟の左右の舷に渡した旁板(枻)を舟棚というから、その舟棚の無い小さい舟をいう。

一首の意は、今、参河の安礼の埼のところを漕ぎめぐって行った、あの舟棚の無い小さい舟は、いったい何処に泊るのか知らん、というのである。

この歌は旅中の歌だから、他の旅の歌同様、寂しい気持と、家郷(妻)をおもう気持と相纏っているのであるが、この歌は客観的な写生をおろそかにしていない。そして、安礼の埼といい、棚無し小舟といい、きちんと出すものは出して、そして、「何処にか船泊すらむ」と感慨を漏らしているところにその特色がある。歌調は人麿ほど大きくなく、「すらむ」などといっても、人麿のものほど流動的ではない。結句の、「棚無し小舟」の如き、四三調の名詞止めのあたりは、すっきりと緊縮させる手法である。

○

いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の浜松待
ち恋ひぬらむ　〔巻一・六三〕　山上憶良

山上憶良が大唐にいたとき、本郷(日本)を憶って作った歌である。憶良は文武天皇の大宝元年、遣唐大使粟田真人に少録として従い入唐し、慶雲元年秋七月に帰朝したから、この歌は帰りの出帆近いころに作ったもののようである。「大伴」は難波の辺一帯の地域の名で、もと大伴氏の領地であったからであろう。「大伴の高師の浜の松が根を」(巻一・六六)とあるのも、大伴の地にある高師の浜というのである。「御津」は難波の湊のことである。そしてもっとくわしくいえば難波津よりも住吉津即ち堺であろうといわれている。

一首の意は、さあ皆のものどもよ、早く日本へ帰ろう、大伴の御津の浜のあの松原も、吾々を待ちこがれているだろうから、というのである。やはり憶良の歌に、「大伴の御津の松原かき掃きて吾立ち待たむ早帰りませ」(巻五・八九五)があり、なお、「朝なぎに真楫榜ぎ出て見つつ来し御津の松原浪越しに見ゆ」(巻七・一一八五)があるから、大きい松原のあったことが分かる。

「いざ子ども」は、部下や年少の者等に対して親しんでいう言葉で、既に古事記応神巻に、「いざ児ども野蒜つみに蒜つみに」とあるし、万葉の、「いざ子ども大和へ早く白菅の真野の榛原手折りて行かむ」(巻三・二八〇)は、高市黒人の歌だから憶良の歌に前行している。「白露を取らば消ぬべしいざ子ども露に競ひて萩の遊びせむ」(巻十・二一七三)もまたそうである。「いざ児ども香椎の潟に白妙の袖さへぬれて朝菜採みてむ」(巻六・九五七)は旅人の歌で憶良のよりも後れている。つまり、旅人が憶良の影響を受けたのかも知れぬ。

この歌は、環境が唐の国であるから、自然にその気持も一首に反映し、そういう点で規模の大きい歌だと謂うべきである。下の句の歌調は稍弛んで弱いのが欠点で、これは他のところでも一言触れて置いたごとく、憶良は漢学に達していたため、却って日本語の伝統的な声調を理会することが出来なかったのかも知れない。一首としてはもう一歩緊密な度合の声調を要求しているのである。後年、天平八年の遣新羅国使等の作ったものの中に、「ぬばたまの夜明しも船は榜ぎ行かな御津の浜松待ち恋ひぬらむ」(巻十五・三七二一)、「大伴の御津の泊に船泊てて立田

の山を何時か越え往かむ」(同・三七二二)とあるのは、この憶良の歌の模倣である。なお、大伴坂上郎女の歌に、「ひさかたの天の露霜置きにけり宅なる人も待ち恋ひぬらむ」(巻四・六五一)というのがあり、これも憶良の歌の影響があるのかも知れぬ。斯くの如く憶良の歌は当時の人々に尊敬せられたのは、恐らく彼は漢学者であったのみならず、歌の方でもその学者であったからだとおもうが、そのあたりの歌は、一般に分かり好くなり、常識的に合理化した声調となったためとも解釈することが出来る。即ち憶良のこの歌の如きは、細かい顫動が足りない、而してたるんでいるところのあるものである。

○

葦べ行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕べは大和し思ほゆ　〔巻一・六四〕　志貴皇子

文武天皇が慶雲三年(九月二十五日から十月十二日まで)難波宮に行幸あらせられたとき志貴皇子(天智天皇の第四皇子、霊亀二年薨)の詠まれた御歌である。難波宮のあったところは現在明かでない。

大意。難波の地に旅して、そこの葦原に飛びわたる鴨の翼に、霜降るほどの寒い夜には、大和の家郷がおもい出されてならない。鴨でも共寝をするのにという意も含まれている。

「葦べ行く鴨」という句は、葦べを飛びわたる字面であるが、一般に葦べに住む鴨の意としてもかまわぬだろう。「葦べゆく鴨の羽音のおとのみに」(巻十二・三〇九〇)、「葦べ行く雁の翅を見るごとに」(巻十三・三三四五)、「鴨すらも己が妻どちあさりして」(巻十二・三〇九一)等の例があり、参考とするに足る。

志貴皇子の御歌は、その他のもそうであるが、歌調明快でありながら、感動が常識的粗雑に陥るということがない。この歌でも、鴨の羽交に霜が置くというのは現実の細かい写実というよりは一つの「感」で運んでいるが、その「感」は空漠たるものでなしに、人間の観察が本となっている点に強みがある。そこで、「霜ふりて」と断定した表現が利くのである。「葦べ行く」という句にしても稍ぼんやりしたところがあるけれども、それでも全体としての写象はただのぼんやりではない。

集中には、「埼玉の小埼の沼に鴨ぞ翼きる己が尾に零り置ける霜を払ふとならし」(巻九・一七四四)、「天飛ぶや雁の翅の覆羽の何処もりてか霜の降りけむ」(巻十・二二三八)、「押し照る難波ほり江の葦べには雁宿たるかも霜の零らくに」(同・二一三五)等の歌がある。

○

あられうつ安良礼松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも　〔巻一・六五〕　長皇子

長皇子(天武天皇第四皇子)が、摂津の住吉海岸*、安良礼松原で詠まれた御歌で、其処にいた弟日娘という美しい娘と共に松原を賞したもうた時の御よろこびである。この歌の「と」の用法につき、あられ松原と弟日娘と両方とも見れど飽きないと解く説もある。娘は遊行女婦であったろうから、美しかったものであろう。初句の、「あられうつ」は、下の「あられ」に懸けた枕詞で、皇子の造語と看做していい。一首は、よい気持になられての即興であろうが、不思議にも軽浮に艶めいたものがなく、寧ろ勁健とも謂うべき歌調である。これは日本語そのものがこういう高級なものであったと解釈することも可能なので、自分はその一代表のつもりで此歌を選んで置いた。「見れど飽かぬかも」の句は万葉に用例がなかなか多い。「若狭なる三方の海の浜清みい往き還らひ見れど飽かぬかも」(巻七・一一七七)、「百伝ふ八十の島廻を榜ぎ来れど粟の小島し見れど飽かぬかも」(巻九・一七一一)、「白露を玉になしたる九月のありあけの月夜見れど飽かぬかも」(巻十・二二二九)等、ほか十五、六の例がある。これも写生によって配合すれば現代に活かすことが出来る。

この歌の近くに、清江娘子という者が長皇子に進った、「草枕旅行く君と知らませば岸の埴土ににほはさましを」（巻一・六九）という歌がある。この清江娘子は弟日娘子だろうという説があるが、或は娘子は一人のみではなかったのかも知れない。住吉の岸の黄土で衣を美しく摺って記念とする趣である。「旅ゆく」はいよいよ京へお帰りになることで、名残を惜しむのである。情緒が纏綿としているのは、必ずしも職業的にのみこの媚態を示すのではなかったであろう。またこれを万葉巻第一に選び載せた態度もこだわりなくて円融とも称すべきものである。

○

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる　（巻一・七〇）　高市黒人

持統天皇が吉野の離宮に行幸せられた時、扈従して行った高市連黒人が作った。呼子鳥はカッコウかホトトギスか、或は両者ともにそう云われたか、未だ定説が無いが、カッコウ（閑古鳥）を呼子鳥と云った場合が最も多いようである。「象の中山」は吉野離宮のあった宮滝の南にある山である。象という土地の中にある山の意であろう。「来らむ」は「行くらむ」という意に同じであるが、彼方（大和）を主として云っている（山田博士の説）。従って大和に親しみがあるのである。

一首の意。（今吉野の離宮に供奉して来ていると、）呼子鳥が象の山のところを呼び鳴きつつ越えて居る。多分大和の京（藤原京）の方へ鳴いて行くのであろう。（家郷のことがおもい出されるという意を含んでいる。）

呼子鳥であるから、「呼びぞ」と云ったし、また、ただ「鳴く」といおうよりも、その方が適切な場合もあるのである。而してこの歌には「鳴く」という語も入っているから、この「鳴きてか」の方は稍間接的、「呼びぞ」の方が現在の状態で作者にも直接なものであっただろう。「大和には」の「に」は方嚮で、「は」は詠歎の分子ある助詞である。この歌を誦しているうちに優れているものを感ずるのは、恐らく全体が具象的で現実的であるからであろう。そしてそれに伴う声調の響が稍渋りつつ平俗でない点にあるだろう。初句の「には」と第二句の「らむ」と結句の「なる」のところに感慨が籠って居て、第三句の「呼子鳥」は文法的には下の方に附くが、上にも下にも附くものとして鑑賞していい。高市黒人は万葉でも優れた歌人の一人だが、その黒人の歌の中でも佳作の一つであるとおもう。

普通ならば「行くらむ」というところを、「来らむ」というに就いて、「行くらむ」は対象物が自分から離れる気持、「来らむ」は自分に接近する気持であるから、自分を藤原京の方にいるように瞬間見立てれば、吉野の方から鳴きつつ来る意にとり、「来らむ」でも差支がないこととなり、古来その解釈が多い。代匠記に、「本来の住所なれば、我方にしてかくは云也」と解し、

古義に「おのが恋しく思ふ京師辺には、今鳴きて来らむかと、京師を内にしていへるなり」と解したのは、作者の位置を一瞬藤原京の内に置いた気持に解したのである。けれどもこの解は、大和を内とするというところに「鳴きてか来らむ」の解に無理がある。然るに、山田博士に拠ると越中地方では、彼方を主とする時に「来る」というそうであるから、大和(藤原京)を主として、其処に呼子鳥が確かに行くということをいいあらわすときには、「呼子鳥が大和京へ来る」ということになる。「大和には啼きてか来らむ霍公鳥汝が啼く毎に亡き人おもほゆ」(巻十・一九五六)という歌の、「啼きてか来らむ」も、大和の方へ行くだろうというので、大和の方へ親しんで啼いて行く意となる。なお、「吾が恋を夫は知れるを行く船の過ぎて来べしや言も告げなむ」(巻十・一九九八)の「来べしや」も「行くべしや」の意、「霞ゐる富士の山傍に我が来なば何方向きてか妹が嘆かむ」(巻十四・三三五七)の、「我が来なば」も、「我が行かば」という意になるのである。

○

み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も
我がひとり寝む　〔巻一・七四〕　作者不詳

大行天皇(文武)が吉野に行幸したもうた時、従駕の人の作った歌である。「はたや」は、「またも」に似てそれよりも詠歎が強い。この歌は、何の妙も無く、ただ順直にいい下しているのだが、情の純なるがために人の心を動かすに足るのである。この種の声調のものは分かり易いために、模倣歌を出だし、遂に平凡になってしまうのだが、併しそのために此歌の価値の下落することがない。その当時は名は著しくない従駕の人でも、このくらいの歌を作ったのは実に驚くべきである。「ながらふるつま吹く風の寒き夜にわが背の君はひとりか寝らむ」(巻一・五九)も選出したのであったが、歌数の制限のために、此処に附記するにとどめた。

○

ますらをの鞆の音すなりもののふの大臣楯
立つらしも　〔巻一・七六〕　元明天皇

和銅元年、元明天皇御製歌である。寧楽宮遷都は和銅三年だから、和銅元年には天皇はいまだ藤原宮においでになった。即ち和銅元年は御即位になった年である。

一首の意は、兵士等の鞆の音が今しきりにしている。将軍が兵の調練をして居ると見えるが、何か事でもあるのであろうか、というのである。「鞆」は皮製の円形のもので、左の肘につけて弓を射たときの弓弦の反動を受ける、その時に音がするので多勢のおこすその鞆の音が女帝の御耳に達したものであろう。「もののふの大臣」は軍を統べる将軍のことで、続紀に、和銅

二年に蝦夷を討った将軍は、巨勢麿、佐伯石湯だから、御製の将軍もこの二人だろうといわれている。「楯たつ」は、楯は手楯でなくもっと大きく堅固なもので、それを立てならべること、即ち軍陣の調練をすることとなるのである。

どうしてこういうことを仰せられたか。これは軍の調練の音をお聞きになって、御心配になられたのであった。考に、「さて此御時みちのく越後の蝦夷らが叛きぬれば、うての使を遣さる、その御軍の手ならしを京にてあるに、鼓吹のこゑ鞆の音など(弓弦のともにあたりて鳴音也)かしかましきを聞し召て、御位の初めに事有をなげきおもほす御心より、かくはよみませしなるべし。此大御哥にさる事までは聞えねど、次の御こたへ哥と合せてしるき也」とある。

御答歌というのは、御名部皇女で、皇女は天皇の御姉にあたらせられる。「吾が大王ものな思ほし皇神の嗣ぎて賜へる吾無けなくに」(巻一・七七)という御答歌で、陛下よどうぞ御心配あそばすな、わたくしも皇祖神の命により、いつでも御名代になれますものでございますから、というので、「吾」は皇女御自身をさす。御製歌といい御答歌といい、まことに緊張した境界で、恋愛歌などとは違った大きなところを感得しうるのである。個人を超えた集団、国家的の緊張した心の世界である。御製歌のすぐれておいでになるのは申すもかしこいが、御姉君にあらせられる皇女が、御妹君にあらせらるる天皇に、かくの如き御歌を奉られたというのは、後代の吾等拝誦してまさに感涙を流さねばならぬほどのものである。御妹君におむかい、「吾が大王

ものな思ほし」といわれるのは、御妹君は一天万乗の現神の天皇にましますからである。

○

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君が辺は
見えずかもあらむ　〔巻一・七八〕　作者不詳

元明天皇、和銅三年春二月、藤原宮から寧楽宮に御遷りになった時、御輿を長屋原(山辺郡長屋)にとどめ、藤原京の方を望みたもうた。その時の歌であるが作者の名を明記してない。併し作者は皇子・皇女にあらせられる御方のようで、天皇の御姉、御名部皇女(天智天皇皇女、元明天皇御姉)の御歌と推測するのが真に近いようである。

「飛ぶ鳥の」は「明日香」にかかる枕詞。明日香(飛鳥)といって、なぜ藤原といわなかったかというに、明日香はあの辺の総名で、必ずしも飛鳥浄御原宮(天武天皇の京)とのみは限局せられない。そこで藤原京になってからも其処と隣接している明日香にも皇族がたの御住いがあったものであろう。この歌の、「君」というのは、作者が親まれた男性の御方のようである。

この歌も、素直に心の動くままに言葉を使って行き、取りたてて技巧を弄していないところに感の深いものがある。「置きて」という表現は、他にも、「大和を置きて」、「みやこを置きて」などの例もあり、注意すべき表現である。結句の、「見えずかもあらむ」の「見えず」というの

も、感覚に直接で良く、この類似の表現は万葉に多い。

○

うらさぶる情さまねしひさかたの天の時雨の
流らふ見れば　〔巻一・八二〕　長田王

詞書には和銅五年夏四月長田王（長親王の御子か）が、伊勢の山辺の御井（山辺離宮の御井か壱志郡新家村か）で詠まれたようになっているが、原本の左注に、この歌はどうもそれらしくない、疑って見れば其当時誦した古歌であろうと云っているが、季節も初夏らしくない。ウラサブルは「心寂しい」意。サマネシはサは接頭語、マネシは「多い」、「頻り」等の語に当る。ナガラフはナガルという良行下二段の動詞を二たび波行下二段に活用せしめた。事柄の時間的継続をあらわすこと、チル（散る）からチラフとなる場合などと同じである。

一首の意は、天から時雨の雨が降りつづくのを見ると、うら寂しい心が絶えずおこって来る、というのである。

時雨は多くは秋から冬にかけて降る雨に使っているから、やはり其時この古歌を誦したものであろうか。旅中にあって誦するにふさわしいもので、古調のしっとりとした、はしゃがない好い味いのある歌である。事象としては「天の時雨の流らふ」だけで、上の句は主観で、それ

に枕詞なども入っているから、内容としては極く単純なものだが、この単純化がやがて古歌の好いところで、一首の綜合がそのために渾然とするのである。雨の降るのをナガラフと云っているのなども、他にも用例があるが、響きとしても実に好い響きである。

○

秋さらば今も見るごと妻ごひに鹿鳴かむ山ぞ
高野原の上　〔巻一・八四〕　長皇子

長皇子（天武天皇第四皇子）が志貴皇子（天智天皇第四皇子）と佐紀宮に於て宴せられた時の御歌である。御二人は従兄弟の関係になっている。佐紀宮は現在の生駒郡平城村、都跡村、伏見村あたりで、長皇子の宮のあったところであろう。志貴皇子の宮は高円にあった。高野原は佐紀宮の近くの高地であっただろう。

一首の意は、秋になったならば、今二人で見て居るような景色の、高野原一帯に、妻を慕って鹿が鳴くことだろう、というので、なお、そうしたら、また一段の風趣となるから、二たび来られよという意もこもっている。

この歌は、「秋さらば」というのだから現在は未だ秋でないことが分かる。「鹿鳴かむ山ぞ」と将来のことを云っているのでもそれが分かる。其処に「今も見るごと」という視覚上の句が

入って来ているので、種々の解釈が出来たのだが、この、「今も見るごと」という句を直ぐ「妻恋ひに」、「鹿鳴かむ山」に続けずに寧ろ、「山ぞ」、「高野原の上」の方に関係せしめて解釈せしめる方がいい。即ち、現在見渡している高野原一帯の佳景その儘に、秋になるとこの如き興に添えてそのうえ鹿の鳴く声が聞こえるという意味になる。「今も見るごと」は「現在ある状態の佳き景色の此の高野原に」というようになり、単純な視覚よりももっと広い意味になるから、そこで視覚と聴覚との矛盾を避けることが出来るのであって、他の諸学者の種々の解釈は皆不自然のようである。

この御歌は、豊かで緊密な調べを持っており、感情が濃やかに動いているにも拘らず、そういう主観の言葉というものが無い。それが、「鳴かむ」といい、「山ぞ」で代表せしめられている観があるのも、また重厚な「高野原の上」という名詞句で止めているあたりと調和して、万葉調の一代表的技法を形成している。また「今も見るごと」の挿入句があるために、却って歌調を常識的にしていない。家持が「思ふどち斯くし遊ばむ、今も見るごと」(巻十七・三九九一)と歌っているのは恐らく此御歌の影響であろう。

この歌の詞書は、「長皇子与志貴皇子於佐紀宮倶宴歌」とあり、左注、「右一首長皇子」で、「御歌」とは無い。これも、中皇命の御歌(巻一・三)の題詞を理解するのに参考となるだろう。目次に、「長皇子御歌」と「御」のあるのは、目次製作者の筆で、歌の方には無かったものであろう。

巻第二

○

秋の田の穂のへに霧らふ朝霞いづへの方に我が恋やまむ　〔巻二・八八〕　磐姫皇后

仁徳天皇の磐姫皇后が、天皇を慕うて作りませる歌というのが、万葉巻第二の巻頭に四首載っている。此歌はその四番目である。四首はどういう時の御作か、仁徳天皇の後妃八田皇女との三角関係が伝えられているから、感情の強く豊かな御方であらせられたのであろう。

一首は、秋の田の稲穂の上にかかっている朝霧がいずこともなく消え去るごとく(以上序詞)私の切ない恋がどちらの方に消え去ることが出来るでしょう、それが叶わずに苦しんでおるのでございます、というのであろう。

「霧らふ朝霞」は、朝かかっている秋霧のことだが、当時は、霞といっている。キラフ・アサガスミという語はやはり重厚で平凡ではない。第三句までは序詞だが、具体的に云っているので、象徴的として受取ることが出来る。「わが恋やまむ」といういいあらわしは切実なので、万葉にも、「大船のたゆたふ海に碇おろしいかにせばかもわが恋やまむ」(巻十一・二七三八)、「人

の見て言とがめせぬ夢にだにやまず見えこそ我が恋やまむ」（巻十二・二九五八）の如き例がある。

この歌は、磐姫皇后の御歌とすると、もっと古調なるべきであるが、恋歌としては、読人不知の民謡歌に近いところがある。併し万葉編輯当時は皇后の御歌という言伝えを素直に受納れて疑わなかったのであろう。そこで自分は恋愛歌の古い一種としてこれを選んで吟誦するのであろう。

他の三首も皆佳作で棄てがたい。

君が行日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ　（巻二・八五）

斯くばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを　（同・八六）

在りつつも君をば待たむうち靡く吾が黒髪に霜の置くまでに　（同・八七）

八五の歌は、憶良の類聚歌林に斯く載ったが、古事記には軽太子が伊豫の湯に流された時、大郎女（衣通王）の歌ったもので「君が行日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ」となって居り、第三句は枕詞に使っていて、この方が調べが古い。八六の「恋ひつつあらずは」は、「恋ひつつあらずし」に、詠歎の「は」の添わったもので、「恋ひつつあらずして」として、それに満足せずに先きの希求をこめた云い方である。それだから、散文に直せば、従来の解釈のように、「……あらんよりは」というのに帰着する。

○

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に
家もあらましを　（巻二・九一）　天智天皇

天智天皇が鏡王女に賜わった御製歌である。鏡王女は鏡王の女、額田王の御姉で、後に藤原鎌足の嫡妻となられた方とおもわれるが、この御製歌はそれ以前のものであろうか、それとも鎌足薨去（天智八年）の後、王女が大和に帰っていたのに贈りたもうた歌であろうか。そして、大和なる」とことわっているから、天皇は近江に居給うたのであろう。「大島の嶺」は所在地不明だが、鏡王女の居る処の近くで相当に名高かった山だろうと想像することが出来る。（後紀大同三年、平群朝臣の歌にあるオホシマあたりだろうという説がある。さすれば現在の生駒郡平群村あたりであろう。）

一首の意は、あなたの家をも絶えずつづけて見たいものだ。大和のあの大島の嶺にあなたの家があるとよいのだが、というぐらいの意であろう。

「見ましを」と「あらましを」と類音で調子を取って居り、同じ事を繰返して居るのである。ここで、天皇の御住いが大島の嶺にあればよいというのではあるまい。若しそうだと、歌は平凡になる。或は通俗になる。ここは同じことを繰返しているので、古調の単純素朴があらわれ

て来て、優秀な歌となるのである。前の三山の御歌も傑作であったが、この御製になると、もっと自然で、こだわりないうちに、無限の情緒を伝えている。声調は天皇一流の大きく強いもので、これは御気魄の反映にほかならないのである。「家も」の「も」は「をも」の意だから、無論王女を見たいが、せめて「家をも」というので、強めて詠歎をこもらせたとすべきであろう。

この御製は恋愛か或は広義の往来存問か。語気からいえば恋愛だが、天皇との関係は審かでない。また天武天皇の十二年に、王女の病篤かった時天武天皇御自ら臨幸あった程であるから、その以前からも重んぜられていたことが分かる。そこでこの歌は恋愛歌でなくて安否を問いたもうた御製だという説(山田博士)がある。鎌足歿後の御製ならば或はそうであろう。併し事実はそうでも、感情を主として味うと広義の恋愛情調になる。

○

秋山の樹の下がくり逝く水の吾こそ益さめ御思よりは　〔巻二・九二〕　鏡王女

右の御製に鏡王女の和え奉った歌である。

一首は、秋山の木の下を隠れて流れゆく水のように、あらわには見えませぬが、わたくしの

君をお慕い申あげるところの方がもっと多いのでございます。わたくしをおもってくださる君の御心よりも、というのである。

「益さめ」の「益す」は水の増す如く、思う心の増すという意がある。第三句までは序詞で、この程度の序詞は万葉には珍らしくないが、やはり誤魔化さない写生がある。それから、「われこそ益さめ御思よりは」の句は、情緒こまやかで、且つおのずから女性の口吻が出ているところに注意せねばならない。特に、結句を、「御思よりは」と止めたのに無限の味いがあり、甘美に迫って来る。これもこの歌だけについて見れば恋愛情調であるが、何処か遜ってつつましく云っているところに、和え歌として此歌の価値があるのであろう。試みに同じ作者が藤原鎌足の妻になる時鎌足に贈った歌、「玉くしげ覆ふを安み明けて行かば君が名はあれど吾が名し惜しも」(巻二・九三)の方は稍気軽に作っている点に差別がある。併し「君が名はあれど吾が名し惜しも」の句にやはり女性の口吻が出ていて棄てがたいものである。

○

玉くしげ御室の山のさなかづらさ寝ずは遂にありがつましじ　〔巻二・九四〕　藤原鎌足

内大臣藤原卿(鎌足)が鏡王女に答え贈った歌であるが、王女が鎌足に「たまくしげ覆ふを安

み明けて行かば君が名はあれど吾が名し惜しも」(巻二・九三)という歌を贈った。櫛笥の蓋をすることが楽に出来るし、蓋を開けることも楽だから、夜の明けるの「明けて」に続けて序詞としたもので、夜が明けてからお帰りになると人に知れてしまいましょう、貴方には浮名が立ってもかまわぬでしょうが、私には困ってしまいます、どうぞ夜の明けぬうちにお帰りください、というので、鎌足のこの歌はそれに答えたのである。

「玉くしげ御室の山のさなかづら」迄は「さ寝」に続く序詞で、また、玉匣をあけて見んというミから御室山のミに続けた。或はミは中身のミだとも云われて居る。御室山は即ち三輪山で、「さな葛」はさね葛、美男かずらのことで、夏に白っぽい花が咲き、実は赤い。そこで一首は、そういうけれども、おまえとこうして寝ずには、どうしても居られないのだ、というので、結句の原文「有勝麻之自」は古来種々の訓のあったのを、橋本(進吉)博士がかく訓んで学界の定説となったものである。博士はカツと清んで訓んでいる。ガツは堪える意、ガテナクニ、ガテヌカモのガテと同じ動詞、マシジはマジという助動詞の原形で、ガツ・マシジは、ガツ・マジ、堪うまじ、堪えることが出来ないだろう、我慢が出来ないと見える、というぐらいの意に落着くので、この儘こうして寝ておるのでなくてはとても我慢が出来まいというのである。「いや遠く君がいまさば有不勝自」(巻四・六一〇)、「辺にも沖にも依勝益士」(巻七・一三五二)等の例がある。

鏡王女の歌も情味あっていいが、鎌足卿の歌も、端的で身体的に直接でなかなかいい歌である。身体的に直接ということは即ち心の直接ということで、それを表わす言語にも直接だということになる。「ましじ」と推量にいうのなども、丁寧で、乱暴に押つけないところなども微妙でいい。「つひに」という副詞も、強く効果的で此歌でも無くてならぬ大切な言葉である。「生けるもの遂にも死ぬるものにあれば」(巻三・三四九)、「する遂に君にあはずは」(巻十三・三二五〇)等の例がある。

○

吾はもや安見児得たり皆人の得がてにすとふ
安見児得たり　(巻二・九五)　藤原鎌足

内大臣藤原卿(鎌足)が采女安見児を娶った時に作った歌である。

一首は、吾は今まことに、美しい安見児を娶った。世の人々の容易に得がたいとした、美しい安見児を娶った、というのである。

「吾はもや」の「もや」は詠歎の助詞で、感情を強めている。「まあ」とか、「まことに」とか、「実に」とかを加えて解せばいい。奉仕中の采女には厳しい規則があって濫りに娶ることなどは出来なかった、それをどういう機会にか娶ったのだから、「皆人の得がてにすとふ」の句が

ある。もっともそういう制度を顧慮せずとも、美女に対する一般の感情として此句を取扱ってもかまわぬだろう。いずれにしても作者が歓喜して得意になって歌っているのが、率直な表現によって、特に、第二句と第五句で同じ句を繰返しているところにあらわれている。

この歌は単純で明快で、濁った技巧が無いので、この直截性が読者の心に響いたので従来も秀歌として取扱われて来た。そこで注釈家の間に寓意説、例えば守部の、「此歌は、天皇を安見知し吾大君と申し馴て、皇子を安見す御子と申す事のあるに、此采女が名を、安見子と云につきて、今吾安見子を得て、既に天皇の位を得たりと戯れ給へる也。されば皆人の得がてにすと云も、采女が事のみにはあらず、天皇の御位の凡人に得がたき方をかけ給へる御詞也。又得たりと云言を再びかへし給へるも、其御戯れの旨を慥かに聞せんとて也。然るにかやうなるをなほざりに見過して、万葉などは何の巧も風情もなきものと思ひ過めるは、実におのれ解く事を得ざるよりのあやまりなるぞかし」(万葉緊要)の如きがある。けれどもそういう説は一つの穿ちに過ぎないとおもう。この歌は集中佳作の一つであるが、興に乗じて一気に表出したという種類のもので、沈潜重厚の作というわけには行かない。同じく句の繰返しがあっても前出天智天皇の、「妹が家も継ぎて見ましを」の御製の方がもっと重厚である。これは作歌の態度というよりも性格ということになるであろうか、そこで、守部の説は穿ち過ぎたけれども、「戯れ給へる也」というところは一部当っている。

○

わが里に大雪降れり大原の古りにし里に降ら
まくは後　〔巻二・一〇三〕　天武天皇

天武天皇が藤原夫人に賜わった御製である。藤原夫人は鎌足の女、五百重娘で、新田部皇子の御母、大原大刀自ともいわれた方である。夫人は後宮に仕える職の名で、妃に次ぐものである。大原は今の高市郡飛鳥村小原の地*である。

一首は、こちらの里には今日大雪が降った、まことに綺麗だが、おまえの居る大原の古びた里に降るのはまだまだ後だろう、というのである。

天皇が飛鳥の清御原の宮殿に居られて、そこから少し離れた大原の夫人のところに贈られたのだが、謂わば即興の戯れであるけれども、親しみの御語気さながらに出ていて、沈潜して作る独詠歌には見られない特徴が、また此等の贈答歌にあるのである。然かもこういう直接の語気を聞き得るようなものは、後世の贈答歌には無くなっている。つまり人間的、会話的でなくなって、技巧を弄した詩になってしまっているのである。

○

わが岡の龗神に言ひて降らしめし雪の摧し其処に散りけむ　（巻二・一〇四）　藤原夫人

藤原夫人が、前の御製に和え奉ったものである。龗神というのは支那ならば竜神のことで、水や雨雪を支配する神である。一首の意は、陛下はそうおっしゃいますが、そちらの大雪とおっしゃるのは、実はわたくしが岡の龗神に御祈して降らせました雪の、ほんの摧けが飛ばっちりになったに過ぎないのでございましょう、というのである。御製の御揶揄に対して劣らぬユウモアを漂わせているのであるが、やはり親愛の心こまやかで棄てがたい歌である。それから、御製の方が大どかで男性的なのに比し、夫人の方は心がこまかく女性的で、技巧もこまかいのが特色である。歌としては御製の方が優るが、天皇としては、こういう女性的な和え歌の方が却って御喜になられたわけである。

○

我が背子を大和へ遣ると小夜更けてあかとき露にわが立ち霑れし　（巻二・一〇五）　大伯皇女

大津皇子（天武天皇第三皇子）が窃かに伊勢神宮に行かれ、斎宮大伯皇女に逢われた。皇子が大和に帰られる時皇女の詠まれた歌である。皇女は皇子の同母姉君の関係にある。

一首は、わが弟の君が大和に帰られるを送ろうと夜ふけて立っていて暁の露に霑れた、というので、暁は、原文に鶏鳴露とあるが、鶏鳴（四更丑刻）は午前二時から四時迄であり、また万葉に五更露爾（巻十・二二一三）ともあって、五更（寅刻）は午前四時から六時迄であるから、夜の更から程なく暁に続くのである。そこで、歌の、「さ夜ふけてあかとき露に」の句が理解出来るし、そのあいだ立って居られたことをも示して居るのである。

大津皇子は天武天皇崩御の後、不軌を謀ったのが露われて、朱鳥元年十月三日死を賜わった。伊勢下向はその前後であろうと想像せられて居るが、史実的には確かでなく、単にこの歌だけを読めば恋愛（親愛）情調の歌である。併し、別離の情が切実で、且つ寂しい響が一首を流れているのをおもえば、そういう史実に関係あるものと仮定しても味うことの出来る歌である。

「わが背子」は、普通恋人または夫のことをいうが、この場合は御弟を「背子」と云っている。親しんでいえば同一に帰着するからである。「大和へやる」の「やる」という語も注意すべきもので、単に、「帰る」とか「行く」とかいうのと違って、自分の意志が活いている。名残惜しいけれども帰してやるという意志があり、そこに強い感動がこもるのである。「かへし遣る使なければ」（巻十五・三六二七）、「この吾子を韓国へ遣るいはへ神たち」（巻十九・四二四〇）等の例があ

る。

○

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越えなむ　〔巻二・一〇六〕　大伯皇女

大伯皇女の御歌で前の歌の続と看做していい。一首の意は、弟の君と一しょに行ってもうらさびしいあの秋山を、どんな風にして今ごろ弟の君はただ一人で越えてゆかれることか、というぐらいの意であろう。前の歌のうら悲しい情調の連鎖としては、やはり悲哀の情調となるのであるが、この歌にはやはり単純な親愛のみで解けないものが底にひそんでいるように感ぜられる。代匠記に、「殊ニ身ニシムヤウニ聞ユルハ、御謀反ノ志ヲモ聞セ給フベケレバ、事ノ成ナラズモ覚束ナク、又ノ対面モ如何ナラムト思召御胸ヨリ出レバナルベシ」とあるのは、或は当っているかも知れない。また、「君がひとり」とあるがただの御一人でなく御伴もいたものであろう。

○

あしひきの山の雫に妹待つとわれ立ち沾れぬ山の雫に　〔巻二・一〇七〕　大津皇子

大津皇子が石川郎女(伝未詳)に贈った御歌で、一首の意は、おまえの来るのを待って、山の木の下に立っていたものだから、木からおちる雨雫にぬれたよ、というのである。「妹待つと」は、「妹待つとて」、「妹を待とうとして、妹を待つために」である。「あしひきの」は、万葉集では巻二のこの歌にはじめて出て来た枕詞であるが、説がまちまちである。宣長の「足引城」説が平凡だが一番真に近いか。「足は山の脚、引は長く引延へたるを云。城とは凡て一構なる地を云て此は即ち山の平なる処をいふ」(古事記伝)というのである。御歌は、繰返しがあるために、内容が単純になった。けれどもそのために親しみの情が却って深くなったように思えるし、それに第一その歌調がまことに快いものである。第二句の「雫に」は「沾れぬ」に続き、結句の「雫に」もまたそうである。こういう簡単な表現はいざ実行しようとするとそう容易にはいかない。

右に石川郎女の和え奉った歌は、「吾を待つと君が沾れけむあしひきの山の雫にならましものを」(巻二・一〇八)というので、その雨雫になりとうございますと、媚態を示した女らしい語気

の歌である。郎女の歌は受身でも機智が働いているからこれだけの親しい歌が出来た。共に互の微笑をこめて唱和しているのだが、皇子の御歌の方がしっとりとして居るところがある。

○

古に恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き
わたり行く　〔巻二・一一一〕　　弓削皇子

持統天皇が吉野に行幸あらせられた時、従駕の弓削皇子（天武天皇第六皇子）から、京に留まっていた額田王に与えられた歌である。持統天皇の吉野行幸は前後三十二回にも上るが、杜鵑の啼く頃だから、持統四年五月か、五年四月であっただろう。

一首の意は、この鳥は、過去ったころの事を思い慕うて啼く鳥であるのか、今、弓弦葉の御井のほとりを啼きながら飛んで行く、というのである。

「古」即ち、過去の事といふのは、天武天皇の御事で、皇子の御父であり、吉野とも、また額田王とも御関係の深かったことであるから、そこで杜鵑を機縁として追懐せられたのが、「古に恋ふる鳥かも」という句で、簡浄の中に情緒充足し何とも言えぬ句である。そしてその下に、杜鵑の行動を写して、具体的現実的なものにしている。この関係は芸術の常道であるけれども、こういう具合に精妙に表われたものは極く稀であることを知って置く方がいい。「弓弦葉の御

井」は既に固有名詞になっていただろうが、弓弦葉（ゆずり葉）の好い樹が清泉のほとりにあったためにその名を得たので、これは、後出の、「山吹のたちよそひたる山清水」（巻二・一五八）と同様である。そして此等のものが皆一首の大切な要素として盛られているのである。「上より」は経過する意で、「より」、「ゆ」、「よ」等は多くは運動の語に続き、此処では「啼きわたり行く」という運動の語に続いている。この語なども古調の妙味実に云うべからざるものがある。既に年老いた額田王は、この御歌を読んで深い感慨にふけったことは既に言うことを須いない。この歌は人麿と同時代であろうが、人麿に無い簡勁にして静和な響をたたえている。

額田王は右の御歌に「古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや啼きしわが恋ふるごと」（同・一一二）という歌を以て和えている。皇子の御歌には杜鵑のことははっきり云ってないので、この歌で、杜鵑を明かに云っている。そして、額田王も亦古を追慕すること痛切であるが、そのように杜鵑が啼いたのであろうという意である。この歌は皇子の歌よりも遜色があるので取立てて選抜しなかった。併し既に老境に入った額田王の歌として注意すべきものである。なぜ皇子の歌に比して遜色があるかというに、和え歌は受身の位置になり、相撲ならば、受けて立つということになるからであろう。贈り歌の方は第一次の感激であり、和え歌の方はどうしても間接になりがちだからであろう。

○

人言をしげみ言痛みおのが世にいまだ渡らぬ
朝川わたる　〔巻二・一一六〕　　但馬皇女

但馬皇女(天武天皇皇女)が穂積皇子(天武天皇第五皇子)を慕われた歌があって、「秋の田の穂向のよれる片寄りに君に寄りなな言痛かりとも」(巻二・一一四)の如き歌もある。この「人言を」の歌は、皇女が高市皇子の宮に居られ、窃かに穂積皇子に接せられたのが露われた時の御歌である。

「秋の田の」の歌は上の句は序詞があって、技巧も巧だが、「君に寄りなな」の句は強く純粋で、また語気も女性らしいところが出ていてよいものである。「人言を」の歌は、一生涯これまで一度も経験したことの無い朝川を渡ったというのは、実際の写生で、実質的であるのが人の心を牽く。特に皇女が皇子に逢うために、秘かに朝川を渡ったというように想像すると、なお切実の度が増すわけである。普通女が男の許に通うことは稀だからである。

○

石見のや高角山の木の間よりわが振る袖を妹
見つらむか　〔巻二・一三二〕　　柿本人麿

柿本人麿が石見の国から妻に別れて上京する時詠んだものである。当時人麿は石見の国府(今の那賀郡下府上府)にいたもののようである。妻はその近くの角の里(今の都濃津附近)にいた。高角山は角の里で高い山というので、今の島星山であろう。角の里を通り、島星山の麓を縫うて江川の岸に出たもののようである。

大意。石見の高角山の山路を来てその木の間から、妻のいる里にむかって、振った私の袖を妻は見たであろうか。

角の里から山までは距離があるから、実際は妻が見なかったかも知れないが、心の自然的なあらわれとして歌っている。そして人麿一流の波動的声調でそれを統一している。そしてただ威勢のよい声調などというのでなく、妻に対する濃厚な愛情の出ているのを注意すべきである。

○

小竹の葉はみ山もさやに乱れども吾は妹おも
ふ別れ来ぬれば　〔巻二・一三三〕　柿本人麿

前の歌の続きである。人麿が馬に乗って今の邑智郡の山中あたりを通った時の歌だと想像している。私は人麿上来の道筋をば、出雲路、山陰道を通過せしめずに、今の邑智郡から赤名越をし、備後にいでて、瀬戸内海の船に乗ったものと想像している。

大意。今通っている山中の笹の葉に風が吹いて、ざわめき乱れていても、わが心はそれに紛れることなくただ一向に、別れて来た妻のことをおもっている。

今現在山中の笹の葉がざわめき乱れているのを、直ぐ取りあげて、それにも拘わらずただ一筋に妻をおもうと言いくだし、それが通俗に堕せないのは、一首の古調のためであり、人麿的声調のためである。そして人麿はこういうところを歌うのに決して軽妙には歌っていない。飽くまで実感に即して執拗に歌っているから軽妙に滑って行かないのである。

第三句ミダレドモは古点ミダルトモであったのを仙覚はミダレドモと訓んだ。それを賀茂真淵はサワゲドモと訓み、橘守部はサヤゲドモと訓み、近時この訓は有力となったし、「ササの葉はみ山もサヤにサヤげども」とサ音で調子を取っているのだと解釈しているが、これは寧ろ、

「ササの葉はミヤマもサヤにミダレども」のようにサ音とミ音と両方で調子を取っているのだと解釈する方が精しいのである。サヤゲドモではサの音が多過ぎて軽くなり過ぎる。次に、万葉には四段に活かせたミダルの例はなく、あっても他動詞だから応用が出来ないと論ずる学者（沢瀉博士）がいて、殆ど定説にならんとしつつあるが、既にミダリニの副詞があり、それが自動詞的に使われている以上（日本書紀に濫・妄・浪等を当てている）は、四段に活用した証拠となり、古訓法華経の、「不二妄開示一」、古訓老子の、「不レ知レ常妄作凶」等をば、参考とすることが出来る。即ち万葉時代の人々が其等をミダリニと訓んでいただろう。そのほかミダリガハシ、ミダリゴト、ミダリゴコチ、ミダリアシ等の用例が古くあるのである。また自動詞他動詞の区別は絶対的でない以上、四段のミダルは平安朝以後のように他動詞に限られた一種の約束を人麿時代迄溯らせることは無理である。また、此の場合の笹の葉の状態は聴覚よりも寧ろ聴覚を伴う視覚に重きを置くべきであるから、それならばミダレドモと訓む方がよいのである。若しどうしても四段に活用せしめることが出来ないと一歩を譲って、下二段に活用せしめるとしたら、古訓どおりにミダルトモと訓んでも毫も鑑賞に差支はなく、前にあった人麿の、「ささなみの志賀の大わだヨドムトモ」（巻一・三一）の歌の場合と同じく、現在の光景でもトモと用い得るのである。声調の上からいえばミダルトモでもサヤゲドモよりも優さっている。併しミダレドモと訓むならばもっとよいのだから、私はミダレドモの訓に執着するものである。（本書

は簡単を必要とするからミダル四段説は別論して置いた。）

巻七に、「竹島の阿渡白波は動めども（さわげども）われは家おもふ廬悲しみ」（一二三八）というのがあり、類似しているが、人麿の歌の模倣ではなかろうか。

○

青駒の足掻を速み雲居にぞ妹があたりを過ぎて来にける　（巻二・一三六）　柿本人麿

これもやはり人麿が石見から大和へのぼって来る時の歌で、第二長歌の反歌になっている。「青駒」はいわゆる青毛の馬で、黒に青みを帯びたもの、大体黒馬とおもって差支ない。白馬だという説は当らない。「足掻を速み」は馬の駈けるさまである。

一首の意は、妻の居るあたりをもっと見たいのだが、自分の乗っている青馬の駈けるのが速いので、妻のいる筈の里も、いつか空遠く隔ってしまった、というのである。

内容がこれだけだが、歌柄が強く大きく、人麿的声調を遺憾なく発揮したものである。恋愛の悲哀といおうより寧ろ荘重の気に打たれると云った声調である。そこにおのずから人麿的な一つの類型も聯想せられるのだが、人麿は細々したことを描写せずに、真率に真心をこめて歌うのがその特徴だから内容の単純化も行われるのである。「雲居にぞ」といって、「過ぎて来に

ける」と止めたのは実に旨い。もっともこの調子は藤原の御井の長歌にも、「雲井にぞ遠くありける」（巻一・五二）というのがある。この歌の次に、「秋山に落つる黄葉しましくはな散り乱れそ妹があたり見む」（巻二・一三七）というのがある。これも客観的よりも、心の調子で歌っている。それを嫌う人は嫌うのだが、軽浮に堕ちない点を見免してはならぬのである。この石見から上来する時の歌は人麿としては晩年の作に属するものであろう。

○

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらば亦かへり見む　（巻二・一四一）　有間皇子

有間皇子（孝徳天皇皇子）が、斉明天皇の四年十一月、蘇我赤兄に欺かれ、天皇に紀伊の牟婁の温泉（今の湯崎温泉）行幸をすすめ奉り、その留守に乗じて不軌を企てたが、事露見して十一月五日却って赤兄のために捉えられ、九日紀の温湯の行宮に送られて其処で皇太子中大兄の訊問があった。斉明紀四年十一月の条に、「於レ是皇太子、親問二有間皇子一曰、何故謀反、答曰、天与二赤兄一知、吾全不レ解」の記事がある。この歌は行宮へ送られる途中磐代（今の紀伊日高郡南部町岩代）海岸を通過せられた時の歌である。皇子は十一日に行宮から護送され、藤白坂で絞に処せられた。御年十九。万葉集の詞書には、「有間皇子自ら傷しみて松が枝を結べる歌二

首」とあるのは、以上のような御事情だからであった。

一首の意は、自分はかかる身の上で磐代まで来たが、いま浜の松の枝を結んで幸を祈って行く。幸に無事であることが出来たら、二たびこの結び松をかえりみよう、というのである。松枝を結ぶのは、草木を結んで幸福をねがう信仰があった。

無事であることが出来たらというのは、皇太子の訊問に対して言い開きが出来たらというので、皇子は恐らくそれを信じて居られたのかも知れない。「天と赤兄と知る」という御一語は悲痛であった。けれども此歌はもっと哀切である。こういう万一の場合にのぞんでも、ただの主観の語を吐出すというようなことをせず、御自分をその儘素直にいいあらわされて、そして結句に、「またかへり見む」という感慨の語を据えてある。これはおのずからの写生で、抒情詩としての短歌の態度はこれ以外には無いと謂っていいほどである。作者はただ有りの儘に写生したのであるが、後代の吾等がその技法を吟味すると種々の事が云われる。例えば第三句で、「引き結び」と云って置いて、「まさきくあらば」と続けているが、そのあいだに幾分の休止あること、「豊旗雲に入日さし」といって、「こよひの月夜」と続け、そのあいだに幾分の休止あるのと似ているごときである。こういう事が自然に実行せられているために、歌調が、後世の歌のような常識的平俗に堕ることが無いのである。

○

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る　〔巻二・一四二〕　有間皇子

有間皇子の第二の歌である。「笥」というのは和名鈔に盛食器也とあって飯笥のことである。そしてその頃高貴の方の食器は銀器であっただろうと考証している（山田博士）。

一首は、家（御殿）におれば、笥（銀器）に盛る飯をば、こうして旅を来ると椎の葉に盛る、というのである。笥をば銀の飯笥とすると、椎の小枝とは非常な差別である。

前の御歌は、「真幸くあらばまたかへりみむ」と強い感慨を漏らされたが、痛切複雑な御心境を、かく単純にあらわされたのに驚いたのであるが、此歌になると殆ど感慨的な語がないのみでなく、詠歎的な助詞も助動詞も無いのである。併し底を流るる哀韻を見のがし得ないのはどうしてか。吾等の常識では「草枕旅にしあれば」などと、普通羇旅の不自由を歌っているような内容でありながら、そういうものと違って感ぜねばならぬものを此歌は持っているのはどうしてか。これは史実を顧慮するからというのみではなく、史実を念頭から去っても同じことである。これは皇子が、生死の問題に直面しつつ経験せられた現実を直にあらわしているのが、やがて普通の羇旅とは違ったこととなったのである。写生の妙諦はそこにあるので、この結論

は大体間違の無いつもりである。

中大兄皇子の、「香具山と耳成山と会ひしとき立ちて見に来し印南国原」(巻一・一四)という歌にも、この客観的な荘厳があったが、あれは伝説を歌ったので、「孀を争ふらしき」という感慨を潜めていると云っても対象が対象だから此歌とは違うのである。然るに有間皇子は御年僅か十九歳にして、斯る客観的荘厳を成就せられた。

皇子の以上の二首、特にはじめの方は時の人々を感動せしめたと見え、「磐代の岸の松が枝結びけむ人はかへりてまた見けむかも」(巻二・一四三)、「磐代の野中に立てる結び松心も解けずいにしへ思ほゆ」(同・一四四、長忌寸意吉麻呂)、「つばさなすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ」(同・一四五、山上憶良)、「後見むと君が結べる磐代の子松がうれをまた見けむかも」(同・一四六、人麿歌集)等がある。併し歌は皆皇子の御歌には及ばないのは、心が間接になるからであろう。また、穂積朝臣老が近江行幸(養老元年か)に供奉した時の「吾が命し真幸くあらばまたも見む志賀の大津に寄する白浪」(巻三・二八八)もあるが、皇子の歌ほど切実にひびかない。

「椎の葉」は、和名鈔は、「椎子和名之比」であるから椎の葉であってよいが、楢の葉だろうという説がある。そして新撰字鏡に、「椎、奈良乃木也」とあるのもその証となるが、陰暦十月上旬には楢は既に落葉し尽している。また「遅速も汝をこそ待ため向つ峰の椎の小枝の逢ひは違はじ」(巻十四・三四九三)と或本の歌、「椎の小枝の時は過ぐとも」の椎は思比、四比と書いている

から、楢ではあるまい。そうすれば、椎の小枝を折ってそれに飯を盛ったと解していいだろう。「片岡の此向つ峯に椎蒔かば今年の夏の陰になみむか」(巻七・一〇九九)も椎であろうか。そして此歌は詠レ岳だから、椎の木の生長のことなどそう合理的でなくとも、ふとそんな気持になって詠んだものであろう。

○

天の原ふりさけ見れば大王の御寿は長く天足らしたり　〔巻二・一四七〕　倭姫皇后

天智天皇御不予にあらせられた時、皇后(倭姫王)の奉れる御歌である。天皇は十年冬九月御不予、十月御病重く、十二月近江宮に崩御したもうたから、これは九月か十月ごろの御歌であろうか。

一首の意は、天を遠くあおぎ見れば、悠久にしてきわまりない。今、天皇の御寿もその天の如くに満ち足っておいでになる、聖寿無極である、というのである。

天皇御不予のことを知らなければ、ただの寿歌、祝歌のように受取れる御歌であるが、繰返し吟誦し奉れば、かく御願い、かく仰せられねばならぬ切な御心の、切実な悲しみが潜むと感ずるのである。特に、結句に「天足らしたり」と強く断定しているのは、却ってその詠歎の究

竟とも謂うことが出来る。橘守部は、この御歌の「天の原」は天のことでなしに、家の屋根の事だと考証し、新室を祝う室寿の詞の中に「み空を見れば万代にかくしもがも」云々とある等を証としたが、その屋根を天に準えることは、新家屋を寿ぐのが主な動機だから自然にそうなるので、また、万葉巻十九(四二七四)の新嘗会の歌の「天にはも五百つ綱はふ万代に国知らさむと五百つ綱延ふ」でも、宮殿内の肆宴が主だからこういう云い方になるのである。御不予御平癒のための願望動機とはおのずから違わねばならぬと思うのである。縦い、実際的の吉凶を卜する行為があったとしても、天空を仰いでもトせないとは限らぬし、そういう行為は現在伝わっていないから分からぬ。私は、歌に「天の原ふりさけ見れば」とあるから、素直に天空を仰ぎ見たことと解する旧説の方が却って原歌の真を伝えているのでなかろうかと思うのである。守部説は少し穿過ぎた。

この歌は「天の原ふりさけ見れば」といって直ぐ「大王の御寿は」と続けている。これだけでみると、吉凶を卜して吉の徴でも得たように取れるかも知れぬが、これはそういうことではあるまい。此処に常識的意味の上に省略と単純化とがあるので、此は古歌の特徴なのである。散文ならば、蒼天の無際無極なるが如く云々と補充の出来るところなのである。この御歌の下の句の訓も、古鈔本では京都大学本がこう訓み、近くは略解がこう訓んで諸家それに従うようになったものである。

○

青旗の木幡の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも　〔巻二・一四八〕　倭姫皇后

御歌の内容から見れば、天智天皇崩御の後、倭姫皇后の御作歌と看做してよいようである。初句「青旗の」は、下の「木旗」に懸る枕詞で、青く樹木の繁っているのと、下のハタの音に関聯せしめたものである。「木幡」は地名、山城の木幡で、天智天皇の御陵のある山科に近く、古くは、「山科の木幡の山を馬はあれど」(巻十一・二四二五)ともある如く、山科の木幡とも云った。天皇の御陵の辺を見つつ詠まれたものであろう。右は大体契沖の説だが、「青旗の木旗」をば葬儀の時の幢幡のたぐいとする説(考・檜嬬手・攷證)がある。自分も一たびそれに従ったことがあるが、今度は契沖に従った。

一首の意。〔青旗の〕(枕詞)木幡山の御墓のほとりを天がけり通いたもうとは目にありありとおもい浮べられるが、直接にお逢い奉ることが無い。御身と親しく御逢いすることがかなわない、というのである。

御歌は単純蒼古で、徒らに艶めかず技巧を無駄使せず、前の御歌同様集中傑作の一つである。「直に」は、現身と現身と直接に会うことで、それゆえ万葉に用例がなかなか多い。「百重なす

心は思へど直に逢はぬかも」(巻四・四九六)、「うつつにし直にあらねば」(巻十七・三九七八)、「直にあらねば恋ひやまずけり」(同・三九八〇)、「夢にだに継ぎて見えこそ直に逢ふまでに」(巻十二・二九五九)などである。「目には見れども」は、眼前にあらわれて来ることで、写象として、幻として、夢等にしていずれでもよいが、此処は写象としてであろうか。「み空ゆく月読男ゆふさらず目には見れども寄るよしもなし」(巻七・一二七二)、「人言をしげみこちたみ我背子を目には見れども逢ふよしもなし」(巻十二・二九三八)の歌があるが、皆民謡風の軽さで、この御歌ほどの切実なところが無い。

○

人は縦し思ひ止むとも玉かづら影に見えつつ
忘らえぬかも　(巻二・一四九)　倭姫皇后

これには、「天皇崩じ給ひし時、倭太后の御作歌一首」と明かな詞書がある。倭太后は倭姫皇后のことである。

一首の意は、他の人は縦い御崩れになった天皇を、思い慕うことを止めて、忘れてしまおうとも、私には天皇の面影がいつも見えたもうて、忘れようとしても忘れかねます、というのであって、独詠的な特徴が存している。

「玉かづら」は日蔭蔓を髪にかけて飾るよりカケにかけ、カゲに懸けた枕詞とした。山田博士は葬儀の時の華鬘として単純な枕詞にしない説を立てた。この御歌には、「影に見えつつ」とあるから、前の御歌もやはり写象のことと解することが出来るとおもう。「見し人の言問ふ姿面影にして」(巻四・六〇二)、「面影に見えつつ妹は忘れかねつも」(巻八・一六三〇)、「面影に懸かりてもとな思ほゆるかも」(巻十二・二九〇〇)等の用例が多い。

この御歌は、「人は縦し思ひ止むとも」と強い主観の詞を云っているけれども、全体としては前の二つの御歌よりも寧ろ弱いところがある。それは恐らく下の句の声調にあるのではなかろうか。

○

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど
道の知らなく　(巻二・一五八)　高市皇子

十市皇女が薨ぜられた時、高市皇子の作られた三首の中の一首である。十市皇女は天武天皇の皇長女、御母は額田女王、弘文天皇の妃であったが、壬申の戦後、明日香清御原の宮(天武天皇の宮殿)に帰って居られた。天武天皇七年四月、伊勢に行幸御進発間際に急逝せられた。天武紀に、七年夏四月、丁亥朔、欲レ幸二斎宮一、トレ之、癸巳食レト、仍取二平旦時一、警蹕既動、百寮

成レ列、乗輿命レ蓋、以未レ及二出行一、十市皇女、卒然病発、薨二於宮中一、由レ此鹵簿既停、不レ得二幸行一、遂不レ祭二神祇一矣とある。高市皇子は異母弟の間柄にあらせられる。御墓は赤穂にあり、今は赤尾に作っている。

一首の意は、山吹の花が、美しくほとりに咲いている山の泉の水を、汲みに行こうとするが、どう通って行ったら好いか、その道が分からない、というのである。山吹の花にも似た姉の十市皇女が急に死んで、どうしてよいのか分からぬという心が含まれている。

作者は山清水のほとりに山吹の美しく咲いているさまを一つの写象として念頭に浮べているので、謂わば十市皇女と関聯した一つの象徴なのである。そこで、どうしてよいか分からぬ悲しい心の有様を「道の知らなく」と云っても、感情上毫しも無理ではない。併し、常識からは、一定の山清水を指定しているのなら、「道の知らなく」というのがおかしいというので、橘守部の如く、「山吹の立ちよそひたる山清水」というのは、「黄泉」という支那の熟語をくだいてそういったので、黄泉まで尋ねて行きたいが幽冥界を異にしてその行く道を知られないというように解するようになる。守部の解は常識的には道理に近く、或は作者はそういう意図を以て作られたのかも知れないが、歌の鑑賞は、字面にあらわれたものを第一義とせねばならぬから、おのずから私の解釈のようになるし、それで感情上決して不自然ではない。

第二句、「立儀足」は旧訓サキタルであったのを代匠記がタチヨソヒタルと訓んだ。その他に

も異訓があるけれども大体代匠記の訓で定まったようである。ヨソフという語は、「水鳥のたたむヨソヒに」(巻十四・三五二八)をはじめ諸例がある。「山吹の立ちよそひたる山清水」という句が、既に写象の鮮明なために一首が佳作となったのであり、一首の意味もそれで押とおして行って味えば、この歌の優れていることが分かる。古調のいい難い妙味があると共に、意味の上からも順直で無理が無い。黄泉云々の事はその奥にひそめつつ、挽歌としての関聯を鑑賞すべきである。なぜこの歌の上の句が切実かというに、「かはづ鳴く甘南備河にかげ見えて今か咲くらむ山吹の花」(巻八・一四三五)等の如く、当時の人々が愛玩した花だからであった。

○

北山につらなる雲の青雲の星離りゆき月も離りて　〔巻二・一六一〕　持統天皇

天武天皇崩御の時、皇后(後の持統天皇)の詠まれた御歌である。原文には一書曰、太上天皇御製歌、とあるのは、文武天皇の御世から見て持統天皇を太上天皇と申奉った。即ち持統天皇御製として言伝えられたものである。

一首は、北山に連ってたなびき居る雲の、青雲の中の(蒼き空の)星も移り、月も移って行く。天皇おかくれになって万ず過ぎゆく御心持であろうが、ただ思想の綾でなく、もっと具体的な

ものと解していい。

大体右の如く解したが、此歌は実は難解で種々の説がある。「北山に」は原文「向南山」である。南の方から北方にある山科の御陵の山を望んで「向南山」と云ったものであろう。「つらなる雲の」は原文「陣(陳)雲之」で旧訓タナビククモノであるが、古写本中ツラナルクモノと訓んだのもある。けれども古来ツラナルクモという用例は無いので、山田博士の如きも旧訓に従った。併しツラナルクモも可能訓と謂われるのなら、この方が型を破って却って深みを増して居る。次に「青雲」というのは青空・青天・蒼天などということで、雲というのはおかしいようだが、「青雲のたなびく日すら霖そぼ降る」(巻十六・三八八三)、「青雲のいでこ我妹子」(巻十四・三五一九)、「青雲の向伏すくにの」(巻十三・三三二九)等とあるから、晴れた蒼天をも青い雲と信じたものであろう。そこで、「北山に続く青空」のことを、「北山につらなる雲の青雲の」と云ったと解し得るのである。これから、星のことも月のことも、単に「物変星移幾度秋」の如きものでなく、現実の星、現実の月の移ったことを見ての詠歎と解している。

面倒な歌だが、右の如くに解して、自分は此歌を尊敬し愛誦している。「春過ぎて夏来るらし」と殆ど同等ぐらいの位置に置いている。何か渾沌の気があって二二ガ四と割切れないところに心を牽かれるのか、それよりももっと真実なものがこの歌にあるからであろう。自分は、「北山につらなる雲の」だけでももはや尊敬するので、それほど古調を尊んでいるのだが、少

しく偏しているか知らん。

○

神風の伊勢の国にもあらましを何しか来けむ
君も有らなくに　〔巻二・一六三〕　大来皇女

大津皇子が薨じ給うた後、大来(大伯)皇女が伊勢の斎宮から京に来られて詠まれた御歌である。御二人は御姉弟の間柄であることは既に前出の歌のところで云った。皇子は朱鳥元年十月三日に死を賜わった。また皇女が天武崩御によって斎王を退き(天皇の御代毎に交代す)帰京せられたのはやはり朱鳥元年十一月十六日だから、皇女は皇子の死を大体知っていられたと思うが、帰京してはじめて事の委細を聞及ばれたものであっただろう。

一首の意。〔神風の〕(枕詞)伊勢国にその儘とどまっていた方がよかったのに、君も此世を去って、もう居られない都に何しに還って来たことであろう。

「伊勢の国にもあらましを」の句は、皇女真実の御声であったに相違ない。家郷である大和、ことに京に還るのだから喜ばしい筈なのに、この御詞のあるのは、強く読む者の心を打つのである。第三句に、「あらましを」といい、結句に、「あらなくに」とあるのも重くして悲痛である。

なお、同時の御作に、「見まく欲り吾がする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに」(巻二・一六四)がある。前の結句、「君もあらなくに」という句が此歌では第三句に置かれ、「馬疲るるに」という実事の句を以て結んで居るが、この結句にもまた愬えるような響がある。以上の二首は連作で二つとも選っておきたいが、今は一つを従属的に取扱うことにした。

○

現身の人なる吾や明日よりは二上山を弟背と
吾が見む　〔巻二・一六五〕　大来皇女

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき
君がありと云はなくに　〔巻二・一六六〕　同

大津皇子を葛城の二上山に葬った時、大来皇女哀傷して作られた御歌である。「弟背」は原文「弟世」とあり、イモセ、ヲトセ、ナセ、ワガセ等の諸訓があるが、新訓のイロセに従った。同母兄弟をイロセということ、古事記に、「天照大御神之伊呂勢」、「其伊呂兄五瀬命」等の用例がある。

大意。第一首。生きて現世に残っている私は、明日からはこの二上山をば弟の君とおもって

見て慕い偲ぼう。今日いよいよ此処に葬り申すことになった。第二首。石のほとりに生えている、美しいこの馬酔木の花を手折もしようが、その花をお見せ申す弟の君はもはやこの世に生きて居られない。

「君がありと云はなくに」は文字どおりにいえば、「一般の人々が此世に君が生きて居られるとは云わぬ」ということで、人麿の歌などにも、「人のいへば」云々とあるのと同じく、一般にそういわれているから、それが本当であると強めた云い方にもなり、兎に角そういう云い方をしているのである。馬酔木については、「山もせに咲ける馬酔木の、悪からぬ君をいつしか、往きてはや見む」(巻八・一四二八)、「馬酔木なす栄えし君が掘りし井の」(巻七・一一二八)等があり、自生して人の好み賞した花である。

この二首は、前の御歌等に較べて、稍しっとりと底深くなっているようにおもえる。「何しか来けむ」というような強い激越の調がなくなって、「現身の人なる吾や」といって、諦念の如き心境に入ったもののいいぶりであるが、併し二つとも優れている。

○

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る
月の隠らく惜しも　〔巻二・一六九〕　柿本人麿

日並皇子尊の殯宮の時、柿本人麿の作った長歌の反歌である。皇子尊と書くのは皇太子だからである。日並皇子尊（草壁皇子）は持統三年に薨ぜられた。

「ぬばたまの夜わたる月の隠らく」というのは日並皇子尊の薨去なされたことを申上げたので、そのうえの、「あかねさす日は照らせれど」という句は、言葉のいきおいでそう云ったものと解釈してかまわない。つまり、「月の隠らく惜しも」が主である。全体を一種象徴的に歌いあげている。そしてその歌調の渾沌として深いのに吾々は注意を払わねばならない。

この歌の第二句は、「日は照らせれど」であるから、以上のような解釈では物足りないものを感じ、そこで、「あかねさす日」を持統天皇に譬え奉ったものと解釈する説が多い。然るに皇子尊薨去の時には天皇が未だ即位し給わない等の史実があって、常識からいうと、実は変な辻褄の合わぬ歌なのである。併し此処は真淵が万葉考で、「日はてらせれどてふは月の隠るるをなげくを強むる言のみなり」といったのに従っていいと思う。或はこの歌は年代の明かな人麿の作として最初のもので、初期（想像年齢二十七歳位）の作と看做していいから、幾分常識的散文的にいうと腑に落ちないものがあるかも知れない。特に人麿のものは句と句との連続に、省略があるから、それを顧慮しないと解釈に無理の生ずる場合がある。

○

島の宮まがりの池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず　〔巻二・一七〇〕　柿本人麿

人麿が日並皇子尊殯宮の時作った中の、或本歌一首というのである。「勾の池」は島の宮の池で、現在の高市郡高市村*の小学校近くだろうと云われている。一首の意は、勾の池に放ち飼にしていた禽鳥等は、皇子尊のいまさぬ後でも、なお人なつかしく、水上に浮いていて水に潜ることはないというのである。

真淵は此一首を、舎人の作のまぎれ込んだのだろうと云ったが、舎人等の歌は、かの二十三首でも人麿の作に比して一般に劣るようである。例えば、「島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君坐さずとも」（巻二・一七二）、「御立せし島をも家と住む鳥も荒びなゆきそ年かはるまで」（同・一八〇）など、内容は類似しているけれども、何処か違うではないか。そこで参考迄に此一首を抜いて置いた。

○

東の滝の御門に侍へど昨日も今日も召すこともなし　〔巻二・一八四〕　日並皇子宮の舎人

あさ日照る島の御門におぼほしく人音もせねばまうらがなしも　〔巻二・一八九〕　同

日並の皇子尊に仕えた舎人等が慟傷して作った歌二十三首あるが、今その中二首を選んで置いた。「東の滝の御門」は皇子尊の島の宮殿の正門で、飛鳥川から水を引いて滝をなしていただろうと云われている。「人音もせねば」は、人の出入も稀に寂れた様をいった。

大意。第一首。島の宮の東門の滝の御門に伺候して居るが、昨日も今日も召し給うことがない。嘗て召し給うた御声を聞くことが出来ない。第二首。嘗て皇子尊の此世においでになった頃は、朝日の光の照るばかりであった島の宮の御門も、今は人の音ずれも稀になって、心もおぼろに悲しいことである、というのである。

舎人等の歌二十三首は、素直に、心情を抒べ、また当時の歌の声調を伝えて居る点を注意すべきであるが、人麿が作って呉れたという説はどうであろうか。よく読み味って見れば、少し

楽でもあり、手の足りないところもあるようである。なお二十三首のうちには次の如きもある。

朝日てる佐太の岡べに群れゐつつ吾が哭く涙やむ時もなし　（巻二・一七七）

御立せし島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも　（同・一八一）

あさぐもり日の入りぬれば御立せし島に下りゐて嘆きつるかも　（同・一八八）

○

敷妙の袖交へし君玉垂のをち野に過ぎぬ亦も逢はめやも　〔巻二・一九五〕　柿本人麿

この歌は、川島皇子が薨ぜられた時、柿本人麿が泊瀬部皇女と忍坂部皇子とに献った歌である。川島皇子（天智天皇第二皇子）は泊瀬部皇女の夫の君で、また泊瀬部皇女と忍坂部皇子とは御兄妹の御関係にあるから、人麿は川島皇子の薨去を悲しんで、御両人に同時に御見せ申したと解していい。「敷妙の」も、「玉垂の」もそれぞれ下の語に懸る枕詞である。「袖交へし」のカフは波行下二段に活用し、袖をさし交して寝ることで、「白妙の袖さし交へて靡き寝し」（巻三・四八一）という用例もある。「過ぐ」とは死去することである。

一首は、敷妙の袖をお互に交わして契りたもうた川島皇子の君は、今越智野（大和国高市郡）に葬られたもうた。今後二たびお逢いすることが出来ようか、もうそれが出来ない、というの

である。

この歌は皇女の御気持になり、皇女に同情し奉った歌だが、人麿はそういう場合にも自分の事のようになって作歌し得たもののようである。そこで一首がしっとりと充実して決して申訣の余所余所しさというものが無い。第四句で、「越智野に過ぎぬ」と切って、二たび語を起して、「またもあはめやも」と止めた調べは、まことに涙を誘うものがある。

○

零る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の塞

なさまくに　〔巻二・二〇三〕　穂積皇子

但馬皇女が薨ぜられた(和銅元年六月)時から、幾月か過ぎて雪の降った冬の日に、穂積皇子が遙かに御墓(猪養の岡)を望まれ、悲傷流涕して作られた歌である。皇女と皇子との御関係は既に云った如くである。吉隠は磯城郡初瀬町*のうちで、猪養の岡はその吉隠にあったのであろう。「あはにな降りそ」は、諸説あるが、多く降ること勿れというのに従っておく。「塞なさまくに」は塞をなさんに、塞となるだろうからという意で、これも諸説がある。金沢本には、「塞」が「寒」になっているから、新訓では、「寒からまくに」と訓んだ。

一首は、降る雪は余り多く降るな。但馬皇女のお墓のある吉隠の猪養の岡にかよう道を遮っ

て邪魔になるから、というので、皇子は藤原京(高市郡鴨公村*)からこの吉隠(初瀬町)の方を遠く望まれたものと想像することが出来る。

皇女の薨ぜられた時には、皇子は知太政官事の職にあられた。御多忙の御身でありながら、或雪の降った日に、往事のことをも追懐せられつつ吉隠の方にむかってこの吟咏をせられたものであろう。この歌には、解釈に未定の点があるので、鑑賞にも邪魔する点があるが、大体右の如くに定めて鑑賞すればそれで満足し得るのではあるまいか。前出の、「君に寄りなな」とか、「朝川わたる」とかは、皆皇女の御詞であった。そして此歌に於てはじめて吾等は皇子の御詞に接するのだが、それは皇女の御墓についてであった。そして血の出るようなこの一首を作られたのであった。結句の「塞なさまくに」は強く迫る句である。

○

秋山の黄葉を茂み迷はせる妹を求めむ山道知

らずも　〔巻二・二〇八〕　柿本人麿

これは人麿が妻に死なれた時詠んだ歌で、長歌を二つも作って居り、その反歌の一つである。この人麿の妻というのは軽の里(今の畝傍町大軽和田石川五条野**)に住んでいて、其処に人麿が通ったものと見える。この妻の急に死んだことを使の者が知らせた趣が長歌に見えている。

一首は、自分の愛する妻が、秋山の黄葉の茂きがため、その中に迷い入ってしまった。その妻を尋ね求めんに道が分からない、というのである。

死んで葬られることを、秋山に迷い入って隠れた趣に歌っている。こういう云い方は、現世の生の連続として遠い処に行く趣にしてある。当時は未だそう信じていたものであっただろうし、そこで愛惜の心も強く附帯していることとなる。「迷はせる」は迷いなされたという具合に敬語にしている。これは死んだ者に対しては特に敬語を使ったらしく、その他の人麿の歌にも例がある。この一首は亡妻を悲しむ心が極めて切実で、ただ一気に詠みくだしたように見えて、その実心の渦が中にこもっているのである。「求めむ」と云ってもただ尋ねようというよりも、もっと覚官的に人麿の身に即したいい方であるだろう。

なお、人麿の妻を悲しんだ歌に、「去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年さかる」(巻二・二一一)、「衾道を引手の山に妹を置きて山路をゆけば生けりともなし」(同・二一二)がある。共に切実な歌である。二一一の第三句は、「照らせれど」とも訓んでいる。一周忌の歌だろうという説もあるが、必ずしもそう厳重に穿鑿せずとも、今秋の清い月を見て妻を追憶して歎く趣に取ればいい。「衾道を」はどうも枕詞のようである。「引手山」は不明だが、春日の羽易山の中かその近くと想像せられる。

○

楽浪の志我津の子らが罷道の川瀬の道を見れ
ばさぶしも　〔巻二・二一八〕　柿本人麿

吉備津采女が死んだ時、人麿の歌ったものである。「志我津の子ら」とあるから、志我津即ち今の大津あたりに住んでいた女で、多分吉備の国(備前備中備後美作)から来た采女で、現職を離れてから近江の大津辺に住んでいたものと想像せられる。「子ら」の「ら」は親愛の語で複数を示すのではない。「罷道」は此世を去って死んで黄泉の国へ行く道の意である。

一首は、楽浪の志我津にいた吉備津采女が死んで、それを送って川の瀬を渡って行く、まことに悲しい、というのである。「川瀬の道」という語は古代語として注意してよく、実際の光景であったのであろうが、特に「川瀬」とことわったのを味うべきである。川瀬の音も作者の心に沁みたものと見える。

この歌は不思議に悲しい調べを持って居り、全体としては句に屈折・省略等も無く、むつかしくない歌であるが、不思議にも身に沁みる歌である。どういう場合に人麿がこの采女の死に逢ったのか、或は依頼されて作ったものか、そういうことを種々問題にし得る歌だが、人麿は此時、「あまかぞふ大津の子が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき」(巻二・二一九)という歌を

も作っている。これは、生前縁があって一たび会ったことがあるが、その時にはただ何気なく過した。それが今となっては残念である、というので、これで見ると人麿は依頼されて作ったのでなく、采女は美女で名高かった者のようでもあり、人麿は自ら感激して作っていることが分かる。

○

妻もあらば採みてたげまし佐美の山野の上の
宇波疑過ぎにけらずや　〔巻二・二二一〕　柿本人麿

人麿が讃岐狭岑島で溺死者を見て詠んだ長歌の反歌である。今仲多度郡に属し砂弥島と云っている。坂出町から近い。

一首の意は、若し妻が一しょなら、野のほとりの兎芽子（よめ菜）を摘んで食べさせようものを、あわれにも唯一人こうして死んでいる。そして野の兎芽子はもう季節を過ぎてしまっているではないか、というのである。

タグという動詞は下二段に活用し、飲食することである。人麿はこういう種類の歌にもなかなか骨を折り、自分の身内か恋人でもあるかのような態度で作歌して居る。それゆえ軽くすべって行くようなことがなく、飽くまで人麿自身から遊離していないものとして受取ることが出

来るのである。

○

鴨山の磐根し纏ける吾をかも知らにと妹が待
ちつつあらむ　〔巻二・二二三〕　柿本人麿

人麿が石見国にあって死なんとした時、自ら悲しんで詠んだ歌である。当時人麿は石見国府の役人として、出張の如き旅にあって、鴨山のほとりで死んだものであろう。

一首は、鴨山の巌を枕として死んで居る吾をも知らずに、吾が妻は吾の帰るのを待ち詫びていることであろう、まことに悲しい、という意である。

人麿の死んだ時、妻の依羅娘子が、「けふけふと吾が待つ君は石川の峡に（原文、石水貝爾）交りてありといはずやも」（巻二・二二四）と詠んで居り、娘子は多分、角の里にいた人麿の妻と同一人であろうから、そうすれば「鴨山」という山は、石川の近くで国府から少くも十数里ぐらい離れたところと想像することが出来る。そこで自分は昭和九年に「鴨山考」を作って、石川を現在の江川だと見立て、邑智郡粕淵村の津目山を鴨山だろうという仮説を立てたのであったが、昭和十二年一月、おなじ粕淵村の大字湯抱に「鴨山」という名のついた実在の山を発見した。これは二つ峰のある低い山（三六〇米）で津目山より約半里程隔っている。この事は「鴨山後

考」(昭和十三年「文学」六ノ一)で発表した。

この歌は、謂わば人麿の辞世の歌であるが、いつもの人麿の歌程威勢がなく、もっと平凡でしっとりとした悲哀がある。また人麿は死に臨んで悟道めいたことを云わずに、ただ妻のことを云っているのも、なかなかよいことである。次に人麿の歿年はいつごろかというに、真淵は和銅三年ごろだろうとしてあるが、自分は慶雲四年ごろ石見に疫病の流行した時ではなかろうかと空想した。さすれば真淵説より数年若くて死ぬことになるが、それでも四十五歳ぐらいである。

○

大君は神にしませば天雲の雷のうへに廬せる
かも　〔巻三・二三五〕　柿本人麿

天皇(持統天皇)雷岳(高市郡飛鳥村大字雷)*行幸の時、柿本人麿の献った歌である。

一首の意は、天皇は現人神にましますから、今、天に轟く雷の名を持っている山のうえに行宮を御造りになりたもうた、というのである。雷は既に当時の人には天空にある神であるが、天皇は雷神のその上に神随にましますというのである。

これは供奉した人麿が、天皇の御威徳を讃仰し奉ったもので、人麿の真率な態度が、おのずからにして強く大きいこの歌調を成さしめている。雷岳は藤原宮(高市郡鴨公村高殿の伝説地)から半里ぐらいの地であるから、今の人の観念からいうと御散歩ぐらいに受取れるし、雷岳は低い丘陵であるから、この歌をば事々しい誇張だとし、或は、「歌の興」に過ぎぬと軽く見る傾向もあり、或は支那文学の影響で腕に任せて作ったのだと評する人もあるのだが、この一首の荘重な歌調は、そういう手軽な心境では決して成就し得るものでないことを知らねばならない。

抒情詩としての歌の声調は、人を欺くことの出来ぬものである、争われぬものであるということを、歌を作るものは心に慎み、歌を味うものは心を引締めて、覚悟すべきものである。現在でも雷岳の上に立てば、三山をこめた大和平野を一望のもとに眼界に入れることが出来る。人麿は遂に自らを欺かず人を欺かぬ歌人であったということを、吾等もようやくにして知るに近いのであるが、賀茂真淵此歌を評して、「岳の名によりてただに天皇のはかりがたき御いきほひを申せりけるさまはただ此人のはじめてするわざなり」(新採百首解)と云ったのは、真淵は人麿を理会し得たものの如くである。結句の訓、スルカモ、セスカモ等があるが、セルカモに従った。此は荒木田久老(真淵門人)の訓である。

この歌、或本には忍壁皇子に献ったものとして、「大君は神にしませば雲隠る雷山に宮敷きいます」となっている。なお「大君は神にしませば赤駒のはらばふ田井を京師となしつ」(巻十九・四二六〇)、「大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を皇都となしつ」(同・四二六一)、「大君は神にしませば真木の立つ荒山中に海をなすかも」(巻三・二四一)等の参考歌がある。

右のうち巻十九(四二六〇)の、「赤駒のはらばふ田井」の歌は、壬申乱平定以後に、大将軍贈右大臣大伴卿の作である。この大将軍は即ち大伴御行で大伴安麿の兄に当り、高市大卿ともいい、大宝元年に薨じ右大臣を贈られた。壬申乱に天武天皇方の軍を指揮した。此歌は飛鳥の浄見原の京都を讃美したもので、「赤駒のはらばふ」は田の辺に馬の臥しているさまである。此歌

は即ち人麿の歌よりも前であるし、古調でなかなかいいところがあるので、巻十九で云うのを此処で一言費すことにした。四二六一は異伝で童謡風になっている。四二六〇の歌が人麿の歌より前だとすると、人麿に影響したとも取れるが、この歌をはじめて聞いたのは、天平勝宝四年二月二日だとことわってあるから、その辺の事情は好く分からない。

○

否といへど強ふる志斐のが強ひがたりこの頃聞かずてわれ恋ひにけり　〔巻三・二三六〕　持統天皇

否といへど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語と詔る　〔巻三・二三七〕　志斐嫗

この二つは、持統天皇と志斐嫗との御問答歌である。此老女は語部などの職にいて、記憶もよく話も面白かったものに相違ない。第一の歌は御製で、話はもう沢山だといっても、無理に話して聞かせるお前の話も、このごろ暫く聞かぬので、また聞きたくなった。第二の歌は嫗の和え奉った歌で、もう御話は止しましょうと申上げても、語れ語れと御仰せになったのでございましょう。それを今無理強いの御話とおっしゃる、それは御無理でございます。二つは諧謔

的問答歌であるから、即興的であり機智的でもある。その調子を詞の繰返しなどによって知ることが出来る。しかし、お互の御親密の情がこれだけ自由自在に現われるということは、後代の吾等には寧ろ異といわねばならぬ程である。万葉集の歌は千差万別だが、人麿の切実な歌などのあいだに、こういう種類の歌があるのもなつかしく、尊敬せねばならぬのである。この第一の歌の題詞はただ「天皇」とだけあるが、諸家が皆持統天皇であらせられると考えている。さすれば天皇の歌人としての御力量は、「春過ぎて夏来るらし」の御製等と共に、近臣の助力云々などの想像の、いかに当らぬものだかということを証明するものである。「志斐い」の「い」は語調のための助詞で、「紀の関守い留めなむかも」(巻四・五四五)などと同じい。山田博士は、「このイは主格を示す古代の助詞」だと云っている。

○

大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声　〔巻三・二三八〕　長意吉麻呂

長忌寸意吉麻呂が詔に応え奉った歌であるが、持統天皇か文武天皇か難波宮(長柄豊崎宮。現在の大阪豊崎町)に行幸せられた時の作であろう。

海岸で網を引上げるために、網引く者どもの人数を揃えいろいろ差図手配する海人のこえが、

離宮の境内まで聞こえて来る、という歌である。応詔の歌だから、調べも謹直であるが、ありの儘を詠んでいる。併しありの儘を詠んでいるから、大和の山国から海浜に来た人々の、喜ばしく珍しい心持が自然にあらわれるので、強いて心持を出そうなどと意図しても、そう旨く行くものでは無い。

また、この歌は応詔の歌であるが、特に帝徳を讃美したような口吻もなく、離宮に聞こえて来る海人等の声を主にして歌っているのであるが、それでも立派に応詔歌になっているのを見ると、万葉集に散見する献歌の中に、強いて寓意を云々するのは間違だとさえおもえるのである。例えば、「うち手折り多武の山霧しげみかも細川の瀬に波のさわげる」(巻九・一七〇四)という、舎人皇子に献った歌までに寓意を云々するが如きである。つまり、同じく「詔」でも、属目の歌を求められる場合が必ずあるだろうとおもうからである。

○

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわが思はなくに　〔巻三・二四二〕　弓削皇子

弓削皇子(天武天皇第六皇子、文武天皇三年薨去)が吉野に遊ばれた時の御歌である。滝は宮滝の東南にその跡が残っている。三船山はその南にある。

滝の上の三船の山には、あのようにいつも雲がかかって見えるが、自分等はああいう具合に常住ではない。それが悲しい、というので、「居る雲の」は、「常」にかかるのであろう。「常にあらむとわが思はなくに」の句に深い感慨があって、人麿の、「いさよふ波の行方しらずも」などとも一脈相通ずるものがあるのは、当時の人の心にそういう共通な観相的傾向があったとも解釈することが出来る。なお集中、「常にあらぬかも」、「常ならめやも」の句ある歌もあって参考とすべきである。いずれにしても此歌は、景を叙しつつ人間の心に沁み入るものを持って居る。此御歌に対して、春日王は、「大君は千歳にまさむ白雲も三船の山に絶ゆる日あらめや」(巻三・二四三)と和えていられる。

○

玉藻かる敏馬を過ぎて夏草の野島の埼に船ち
かづきぬ　〔巻三・二五〇〕　柿本人麿

これは、柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首という中の一つである。羇旅八首は、純粋の意味の連作でなく、西へ行く趣の歌もあり、東へ帰る趣の歌もある。併し八首とも船の旅であるのは注意していいと思う。敏馬は摂津武庫郡、小野浜から和田岬までの一帯、神戸市の灘区に編入せられている。野島は淡路の津名郡に野島村*がある。

一首の意は、〔玉藻かる〕(枕詞)摂津の敏馬を通って、いよいよ船は〔夏草の〕(枕詞)淡路の野島の埼に近づいた、というのである。

内容は極めて単純で、ただこれだけだが、その単純が好いので、そのため、結句の、「船ちかづきぬ」に特別の重みがついて来ている。一首に枕詞が二つ、地名が二つもあるのだから、普通謂う意味の内容が簡単になるわけである。この歌の、「船近づきぬ」という結句は、客観的で、感慨がこもって居り、驚くべき好い句である。万葉集中では、「ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」(巻一・四八)、「風をいたみ奥つ白浪高からし海人の釣舟浜に帰りぬ」(巻三・二九四)、「あらたまの年の緒ながく吾が念へる児等に恋ふべき月近づきぬ」(巻十九・四二四四)等の例があり、その結句は、文法的には客観的であって、感慨のこもっているものである。第三句、「夏草の」を現実の景と解する説もあるが、これは、「夏草の靡き寝」の如きから、「寝」と「野」との同音によって枕詞となったと解釈した。またこう解すれば、「奴流」(寝)は「奴島」(巻三・二四九)のヌと同じく、時には「努」(野)とも通用したことが分かるし、阿之比奇能夜麻古要奴由伎(巻十七・三九七八)の、「奴由伎」は「野ゆき」であるから、「奴」、「努」の通用した実例である。即ち甲類乙類の仮名通用の例でもあり、野の中間音でヌと発音した積極的な例ともなり、ノと書くことの間違だということも分かるのである。また現在淡路三原郡に沼島村*があるのは、野島の変化だとせば、野島をヌシマと発音した証拠となる。

○

稲日野も行き過ぎがてに思へれば心恋しき可古の島見ゆ　〔巻三・二五三〕　柿本人麿

人麿作、これも八首中の一つである。稲日野は印南野とも云い、播磨の印南郡の東部即ち加古川流域の平野と加古・明石三郡にわたる地域をさして云っていたようである。約めていえば、稲日野は加古川の東方にも西方にも亙っていた平野と解釈していい。可古島は現在の高砂町*あたりだろうと云われている。島でなくて埼でも島と云ったことは、伊良虞の島の条下で説明し、また後に出て来る、倭島の条下でも明かである。加古は今は加古郡だが、もとは(明治二十二年迄)印南郡であった。

一首の意は、広々とした稲日野近くの海を航していると、舟行が捗々しくなく、種々ものおもいしていたが、ようやくにして恋しい加古の島が見え出した、というので、西から東へ向って航している趣の歌である。

「稲日野も」の「も」は、「足引のみ山も清に落ちたぎつ」(巻六・九二〇)、「筑波根の岩もとどろに落つるみづ」(巻十四・三三九二)などの「も」の如く、軽く取っていいだろう。「過ぎがてに」は、舟行が遅くて、広々した稲日野の辺を中々通過しないというので、舟はなるべく岸近く漕ぐから、稲日野が見えている趣なのである。「思へれば」は、彼此おもう、いろいろおもうの意で、此句と、前の句との間に小休止があり、これはやはり人麿的なのであるから、「ものおもふ」ぐらいの意に取ればいい。つまり旅の難儀の気持である。然るに従来この句を、稲日野の景色が佳いので、立去り難いという気持の句だと解釈した先輩(契沖以下殆ど同説)の説が多い。併しこの場合にはそれは感服し難い説で、そうなれば歌がまずくなってしまうと思うがどうであろうか。また用語の類例としては、「縄の浦に塩焼くけぶり夕されば行き過ぎかねて山に棚引く」(巻三・三五四)があって、私の解釈の無理でないことを示している。

この歌は羇旅中の感懐であって、風光の移るにつれて動く心の儘を詠じ、歌詞それに伴うてまことに得難い優れた歌となった。そして、「心恋しき加古の島」あたりの情調には、恋愛にかようような物懐しいところがあるが、人麿は全体としてそういう抒情的方面の豊かな歌人であった。

○

ともしびの明石大門に入らむ日や榜ぎ別れなむ家のあたり見ず　〔巻三・二五四〕　柿本人麿

人麿作、羇旅八首中の一。これは西の方へ向って船で行く趣である。

一首の意は、〔ともしびの〕(枕詞)明石の海門を通過する頃には、いよいよ家郷の大和の山々とも別れることとなるであろう。その頃には家郷の大和も、もう見えずなる、というのである。「入らむ日や」の「や」は疑問で、「別れなむ」に続くのである。

歌柄の極めて大きいもので、その点では万葉集中稀な歌の一つであろうか。そして、「入らむ日や」といい、「別れなむ」というように調子をとっているのも波動的に大きく聞こえ、「の」、「に」、「や」などの助詞の使い方が実に巧みで且つ堂々としておる。特に、第四句で、「榜ぎ別れなむ」と切って、結句で、「家のあたり見ず」と独立的にしたのも、その手腕敬憬すべきである。由来、「あたり見ず」というような語には、文法的にも毫も詠歎の要素が無いのである。「かも」とか、「けり」とか、「はや」とか、「あはれ」とか云って始めて詠歎の要素が入って来るのである。文法的にはそうなのであるが、歌の声調方面からいうと、響きから論ずるから、「あたり見ず」で充分詠歎の響があり、結句として、「かも」とか、「けり」とかに匹敵するだけの効果をもっているのである。この事は、万葉の秀歌に随処に見あたるので、「その草深野」、「棚無し小舟」、「印南国原」、「厳檀が本」という種類でも、「月かたぶきぬ」、「加古の島見ゆ」、「家のあたり見ず」でも、また、詠歎の入っている、「見れど飽かぬかも」、「見れば悲しも」、「隠さふべしや」等でも、結局は同一に帰するのである。そういうことを万葉の歌人が実行しているのだから、驚き尊敬せねばならぬのである。こういう事は、近く出す拙著、「短歌初学

門」でも少しく説いて置いた筈である。

○

天ざかる夷の長路ゆ恋ひ来れば明石の門より倭島見ゆ　〔巻三・二五五〕　柿本人麿

人麿作、羇旅八首中の一。これは西から東へ向って帰って来る時の趣で、一首の意は、遠い西の方から長い海路を来、家郷恋しく思いつづけて来たのであったが、明石の海門まで来ると、もう向うに大和が見える、というので、羇旅の歌としても随分自然に歌われている。それよりも注意するのは、一首が人麿一流の声調で、強く大きく豊かだということである。そしていて、浮腫のようにぶくぶくしていず、遒勁とも謂うべき響だということである。こういう歌調も万葉歌人全般という訣には行かず、家持の如きも、こういう歌調を学んでなおここまで到達せずにしまったところを見れば、何の彼のと安易に片付けてしまわれない、複雑な問題が包蔵されていると考うべきである。この歌の、「恋ひ来れば」も、前の、「心恋しき」に類し、ただ一つこういう主観語を用いているのである。一、二参考歌を拾うなら、「旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖に榜ぐ見ゆ」(巻三・二七〇)は黒人作、「堀江より水脈さかのぼる楫の音の間なくぞ奈良は恋しかりける」(巻二十・四四六一)は家持作である。共に「恋」の語が入っている。

なお、人麿の羈旅歌には、「飼飯の海の庭よくあらし苅ごもの乱れいづ見ゆ海人の釣船」(巻三・二五六)というのもあり、棄てがたいものである。飼飯の海は、淡路西海岸三原郡湊町*の近くに慶野松原がある。其処の海であろう。なお、人麿が筑紫に下った時の歌、「名ぐはしき稲見の海の奥つ浪千重に隠りぬ大和島根は」(同・三〇三)、「大王の遠のみかどと在り通ふ島門を見れば神代し念ほゆ」(同・三〇四)があり、共に佳作であるが、人麿の歌が余り多くなるので、従属的に此処に記すこととした。新羅使等が船上で吟誦した古歌として、「天離るひなの長道を恋ひ来れば明石の門より家の辺見ゆ」(巻十五・三六〇八)があるが、此は人麿の歌が伝わったので、人麿の歌を分かり好く変化せしめている。

○

矢釣山木立も見えず降り乱る雪に驟く朝たぬしも　〔巻三・二六二〕　柿本人麿

柿本人麿が新田部皇子に献った長歌の反歌で、長歌は、「やすみしし吾大王、高耀る日の皇子、敷きいます大殿の上に、ひさかたの天伝ひ来る、雪じもの往きかよひつつ、いや常世まで」という簡浄なものである。この短歌の下の句の原文は、「落乱、雪驟、朝楽毛」で、古来種々の訓があった。私が人麿の歌を評釈した時には、新訓(佐佐木博士)の、「雪に驟うつ朝たぬしも」に

従ったが、今回は、故生田耕一氏の「雪に驟く朝楽しも」に従った。ウクツクとは、新撰字鏡に、驟也、宇久豆久とあって、馬を威勢よく走らせることである。矢釣山は、高市郡八釣村*がある、そこであろう。この歌は、大体そう訓んで味うと、なかなかよい歌で棄てがたいのである。「矢釣山木立も見えず降りみだる」あたりの歌調は、人麿でなければ出来ないものを持っている。結句の訓も種々で考のマキリクラクモに従う学者も多い。山田博士は、「雪にうくづきまゐり来らくも」と訓み、「古は初雪の見参といふ事ありて、初雪には早朝におくれず祗候すべき儀ありしなり」(講義)と云っている。なお吉田増蔵氏は、「雪に馬並めまゐり来らくも」と訓んだ。また、「乱」をマガフ、サワグ等とも訓んでいる。これは、四段の自動詞に活用しないという結論に本づく根拠もあるのだが、私は今回もミダルに従った。若し、マキリクラクモと訓むとすると、「ふる雪を腰になづみて参り来し験もあるか年のはじめに」(巻十九・四二三〇)が参考となる歌である。

○

もののふの八十うぢ河の網代木にいさよふ波
のゆくへ知らずも　〔巻三・二六四〕　柿本人麿

柿本人麿が近江から大和へ上ったとき宇治川のほとりで詠んだものである。「もののふの八

十氏」は、物部には多くの氏があるので、八十氏といい、同音の宇治川に続けて序詞とした。網代木は、網の代用という意味だが、これは冬宇治川の氷魚を捕るために、沢山の棒杭を水中に打ち、恐らく上流に向って狭くなるように打ったと思うが、其処が水流が急でないために魚が集って来る、それを捕るのである。其処の棒杭に水が停滞して白い波を立てている光景である。

この歌も、「あまざかる夷の長道ゆ」の歌のように、直線的に伸々とした調べのものである。この歌の上の句は序詞で、現代歌人の作歌態度から行けば、寧ろ鑑賞の邪魔をするのだが、吾等はそれを邪魔と感ぜずに、一首全体の声調的効果として受納れねばならぬ。そうすれば豊潤で太い朗かな調べのうちに、同時に切実峻厳、且つ無限の哀韻を感得することが出来る。この哀韻は、「いさよふ波の行方知らず」にこもっていることを知るなら、上の句の形式的に過ぎない序詞は、却って下の句の効果を助長せしめたと解釈することも出来るのである。この限り無き哀韻は、幾度も吟誦してはじめて心に伝わり来るもので、平俗な理論で始末すべきものではない。

この哀韻は、近江旧都を過ぎた心境の余波だろうとも説かれている。これは否定出来ない。なおこの哀韻は支那文学の影響、或は仏教観相の影響だろうとも云われている。人麿ぐらいな力量を有つ者になれば、その発達史も複雑で、支那文学も仏教も融けきっているとも解釈出来

るが、この歌の出来た時の人麿の態度は、自然への観入・随順であっただけである。その関係を前後混同して彼此云ったところで、所詮戯論に終わるので、理窟は幾何精しいようでも、この歌から遊離した上の空の言辞ということになるのである。或人はこの歌を空虚な歌として軽蔑するが、自分はやはり人麿一代の傑作の一つとして尊敬するものである。

○

苦しくも降り来る雨か神が埼狭野のわたりに
家もあらなくに　〔巻三・二六五〕　長奥麻呂

長忌寸奥麻呂(意吉麻呂)の歌である。神が埼(三輪崎)は紀伊国東牟婁郡の海岸にあり、狭野(佐野)はその近く西南方で、今はともに新宮市に編入されている。「わたり」は渡し場である。第二句で、「降り来る雨か」と詠歎して、愬えるような響を持たせたのにこの歌の中心があるだろう。そして心が順直に表わされ、無理なく受納れられるので、古来万葉の秀歌として評価されたし、「駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ」という如き、藤原定家の本歌取の歌もあるくらいである。それだけ感情が通常だとも謂えるが、奥麻呂は実地に旅行しているのでこれだけの歌を作り得た。定家の空想的模倣歌などと比較すべき性質のものではない。弁基(春日蔵首老)の歌に、「まつち山ゆふ越え行きていほさきの角太河原にひとりかも寝

む」(巻三・二九八)というのがあるが、この頃の人々は、自由に作っていて感のとおっているのは気持が好い。

近時土屋文明氏は、「神之埼」をカミノサキと訓む説を肯定し、また紀伊新宮附近とするは万葉時代交通路の推定から不自然のようにおもわれることを指摘し、和泉日根郡の神前*を以て擬するに至った。また佐野も近接した土地で共に万葉時代から存在した地名と推定することも出来、和泉ならば紀伊行幸の経路であるから、従駕の作者が詠じたものと見ることが出来るというのである。

○

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ　〔巻三・二六六〕　柿本人麿

柿本人麿の歌であるが、巻一の近江旧都回顧の時と同時の作か奈何か不明である。「夕浪千鳥」は、夕べの浪の上に立ちさわぐ千鳥、湖上の低い空に群れ啼いている千鳥で、古代造語法の一つである。一首の意は、淡海の湖に、その湖の夕ぐれの浪に、千鳥が群れ啼いている。千鳥等よ、お前等の啼く声を聞けば、真から心が萎れて、昔の都の栄華のさまを偲ばれてならない、というのである。

この歌は、前の宇治河の歌よりも、もっと曲折のある調べで、その中に、「千鳥汝が鳴けば」という句があるために、調べが曲折すると共に沈厚なものにもなっている。また独詠的な歌が、相手を想像する対詠的歌の傾向を帯びて来たが、これは、「志賀の辛崎幸くあれど」とつまりは同じ傾向となるから、ひょっとしたら、巻一の歌と同時の頃の作かも知れない。

巻三(三七一)に、門部王の、「飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば吾が佐保河の念ほゆらくに」があり、巻八(一四六九)に沙弥作、「足引の山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常におもほゆ」、巻十五(三七八五)に宅守の、「ほととぎす間しまし置け汝が鳴けば吾が思ふこころ甚も術なし」があるが、皆人麿のこの歌には及ばないのみならず、人麿の此歌を学んだものかも知れない。

○

鼯鼠は木ぬれ求むとあしひきの山の猟夫にあひにけるかも　〔巻三・二六七〕　志貴皇子

志貴皇子の御歌である。皇子は天智天皇第四皇子、持統天皇(天智天皇第二皇女)の御弟、光仁天皇の御父という御関係になる。

一首の意は、鼯鼠が、林間の梢を飛渡っているうちに、猟師に見つかって獲られてしまった、というのである。

この歌には、何処かにしんみりとしたところがあるので、古来寓意説があり、徒らに大望を懐いて失脚したことなどを寓したというのであるが、この歌には、鼯鼠の事が歌ってあるのだから、第一に鼯鼠の事を詠み給うた歌として受納れて味うべきである。寓意の如きは奥の奥へ潜めて置くのが、現代人の鑑賞の態度でなければならない。そうして味えば、この歌には皇子一流の写生法と感傷とがあって、しんみりとした人生観相を暗指しているのを感じ、選ぶなら選ばねばならぬものに属している。寓意説のおこるのは、このしみじみした感傷があるためであるが、それをば寓意として露骨にするから、全体を破壊してしまうのである。天平十一年大伴坂上郎女の歌に、「ますらをの高円山に迫めたれば里に下りける鼯鼠ぞこれ」(巻六・一〇二八)というのがあり、これは実際この小獣を捕えた時の歌で寓意でなく、この小獣に注して、「俗に牟射佐奴といふ」とあるから愛すべき小獣として人の注目を牽いたものであろう。略解に、「此御歌は人の強ひたる物ほしみして身を亡すに譬たまへるにや。此皇子の御歌にはさる心なるも又見ゆ。大友大津の皇子たちの御事などを御まのあたり見たまひて、しかおぼすべきなり」とあるなどは寓意説に溺れたものである。(檜嬬手も全く略解の説を踏襲している。)

○

旅にしてもの恋しきに山下の赤のそほ船沖に
榜ぐ見ゆ　〔巻三・二七〇〕　高市黒人

高市連黒人の羇旅八首中の一つである。この歌の、「山下の」は、「秋山の下ぶる妹」(巻二・二一七)などの如く、紅葉の美しいのに関係せしめて使って居るから、「赤」の枕詞に用いたものらしい。「そほ」は赭土から取った塗料で、赭土といっても、赤土、鉄分を含んだ泥土、粗製の朱等いろいろであった。その精品を真朱といって、「仏つくる真朱足らずは」(巻十六・三八四一)の例がある。「赤のそほ船」は赤く塗った船である。「沖ゆくや赤羅小船」(同・三八六八)も赤く塗った船のことである。そこで一首の意味は、旅中にあれば何につけ都が恋しいのに、沖の方を見れば赤く塗った船が通って行く、あれは都へのぼるのであろう。羨しいことだ、というので、今から見れば羇旅の歌の常套手段のようにも取れるが、当時の歌人にとっては常に実感であったのであろう。黒人の歌は具象的で写象も鮮明だが、人麿の歌調ほど切実でないから、「もの恋しき」と云ったり、「古への人にわれあれや」等と云っても、稍通俗に感ぜしめる余裕がある。巻一(六七)に、「旅にしてもの恋しぎの鳴くことも聞えざりせば恋ひて死なまし」は持統天皇難波行幸の時、高安大島の作ったものだが、上の句が似ている。

○

桜田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる　〔巻三・二七一〕　高市黒人

黒人作。羇旅八首の一。「桜田」は、和名鈔の尾張国愛知郡作良郷、現在熱田の東南方に桜*がある。その桜という海浜に近い土地の田の事である。或は桜田という地名だという説もある。「年魚市潟」は、和名鈔に尾張国愛知郡阿伊智とあり、熱田南方の海岸一帯が即ち年魚市(書紀に吾湯市)潟で、桜はその一部である。今の熱田新田と称する辺も古えは海だったろうと云われている。一首の意味は、陸の方から海に近い桜の田の方へ向って、鶴が群れて通って行くが、多分年魚市潟一帯が潮干になったのであろう、というのである。一首の中に地名が二つも入って居て、それに「鶴鳴きわたる」を二度繰返しているのだから、内容からいえば極く単純なものになってしまった。併し一首全体が高古の響を保持しているのは、内容がこせこせしない為めであり、「桜田へ鶴鳴きわたる」という唯一の現在的内容が却って鮮明になり、一首の風格も大きくなった。そのあいだに、「年魚市潟潮干にけらし」という推量句が入っているのだが、この推量も大体分かっている現実的推量で、ただぼんやりした想像ではないのが特色である。けれどもこの歌は、桜田が主で、桜田を眺める位置に作者が立っている趣で、あゆち潟というのはもっと離れているところであろう。一首の形態からいうと、前出の、「吾はもや安見児得たり皆人の得がてにすとふ安見児得たり」(巻二・九五)などと殆ど同じである。また内容からいうと、「年魚市潟潮干にけらし知多の浦に朝榜ぐ舟も沖に寄る見ゆ」(巻七・一一六三)「可之布江に鶴鳴きわたる志珂の浦に沖つ白浪立ちし来らしも」(巻十五・三六五四)など類想の歌が多い。おなじ黒人の歌でも、「住吉の得名津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆ出づる舟人」(巻三・二八三)は、少しく楽過ぎて、人麿の「乱れいづ見ゆあまの釣舟」(同・二五六)には及ばない。けれども黒人には黒人の本領があり、人麿の持っていないものがあるから、それを見のがさないように努むべきである。

此処の、「四極山うち越え見れば笠縫の島榜ぎかくる棚無し小舟」(同・二七二)も佳作で、後年山部赤人に影響を与えたものである。四極山、笠縫島は参河という説と摂津という説とあるが、今は仮りに契沖以来の、参河国幡豆郡磯泊(之波止)説に従って味うこととする。また、「妹も吾も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる」(同・二七六)というのもある。三河の二見は御油から吉田に出る二里半余の道だといわれている。「妹」は、かりそめに親しんだそのあたりの女であろう。上句は、お前も俺も一体だからだろうと気転を利かしたいい方である。黒人のには上半にこういう主観句のものが多い。それが成功したのもあればまずいのもある。

○

何処にか吾は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば　〔巻三・二七五〕　高市黒人

黒人作。羇旅歌つづき。「高島の勝野」は、近江高島郡三尾のうち、今の大溝町*である。黒人の羇旅の歌はこれを見ても場処の移動につれ、その時々に詠んだことが分かる。これは勝野の原の日暮にあって詠んだので、それが現実的内容で、「何処にか吾は宿らむ」はそれに伴う自然的詠歎である。かく詠歎を初句第二句に置くのは、黒人の一つの傾向とも謂うことが出来るであろう。この詠歎は率直簡単なので却って効果があり、全体として旅中の寂しい心持を表現し得たものである。黒人作で、近江に関係あるものは、「磯の埼榜ぎたみゆけば近江の海八十の湊に鶴さはに鳴く」(巻三・二七三)、「吾が船は比良の湊に榜ぎ泊てむ沖へな放りさ夜ふけにけり」(同・二七四)がある。「沖へな放かり」というのは、余り沖遠くに行くなというので特色のある句である。「わが舟は明石の浦に榜ぎはてむ沖へな放かりさ夜ふけにけり」(巻七・一二二九)というのは、黒人の歌が伝誦のあいだに変化し、勝手に「明石」と直したものであろう。

○

疾く来ても見てましものを山城の高の槻村散りにけるかも　〔巻三・二七七〕　高市黒人

黒人羇旅八首の一つ、これは山城の旅になっている。原文の「高槻村」は、旧訓タカツキムラノであったのを、槻落葉でタカツキノムラと訓み、「高く槻の木の生たる木群をいふ成べし」といって学者多くそれに従ったが、生田耕一氏が、高は山城国綴喜郡多賀郷のタカで、今の多賀・井手*あたりであろうという説をたて、他の歌例に、「山城の泉の小菅」、「山城の石田の杜」などあるのを参考し、「山城の高の槻村」だとした。爾来諸学者それを認容するに至った。

一首の意は、もっと早く来て見れば好かったのに、今来て見れば此処の山城の高という村の槻の林の黄葉も散ってしまった、というので、高(多賀郷)の槻の林というものはその当時も有名であったのかも知れない。或は高というのは郷の名でも、作者の意識には、「高い槻の木」ということをほのめかそうとしたのであったのかも知れない。そうすれば、従来槻落葉の説に従って味って来たようにして味うことも出来る。この歌では、「山城の高の槻村散りにけるかも」という詠歎が主眼なのだが、沁みとおるような響が無い。また、「疾く来ても見てましものを」と云っても、いかにもあっさりして居る。是は単に旅の歌だから自然この程度の感慨になるの

だが、つまりは黒人流なのだということになるのであろう。

○

此処にして家やもいづく白雲の棚引く山を越えて来にけり　〔巻三・二八七〕　石上卿

志賀に行幸あった時、石上卿の作ったものであるが、作者の伝は不明で、行幸せられた天皇も、荒木田久老は、大宝二年太上天皇(持統天皇)が三河美濃に行幸あった時、近江にも立寄られたのだろうと云っている。そうすれば石上麻呂であるかも知れない。左大臣石上麻呂は養老元年三月に薨じているから、後人が題詞を書いたとせば、「卿」でもよいのである。併し養老元年九月の行幸(元正天皇)の時だとすると、やはり槻落葉でいったごとく石上豊庭だろうということとなる。この豊庭説が有力である。

旅を遙々来た感じで、直線的にいい下して、相当の感情を出している歌である。大伴旅人の歌に、「此処にありて筑紫や何処白雲の棚引く山の方にしあるらし」(巻四・五七四)というのがあって、形態が似ている。これは旅人の歌よりも早いものであるが、只今は二つ並べて鑑賞することとする。この歌の、「白雲の棚引く山を越えて来にけり」も、近江で詠んだのだから、直接性があるし、旅人のは京にあって筑紫を詠んだのだから、間接のようだが、これは筑紫に残っ

ている沙弥満誓に和えた歌だから、そういう意味で心に直接性があるのである。

○

昼見れど飽かぬ田児の浦大王のみことかしこみ夜見つるかも　〔巻三・二九七〕　田口益人

田口益人が和銅元年上野国司となって赴任の途上駿河国浄見埼を通って来た時の歌である。国司は守・介・掾・目ともに通じていうが、ここは国守である。浄見埼は廬原郡の海岸で今の興津清見寺*あたりだといわれている。この歌の前に、「廬原の清見が埼の三保の浦の寛けき見つつもの思ひもなし」(巻三・二九六)というのがある。三保は今は清水市だが古えは廬原郡であった。「清見が埼の」も、「三保の浦の」も共に「寛けき」に続く句法である。「田児浦」は今は富士郡だが、古えは廬原郡にもかかった範囲の広かったもので、東海道名所図絵に、「都て清見興津より、ひがし浮島原迄の海浜の惣号なるべし」とある。

さて、此一首は、昼見れば飽くことのない田児浦のよい景色をば、君命によって赴任する途上だから夜見た、というので、昼見る景色はまだまだ佳いのだという意が含まっているのである。そして、なぜ夜見たとことわったかというに、山田(孝雄)博士の考証がある(講義)。駿河国府(静岡)を立って、息津、蒲原と来るのだが、その蒲原まで来るあいだに田児浦がある。静

岡から息津まで九里、息津から蒲原まで四里、それを一日の行程とすると、蒲原に着くまえに夜になったのであろう、というのである。

この歌は右の如く、事実によって詠んだものであるが、この歌を読むといつも不思議な或るものを感じて今日まで来たのであった。それは、「夜見つるかも」という句にあって、この「夜」というのに、特有の感じがあると思うのである。作者は、「夜の田児浦」をばただ事実によってそういっただけだが、それでもその夜の感動が後代の私等に伝わるのかも知れないのである。

補記。近時沢瀉久孝氏は田児浦を考証し、「薩埵峠の東麓より、由比、蒲原を経て吹上浜に至る弓状をなす入海を上代の田児浦とする」とした。

○

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける　〔巻三・三一八〕　山部赤人

山部宿禰赤人が不尽山を詠んだ長歌の反歌である。「田児の浦」は、古えは富士・廬原の二郡に亙った海岸をひろく云っていたことは前言のとおりである。「田児の浦ゆ」の「ゆ」は、「より」という意味で、動いてゆく詞語に続く場合が多いから、此処は「打ち出でて」につづく。「家ゆ出でて三年がほどに」、「痛足の川ゆ行く水の」、「野坂の浦ゆ船出して」、「山の際ゆ出雲の

児ら」等の用例がある。また「ゆ」は見渡すという行為にも関聯しているから、「見れば」にも続く。「わが寝たる衣の上ゆ朝月夜さやかに見れば」、「海人の釣舟浪の上ゆ見ゆ」、「舟瀬ゆ見ゆる淡路島」等の例がある。前に出た、「御井の上より鳴きわたりゆく」の「より」のところでも言及したが、言語は流動的なものだから、大体の約束による用例に拠って極めればよく、それも幾何学の証明か何ぞのように堅苦しくない方がいい。つまり此処で赤人はなぜ「ゆ」を使ったかというに、作者の行為・位置を示そうとしたのと、「に」とすれば、「真白にぞ」の「に」に邪魔をするという微妙な点もあったのであろう。

赤人の此処の長歌も簡潔で旨く、その次の無名氏(高橋連虫麿か)の長歌よりも旨い。また此反歌は古来人口に膾炙し、叙景歌の絶唱とせられたものだが、まことにその通りで赤人作中の傑作である。赤人のものは、総じて健康体の如くに、清潔なところがあって、だらりとした弛緩がない。ゆえに、規模が大きく緊密な声調にせねばならぬような対象の場合に、他の歌人の企て及ばぬ成功をするのである。この一首中にあって最も注意すべき二つの句、即ち、第三句で、「真白にぞ」と大きく云って、結句で、「雪は降りける」と連体形で止めたのは、柿本人麿の、「青駒の足掻を速み雲居にぞ妹があたりを過ぎて来にける」(巻二・一三六)という歌と形態上甚だ似ているにも拘わらず、人麿の歌の方が強く流動的で、赤人の歌の方は寧ろ浄勁とでもいうべきものを成就している。古義で、「真白くぞ」と訓み、新古今で、「田子の浦に打出て見れ

ば白妙の富士の高根に雪は降りつつ」として載せたのは、種々比較して味うのに便利である。また、無名氏の反歌、「不尽の嶺に降り置ける雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり」（巻三・三二〇）も佳い歌だから、此処に置いて味っていい。（附記。山田博士の講義に、「田児浦の内の或地より打ち出で見ればといふことにて足る筈なり。かくてその立てる地も田子浦の中たるなり」と説明して居る。）

○

あをによし寧楽の都は咲く花の薫ふがごとく
今盛なり　〔巻三・三二八〕　小野老

太宰少弐小野老朝臣の歌である。老は天平十年（続紀には九年）に太宰大弐として卒したが、作歌当時は大伴旅人が太宰帥であった頃その部下にいたのであろう。巻五の天平二年正月の梅花歌中に「小弐小野大夫」の歌があるから、この歌はその後、偶々帰京したあたりの歌ででもあろうか。歌は、天平の寧楽の都の繁栄を讃美したもので、直線的に云い下して毫も滞るところが無い。「春花のにほえ盛えて、秋の葉のにほひに照れる」（巻十九・四二一一）などと云って、美麗な人を形容したのがあるが、此歌は帝都の盛大を謳歌したのであるから、もっと内容が複雑宏大となるわけである。併し同時に概念化してゆく傾向も既に醸されつつあるのは、単にこの歌のみでなく、一般に傾向文学の入ってゆかねばならぬ運命でもあるのである。またこの歌の作風は旅人の歌にあるような、明快で豊かなものだから、繰返しているうちに平板通俗にも移行し得るのである。人麿以前の歌調などと較べるとその差が既に著しい。「梅の花いまさかりなり思ふどち挿頭にしてな今さかりなり」（巻五・八二〇）という歌を参考とすることが出来る。

○

わが盛また変若めやもほとほとに寧楽の京を
見ずかなりなむ　〔巻三・三三一〕　大伴旅人

太宰帥大伴旅人が、筑紫太宰府にいて詠んだ五首中の一つである。旅人は六十二、三歳頃（神亀三、四年）太宰帥に任ぜられ、天平二年大納言になって兼官の儘上京し、天平三年六十七歳で薨じている。そこで此歌は、六十三、四歳ぐらいの時の作だろうと想像せられる。

一首の意は、吾が若い盛りが二たび還って来ることがあるだろうか、もはやそれは叶わぬことだ。こうして年老いて辺土に居れば、寧楽の都をも見ずにしまうだろう、というので、「をつ」という上二段活用の語は、元へ還ることで、若がえることに用いている。「昔見しより変若ましにけり」（巻四・六五〇）は、昔見た時よりも却って若返ったという意味で、旅人の歌の、「変若」と同じである。

旅人の歌は、彼は文学的にも素養の豊かな人であったので、極めて自在に歌を作っているし、寧ろ思想的抒情詩という方面にも開拓して行った人だが、歌が明快なために、一首の声調に暈が少いという欠点があった。その中にあって此歌の如きは、流石に老に入った境界の作で、感慨もまた深いものがある。

○

わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため　〔巻三・三三二〕　大伴旅人

旅人作の五首中の一首である。一首の意は、わが命もいつも変らずありたいものだ。昔見た吉野の象の小川を見んために、というので、「常にあらぬか」は文法的には疑問の助詞だが、斯く疑うのは希う心があるからで、結局同一に帰する。「苦しくも降りくる雨か」でも同様である。この歌も分かり易い歌だが、平俗でなく、旅人の優れた点をあらわし得たものであろう。哀韻もここまで目立たずに籠れば、歌人として第一流と謂っていい。やはり旅人の作に、「昔見し象の小河を今見ればいよよ清けくなりにけるかも」(巻三・三一六)というのがある。これは吉野宮行幸の時で、聖武天皇の神亀元年だとせば、「わが命も」の歌よりも以前で、未だ太宰府に行かなかった頃の作ということになる。

○

しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖けく見ゆ　〔巻三・三三六〕　沙弥満誓

沙弥満誓が綿を詠じた歌である。満誓は笠朝臣麻呂で、出家して満誓となった。養老七年満誓に筑紫の観世音寺を造営せしめた記事が、続日本紀に見えている。満誓の歌としては、「世の中を何に譬へむ朝びらき榜ぎ去にし船の跡なきが如(跡なきごとし)」(巻三・三五一)という歌が有名であり、当時にあって仏教的観相のものとして新しかったに相違なく、また作者も出家した後だから、そういう深い感慨を意識して漏らしたものに相違なかろうが、こういう思想的な歌は、縦い力量があっても皆成功するとは限らぬものである。この現世無常の歌に較べると、筑紫の綿の方が一段上である。

この綿は、真綿(絹綿)という説と棉(木綿・もめん綿)という説とあるが、これは真綿の方であろう。真綿説を唱えるのは、当時木綿は未だ筑紫でも栽培せられていなかったし、題詞の「緜」という文字は唐でも真綿の事であり、また、続日本紀に「神護景雲三年三月乙未、始毎年、運二太宰府綿二十万屯一、以輸二京庫一」とあるので、九州が綿の産地であったことが分かるが、その綿が真綿だというのは、三代実録、元慶八年の条に、「五月庚申朔、太宰府年貢綿十万屯、

其内二万屯、以レ絹相転進レ之」とあるによって明かである。以レ絹相転進レ之は、在庫の絹を以て代らした意である。また支那でも印度から木綿の入ったのは宋の末だというし、我国では延暦十八年に崑崙人(印度人)が三河に漂着したが、其舟に木綿の種があったのを栽培したのが初だといわれている。また、木綿説を唱える人は、神護景雲三年の続日本紀の記事は木綿で、恐らく支那との貿易によったもので、支那との貿易はそれ以前から行われていただろうというのである。それに対して山田博士云、「遣唐使の派遣が大命を奉じて死生を賭して数年を費して往復するに、綿のみにても毎年二十万屯づつを輸入せりとすべきか」(講義)と云った。

一首の意は、〔白縫〕(枕詞)筑紫の真綿は名産とはきいていたが、今見るとなるほど上品だ。未だ着ないうちから暖かそうだ、というので、「筑紫の綿は」とことわったのは、筑紫は綿の名産地で、作者の眼にも珍らしかったからに相違ない。何十万屯(六両を一屯とす)という真白な真綿を見て、「暖けく見ゆ」というのは極めて自然でもあり、歌としては珍らしく且つなかなか佳い歌である。

そういう珍重と親愛とがあるために、おのずから覚官的語気が伴うと見え、女体と関聯する寓意があろうという説もある。例えば、「満誓、女など見られてたはぶれに詠れたるにて、かの綿を積かさねなどしたるが、暖げに見ゆるを女によそへられたるなるべし」(攷證)というたぐいである。この寓意説は駄目だが、それだけこの歌が肉体的なものを持っている証拠ともなり、

却ってこの歌を浅薄な観念歌にしてしまわなかった由縁とも考え得るのである。即ち作歌動機は寓目即事でも、出来上った歌はもっと暗指的な象徴的なものになっている。結句、旧訓アタタカニミユであったのを、宣長はアタタケクミユと訓んだ。なおこの歌につき、契沖は、「綿ヲ多ク積置ケルヲ見テ綿ノ功用ヲホムルナリ」(代匠記精撰本)「綿の見るより暖げなりといふに心を得ば、慈悲ある人には慈悲の相あらはれ、憍慢の人には憍慢の相あらはれ、よろづにかゝるべきことはりなれば、いましめとなりぬべき哥にや」(代匠記初稿本)と云ったが、真淵は、「さまでの意はあるべからず、打見たるままに心得べし」(考)と云った。

○

憶良等は今は罷らむ子哭くらむその彼の母も
吾を待つらむぞ　〔巻三・三三七〕　山上憶良

山上憶良臣宴を罷る歌一首という題がある。憶良は、大宝元年遣唐使に従い少録として渡海、慶雲元年帰朝、霊亀二年伯耆守、神亀三年頃筑前守、天平五年の沈痾自哀文(巻五・八九七)には年七十四と書いてある。この歌は多分筑前守時代の作で、そして、この前後に、大伴旅人、沙弥満誓、防人司佑大伴四綱の歌等があるから、太宰府に於ける宴会の時の歌であろう。

一首の意味は、この憶良はもう退出しよう。うちには子どもも泣いていようし、その彼等の

母(即ち憶良の妻)も待っていようぞ、というのである。「其彼母毛」は、ソノカノハハモと訓み、「その彼の(子供の)母も」という意味になる。

憶良は万葉集の大家であるが、飛鳥朝、藤原朝あたりの歌人のものに親しんで来た眼には、急に変ったものに接するように感ぜられる。即ち、一首の声調が如何にもごつごつしていて、「もののふの八十うぢがはの網代木に」というような伸々した調子には行かない。一首の中に、三つも「らむ」を使って居りながら、訥々としていて流動の響に乏しい。「わが背子は何処ゆくらむ沖つ藻の名張の山をけふか越ゆらむ」(巻一・四三)という「らむ」の使いざまとも違うし、結句に、「吾を待つらむぞ」と云っても、人麿の「妹見つらむか」とも違うのである。そういう風でありながら、何処かに実質的なところがあり、軽薄平俗になってしまわないのが其特色である。またそういう滑かでない歌調が、当時の人にも却って新しく響いたのかも知れない。憶良は、大正昭和の歌壇に生活の歌というものが唱えられた時、いち早くその代表的歌人のごとくに取扱われたが、そのとおり憶良の歌には人間的な中味があって、憶良の価値を重からしめて居る。

諧謔微笑のうちにあらわるる実生活的直接性のある此歌だけを見てもその特色がよく分かるのである。この一首は憶良の短歌ではやはり傑作と謂うべきであろう。憶良は歌を好み勉強もしたことは類聚歌林を編んだのを見ても分かる。併し大体として、日本語の古来の声調に熟

し得なかったのは、漢学素養のために乱されたのかも知れない。巻一(六三)の、「いざ子どもはやく大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ」という歌は有名だけれども、調べが何処か弱くて物足りない。これは寧ろ、黒人の、「いざ児ども大和へ早く白菅の真野の榛原手折りて行かむ」(巻三・二八〇)の方が優っているのではなかろうか。そういう具合であるが、憶良にはまた憶良的なものがあるから、後出の歌に就いて一言費す筈である。

大伴家持の歌に、「春花のうつろふまでに相見ねば月日数みつつ妹待つらむぞ」(巻十七・三九八二)というのがある。此は天平十九年三月、恋緒を述ぶる歌という長短歌の中の一首であるが、結句の「妹待つらむぞ」はこの憶良の歌の模倣である。なお「ぬばたまの夜渡る月を幾夜経と数みつつ妹は我待つらむぞ」(巻十八・四〇七二)、「居りあかし今宵は飲まむほととぎす明けむあしたは鳴きわたらむぞ」(同・四〇六八)というのがあり、共に家持の作であるのは吾等の注意していい点である。

○

験なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし　(巻三・三三八)　大伴旅人

太宰帥大伴旅人の、「酒を讃むる歌」というのが十三首あり、此がその最初のものである。

「思はずは」は、「思はずして」ぐらいの意にとればよく、従来は、「思はむよりは寧ろ」と宣長流に解したが、つまりはそこに落着くにしても、「は」を詠歎の助詞として取扱うようになった（橋本博士）。

一首の意は、甲斐ない事をくよくよ思うことをせずに、一坏の濁酒を飲むべきだ、というのである。つまらぬ事にくよくよせずに、一坏の濁醪でも飲め、というのが今の言葉なら、旅人のこの一首はその頃の談話言葉と看做してよかろう。即ち、そういう対人間的、会話的親しみが出ているのでこの歌が活躍している。独り歌った如くであって相手を予想する親しみがある。その直接性があるために、私等は十三首の第一にこの歌を置くが、旅人の作った最初の歌がやはりこれでなかっただろうか。

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ　（巻三・三三九）

古の七の賢しき人等も欲りせしものは酒にしあるらし　（同・三四〇）

賢しみと物言ふよりは酒飲みて酔哭するし益りたるらし　（同・三四一）

言はむすべせむすべ知らに（知らず）極まりて貴きものは酒にしあるらし（同・三四二）

なかなかに人とあらずは酒壺に成りてしかも酒に染みなむ　（同・三四三）

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る（よく見ば猿にかも似む）（同・三四四）

価無き宝といふとも一坏の濁れる酒に豈まさらめや　（同・三四五）

夜光る玉といふとも酒飲みて情を遣るに豈如かめやも　（同・三四六）

世の中の遊びの道に冷しきは酔哭するにありぬべからし　（同・三四七）

この代にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にも吾はなりなむ　（同・三四八）

生者遂にも死ぬるものにあれば今世なる間は楽しくをあらな　（同・三四九）

黙然居りて賢しらするは酒飲みて酔泣するになほ如かずけり　（同・三五〇）

残りの十二首は即ち右の如くである。一種の思想ともいうべき感懐を詠じているが、如何に旅人はその表現に自在な力量を持っているかが分かる。その内容は支那的であるが、相当に複雑なものを一首一首に応じて毫も苦渋なく、ずばりずばりと表わしている。その支那文学の影響については先覚の諸注釈書に譲るけれども、顧れば此等の歌も、当時にあっては、今の流行語でいえば最も尖端的なものであっただろうか。けれども今の自分等の考から行けば、稍遊離した態度と謂うべく、思想的抒情詩のむつかしいのはこれ等大家の作を見ても分かるのである。今、選抜の歌に限あるため、一首のみを取って全体を代表せしめることとした。

○

武庫の浦を榜ぎ回む小舟粟島を背向に見つつ

ともしき小舟　（巻三・三五八）　山部赤人

山部赤人の歌六首中の一首である。「武庫の浦」は、武庫川の河口から西で、今の神戸あたり迄一帯をいった。「粟島」は巻九(一七一)に、「粟の小島し見れど飽かぬかも」とある、「粟の小島」と同じ場処であろうが、現在何処に当るか不明である。淡路の北端あたりだろうという説がある。一首の意は、武庫の浦を榜ぎめぐり居る小舟よ。粟島を横斜に見つつ榜ぎ行く、羨しい小舟よ、というので、「小舟」を繰返していても、あらあらしくないすっきりした感じを与えている。あとの五首も大体そういう特色のものだから、此一首を以て代表せしめた。

縄の浦ゆ背向に見ゆる奥つ島榜ぎ回む舟は釣し(釣を)すらしも　(巻三・三五七)

阿倍の島鵜の住む磯に寄する浪間なくこのごろ大和し念ほゆ　(同・三五九)

○

吉野なる夏実の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして　〔巻三・三七五〕　湯原王

湯原王が吉野で作られた御歌である。湯原王の事は審でないが、志貴皇子の第二子で光仁天皇の御兄弟であろう。日本後紀に、「延暦廿四年十一月(中略)壱志濃王薨、田原天皇之孫、湯原親王之第二子」云々とある。「夏実」は吉野川の一部で、宮滝の上流約十町にある。今菜摘*と称している。(土屋氏に新説ある。)

一首の意は、吉野にある夏実の川淵に鴨が鳴いている。山のかげの静かなところだ、というので、これは現に鴨の泳いでいるのを見て作ったものであろう。結句の、「山かげにして」は、鴨の泳いでいる夏実の淀淵の説明だが、結果から云えば一首に響く大切な句で、作者の感慨が此処にこもり、意味は場処の説明でも、一首全体の声調からいえばもはや単なる説明ではなくなっている。こういう結句の効果については、前出の人麿の歌(巻三・二五四)の処でも説明した。此歌は従来叙景歌の極致として取扱われたが、いかにもそういうところがある。ただ佳作と評価する結論のうちに、抒情詩としての声調という点を抜きにしてはならぬのである。また此歌の有名になったのは、一面に万葉調の歌の中では分かり好いためだということもある。一首の中に、「なる」の音が二つもあり、加行の音の多いのなども分析すれば分析し得るところである。

○

軽の池の浦回行きめぐる鴨すらに玉藻のうへに独り宿なくに　〔巻三・三九〇〕　紀皇女

紀皇女の御歌で、皇女は天武天皇皇女で、穂積皇子の御妹にあられる。一首の意は、軽の池の岸のところを泳ぎ廻っているあの鴨でも、玉藻の上にただ一つで寝るということがないのに、私はただ一人で寝なければならぬ、というのである。万葉では、譬喩歌というのに分類してい

るが、内容は恋歌で、鴨に寄せたのだといえばそうでもあろうが、もっと直接で、どなたかに差し上げた御歌のようである。単に内容からいえば、読人知らずの民謡的な歌にこういうのは幾らもあるが、この歌のよいのは、そういう一般的でない皇女に即した哀調が読者に伝わって来るためである。土屋文明氏の万葉集年表に、巻十二(三〇九八)に関する言い伝を参照し、恋人の高安王が伊豫に左遷せられた時の歌だろうかと考えている。

○

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆと
ふものを　〔巻三・三九六〕　笠女郎

笠女郎(伝不詳)が大伴家持に贈った三首の一つである。「真野」は、今の磐城相馬郡真野村*あたりの原野であろう。一首の意は、陸奥の真野の草原はあんなに遠くとも面影に見えて来るというではありませぬか、それにあなたはちっとも御見えになりませぬ、というのであるが、なお一説には「陸奥の真野の草原」までは「遠く」に続く序詞で、こうしてあなたに遠く離れておりましても、あなたが眼前に浮んでまいります。私の心持がお分かりになるでしょう、と強めたので、「見ゆとふものを」は、「見えるというものを」で、人が一般にいうような云い方をして確めるので、この云い方のことは既に云ったごとく、「見ゆというものなるを」、「見ゆるものなるを」というに落着くのである。女郎が未だ若い家持に慇懃なる気持で甘えているところがある。万葉末期の細みを帯びた調子だが、そういう中にあっての佳作であろうか。また序詞などを使って幾分民謡的な技法でもあるが、これも前の紀皇女の御歌と同じく、女郎に即したものとして味うと特色が出て来るのである。

○

百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲
隠りなむ　〔巻三・四一六〕　大津皇子

題詞には、大津皇子被レ死之時、磐余池般流レ涕御作歌一首とある。即ち、大津皇子の謀反が露われ、朱鳥元年十月三日訳語田舎で死を賜わった。その時詠まれた御歌である。持統紀に、庚午賜二死皇子大津於訳語田舎一、時年二十四。妃皇女山辺被レ髪徒跣奔赴殉焉。見者皆歔欷とある。磐余の池は今は無いが、磯城郡安倍村大字池内*のあたりだろうと云われている。「百伝ふ」は枕詞で、百へ至るという意で五十に懸け磐余に懸けた。

一首の意は、磐余の池に鳴いている鴨を見るのも今日限りで、私は死ぬのであるか、というので、「雲隠る」は、「雲がくります」(巻三・四四一)、「雲隠りにき」(巻三・四六一)などの如く、死んで行くことである。また皇子はこのとき、「金鳥臨二西舎一、鼓声催二短命一、泉路無二賓主一、此夕

離レ家向」という五言臨終一絶を作り、懐風藻に載った。皇子は夙くから文筆を愛し、「詩賦の興は大津より始まる」と云われたほどであった。

この歌は、臨終にして、鴨のことをいい、それに向って、「今日のみ見てや」と歎息しているのであるが、斯く池の鴨のことを具体的に云ったために却って結句の「雲隠りなむ」が利いて来て、「今日のみ見てや」の主観句に無限の悲響が籠ったのである。池の鴨はその年も以前の年の冬にも日頃見給うたのであっただろうが、死に臨んでそれに全性命を托された御語気は、後代の吾等の驚嘆せねばならぬところである。有間皇子は、「ま幸くあらば」といい、大津皇子は、「今日のみ見てや」といった。大津皇子の方が、人麿などと同じ時代なので、主観句に沁むものが出来て来ている。これは歌風の時代的変化である。契沖は代匠記で、「歌ト云ヒ詩ト云ヒ声ヲ呑テ涙ヲ掩フニ逞ナシ」と評したが、歌は有間皇子の御歌等と共に、万葉集中の傑作の一つである。また妃山辺皇女殉死の史実を随伴した一悲歌として永久に遺されている。因に云うに、山辺皇女は天智天皇の皇女、御母は蘇我赤兄の女である。赤兄大臣は有間皇子が、「天与二赤兄一知」と答えられた、その赤兄である。

○

豊国の鏡の山の石戸立て隠りにけらし待てど
来まさぬ　〔巻三・四一八〕　　手持女王

石戸破る手力もがも手弱き女にしあれば術の
知らなく　〔巻三・四一九〕　　同

河内王を豊前国鏡山（田川郡香春町附近勾金村字鏡山）*に葬った時、手持女王の詠まれた三首中の二首である。河内王は持統三年に太宰帥となった方で、持統天皇八年四月五日賻物を賜った記事が見えるから、その頃卒せられたものと推定せられる（土屋氏）。手持女王の伝は不明である。「石戸」は石棺を安置する石槨の入口を、石を以て塞ぐので石戸というのである。これ等の歌も追悼するのに葬った御墓のことを云っている。第一の歌では、「待てど来まさぬ」の句に中心感情があり、同じ句は万葉に幾つかあるけれども、この句はやはりこの歌に専属のものだという気味がするのである。第二の歌の、「石戸わる手力もがも」は、その時の心その儘であろう。二つとも女性としての云い方、その語気が自然に出ていて挽歌としての一特色をなしている。共に悲しみの深い歌で、第二の歌の誇張らしいのも、女性の心さながらのものだからで

あろう。

○

八雲さす出雲の子等が黒髪は吉野の川の奥に
なづさふ　〔巻三・四三〇〕　柿本人麿

出雲娘子が吉野川で溺死した。それを吉野で火葬に附した時、柿本人麿の歌った歌二首の一つで、もう一つのは、「山の際ゆ出雲の児等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く」(巻三・四二九)というので、当時大和では未だ珍しかった火葬の烟の事を歌っている。この歌の、「八雲さす」は「出雲」へかかる枕詞。「子等」の「等」は複数を示すのでなく、親しみを出すために附けた。生前美しかった娘子の黒髪が吉野川の深い水に漬ってただよう趣で、人麿がそれを見たか人言に聞きかしたものであろう。いずれにしてもその事柄を中心として一首を纏めている。そして人麿はどんな対象に逢着しても熱心に真心を籠めて作歌し、自分のために作っても依頼されて作っても、そういうことは殆ど一如にして実行した如くである。

○

われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名
が奥津城処　〔巻三・四三二〕　山部赤人

山部赤人が下総葛飾の真間娘子の墓を見て詠んだ長歌の反歌である。手児名は処女の義だといわれている。「手児」(巻十四・三三九八・三四八五)の如く、親の手児という意で、それに親しみの「な」の添わったものと云われている。真間に美しい処女がいて、多くの男から求婚されたため、入水した伝説をいうのである。伝説地に来ったという旅情のみでなく、評判の伝説娘子に赤人が深い同情を持って詠んでいる。併し徒らに激しい感動語を以てせずに、淡々といい放って赤人一流の感懐を表現し了せている。それが次にある、「葛飾の真間の入江にうち靡く玉藻苅りけむ手児名しおもほゆ」(巻三・四三三)の如きになると、余り淡々とし過ぎているが、「われも見つ人にも告げむ」という簡潔な表現になると赤人の真価があらわれて来る。後になって家持が、「万代の語ひ草と、未だ見ぬ人にも告げむ」(巻十七・四〇〇〇)云々と云って、この句を学んで居る。赤人は富士山をも詠んだこと既に云った如くだから、赤人は東国まで旅したことが分かる。

○

吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど
見し人ぞ亡き　〔巻三・四四六〕　大伴旅人

太宰帥大伴旅人が、天平二年冬十二月、大納言になったので帰京途上、備後鞆の浦を過ぎて詠んだ三首中の一首である。「室の木」は松杉科の常緑喬木、杜松(椙)であろう。当時鞆の浦には椙の大樹があって人目を引いたものと見える。一首の意は、太宰府に赴任する時には、妻も一しょに見た鞆の浦の室の木は、今も少しも変りはないが、このたび帰京しようとして此処を通る時には妻はもう此世にいない、というので、「吾妹子」と、「見し人」とは同一人である。「人」は後に、「根はふ室の木見し人」、「人も無き空しき家」といってある如く、妻・吾妹子の意味に「人」を用いている。旅人の歌は明快で、顫動が足りないともおもうが、「見し人ぞ亡き」に詠歎が籠っていて感深い歌である。

○

妹と来し敏馬の埼を還るさに独して見れば涙
ぐましも　〔巻三・四四九〕　大伴旅人

前の歌と同様、旅人が帰京途上、摂津の敏馬海岸を過ぎて詠んだものである。「涙ぐましも」という句は、万葉には此一首のみであるが、古事記(日本紀)仁徳巻に、「やましろの筒城の宮にもの申すあが背の君は(吾兄を見れば)泪ぐましも」の一首がある。この句は、この時代に出来た句だから、大体の調和は古代語にある。そこで、近頃、散文なり普通会話なりに多く用いる、「涙ぐましい」という語は不調和である。

この歌は、余り苦心して作っていないようだが、声調にこまかいゆらぎがあって、奥から滲出で来る悲哀はそれに本づいている。旅人の歌は、あまり早く走り過ぎる欠点があったが、この歌にはそれが割合に少く、そういう点でもこの歌は旅人作中の佳作ということが出来るであろう。旅人は、讃酒歌のような思想的な歌をも自在に作るが、こういう沁々としたものをも作る力量を持っていた。なおこの時、「往くさには二人吾が見しこの埼をひとり過ぐれば心悲しも」(巻三・四五〇)という歌をも作った。やはり哀深い歌である。

○

妹として二人作りし吾が山斎は木高く繁くな
りにけるかも　〔巻三・四五二〕　大伴旅人

旅人が家に帰って来て、妻のいない家を寂しみ、太宰府で亡くした妻を悲しむ歌で、このほ

かに、「人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり」(巻三・四五一)、「吾妹子がうゑし梅の木見る毎に心むせつつ涕し流る」(同・四五三)の二首を作っているが、共にあわれ深い。

此一首の意は、亡くなった妻と一しょになって、二人で作った庭は、こんなにも木が大きくなり、繁茂するようになったというので、単純明快のうちに尽きぬ感慨がこもっている。結句の、「なりにけるかも」というのは、「秋萩の枝もとををに露霜おき寒くも時はなりにけるかも」(巻十・二一七〇)、「竹敷のうへかた山は紅の八入の色になりにけるかも」(巻十五・三七〇三)、「石ばしる垂水のうへのさ蕨の萌えいづる春になりにけるかも」(巻八・一四一八)等の如くに成功している。同じく旅人が、「昔見し象の小河を今見ればいよいよ清けくなりにけるかも」(巻三・三一六)という歌を作っていて効果をおさめているのは、旅人の歌調が概ね直線的で太いからでもあろうか。

○

あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるごと
き吾が大きみかも　(巻三・四七七)　大伴家持

天平十六年二月、安積皇子(聖武天皇皇子)薨じた時(御年十七)、内舎人であった大伴家持の作ったものである。此時家持は長短歌六首作って居る。一首の意は、満山の光るまでに咲き盛

っていた花が一時に散ったごとく、皇子は逝きたもうた、というのである。家持の内舎人になったのは天平十二年頃らしく、此作は家持の初期のものに属するであろうが、こころ謹しみ、骨折って作っているのでなかなか立派な歌である。家持は、父の旅人があのような歌人であり、夙くから人麿・赤人・憶良等の作を集めて勉強したのだから、此等六首を作る頃には、既に大家の風格を具えているのである。

○

山の端に味鳧群騒ぎ行くなれど吾はさぶしゑ
君にしあらねば　〔巻四・四八六〕　舒明天皇

岳本天皇御製一首並短歌とある、その短歌である。岳本天皇は即ち舒明天皇を申奉るのであるが、御製歌には女性らしいところがあるので、左注には後岳本天皇即ち斉明天皇の御製ではなかろうかと疑問を附している。それだから此疑問は随分古いものだということが分かるが、その精しい考証は現在の私には不可能である。攷證では、「この御製は、女をおぼしめして詠せ給ふにて」と明かにしている。

一首の意は、山の端をば味鴨が群れ鳴いて、騒ぎ飛行くように、多くの人が通り行くけれども、私は寂しゅうございます、その人々はあなたではありませぬから、というので、やはり女性の歌として解釈するのである。そんなら作者は後岳本天皇即ち斉明天皇にましますかというに、それも私にはよく分からぬ。ただ岳本天皇御製とあるのだから、天皇がこういう恋愛情調をたたえた民謡風な抒情詩を御作りになったと解釈申上げてもよく、或は岳本天皇時代のこの抒情

詩が、天皇御製歌として伝誦せられ来ったとも解釈することが出来るのである。いずれにしても歌は女性の口吻であること既に前賢が注意したごとくである。次に、この歌の、「あぢ群さわぎ行くなれど」の句をば、実際あじ鴨の群が飛んでゆくのを御覧になったのか、それとも譬喩で、あじ鴨が騒いで飛行くように人が群れ騒ぎ行くというのか、先輩の解釈にも二とおりある。けれども私は「山の端にあぢ群さわぎ」は、「行く」に続く意味のある序詞だと解した。そして誰が「行く」のかといえば、「人」が行くのであって、これは長歌の方で、「人さはに国には満ちて、あぢ群の去来は行けど、吾が恋ふる君にしあらねば」とあるのに拠っても分かる。即ち、あじ群の騒ぎ行くように人等が行くけれどもと解釈したのであって、その方が寧ろ古調だとおもうのである。

私はこの御製を、素朴な抒情詩の優れたものとして選んだ。特に、「あぢむら騒ぎ」という句に心を牽かれたのであった。こういう実景を見つつ、その写象によって序詞を作ったのを感心したためであった。もっとも、此用法は、「奥べには鴨妻喚ばひ、辺つべに味むら騒ぎ」(巻三・二五七)、「なぎさには味むら騒ぎ」(巻十七・三九九一)の如く実際味むらの居る処として表わしたものもあり、「あぢむらの騒ぎ競ひて浜に出でて」(巻二十・四三六〇)のごとく、実際あじ群の居るのでなく、枕詞に使った処もあるが、いずれにしても古風な気持の好い用い方である。ことに、短歌の方で、単に「行くなれど」と云って、長歌の方の、「人さはに」という主格をも含め

た用法にも感心したのであった。この歌に比べると、「秋萩を散り過ぎぬべみ手折り持ち見れども不楽し君にしあらねば」(巻十・二二九〇)、「み冬つぎ春は来れど梅の花君にしあらねば折る人もなし」(巻十七・三九〇一)などは、調子が弱くなって、もはや弛んでいる。また、「うち日さす宮道を人は満ちゆけど吾が念ふ公はただ一人のみ」(巻十一・二三八二)という類似の歌もあるが、この方はもっと分かりよい。

この次に、「淡海路の鳥籠の山なるいさや川日の此頃は恋ひつつもあらむ」(巻四・四八七)という歌があり、上半は序詞だが、やはり古調で佳い歌である。そしてこの方は男性の歌のような語気だから、或はこれが御製で、「山の端に」の歌は天皇にさしあげた女性の歌ででもあろうか。

以上、「あぢむら騒ぎ」までを序詞として解釈したが、「夏麻引く海上潟の沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず」(巻七・一一七六)、「吾が門の榎の実もり喫む百千鳥千鳥は来れど君ぞ来まさぬ」(巻十六・三八七二)というのがあって、これは実際鳥の群集する趣だから、これを標準とせば、「あぢむら騒ぎ」も実景としてもいいかも知れぬが、この巻七の歌も巻十六の歌もよく味うと、やはり海鳥を写象として、その聯想によって「すだけど」、或は「来れど」と云っているのだということが分かり、属目光景では無いのである。

この御製を、女性らしい御語気だと云ったが、代匠記では男の歌とし、毛詩鄭風の、出二其東門一、有レ女如レ雲、雖二則如レ雲、匪二我思存一を引いている。即ち「君」を女と解している。攷證

でも、「この御製は、女をおぼしめして詠せ給ふにて」、「吾は君とは違ひて、誘ふ人もあらざれば、いとさびしとのたまふにて、君は定めて誘ふ人もあまたありぬべしとの御心を、味村の飛ゆくさまをみそなはして、つゞけ給へる也」と云っている。どちらが本当か、後賢の判断を俟っている。

○

君待つと吾が恋ひ居れば吾が屋戸の簾うごかし秋の風吹く　〔巻四・四八八〕　額田王

額田王が近江天皇(天智天皇)をお慕いもうして詠まれたものである。王ははじめ大海人皇子(天武天皇)の許に行かれて十市皇女を生み、のち天智天皇に寵せられたことは既に云ったが、これは近江に行ってから詠まれたものであろう。

一首の意は、あなたをお待申して、慕わしく居りますと、私の家の簾を動かして秋の風がおとずれてまいります、というのである。

この歌は、当りまえのことを淡々といっているようであるが、こまやかな情味の籠った不思議な歌である。額田王は才気もすぐれていたが情感の豊かな女性であっただろう。そこで知らず識らずこういう歌が出来るので、この歌の如きは王の歌の中にあっても才鋒が目立たずして

特に優れたものの一つである。この歌でただ、「簾動かし秋の風吹く」とだけ云ってあるが、女性としての音声さえ聞こえ来るように感ぜられるのは、ただ私の気のせいばかりでなく、つまり、結句の「秋の風ふく」の中に、既に女性らしい愬えを聞くことが出来るといい得るのである。また、風の吹いて来るのは恋人の来る前兆だという一種の信仰のようなものがあったと説く説(古義)もあるがどういうものであるか私には能く分からない。ただそうすれば却って歌柄が小さくなってしまうようだから、此処は素直に文字どおりにただ天皇をお慕い申す恋歌として受取った方が好いようである。

この歌の次に、鏡王女の作った、「風をだに恋ふるはともし風をだに来むとし待たば何か歎かむ」(巻四・四八九)という歌が載っている。王女は額田王の御姉に当る人で、はじめ天智天皇に寵せられ、のち藤原鎌足の正室になった人だから、恐らく此時近江の京に住んでいたのであろう。そして、額田王の此歌を聞いて、額田王にやったものであろう。この歌にも広い意味の贈答歌の味いがあり、姉妹のあいだの情味がこもっている。併し万葉集には、妹に和えた歌とは云っていない。

○

今更に何をか念はむうちなびきこころは君に寄りにしものを　〔巻四・五〇五〕　安倍女郎

安倍女郎(伝不詳)の作った二首中の一つである。女性の声の直接伝わり来るような特色ある歌として選んだが、そうして見ると、素直でなかなか佳いところがある。前に既に「君に寄りななこちたかりとも」(巻二・一一四)の歌を引いたが、この歌はもっと分かり易くなって来て居る。

なお、この歌の次に「吾背子は物な念ほし事しあらば火にも水にも吾無けなくに」(巻四・五〇六)という歌があって、やはり同一作者だが、女性の情熱を云っている。併しこれも女性の語気として受取る方がよく、此時代になると、感情も一般化して分かりよくなっている。寧ろ、「事しあらば小泊瀬山の石城にも籠らば共にな思ひ吾が背」(巻十六・三八〇六)の方が、古い味いがあるように思える。巻十六の歌は後に選んで置いた。

○

大原のこの市柴の何時しかと吾が念ふ妹に今夜逢へるかも　〔巻四・五一三〕　志貴皇子

志貴皇子の御歌で「市柴」は巻八(一六四三)に「この五柴に」とあるのと同じく、繁った柴のことだといわれている。「いつしかと」に続けた序詞だが、実際から来ている序詞である。「大原」は高市郡小原の地なることは既に云った。この歌で心を牽いたのは、「今夜逢へるかも」という句にあったのだが、この句は、巻十(二〇四九)に、「天漢川門にをりて年月を恋ひ来し君に今夜逢へるかも」というのがある。

なお、この巻(五二四)に、「蒸ぶすまなごやが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも」という藤原麻呂の歌もあり、覚官的のものだが、皇子の御歌の方が感深いようである。此等の歌は取立てて秀歌という程のものでは無いが、ついでを以て味うの便となした。

○

庭に立つ麻手刈り干ししき慕ぶ東女を忘れたまふな　〔巻四・五二一〕　常陸娘子

藤原宇合(藤原不比等第三子)が常陸守になって任地に数年いたが、任果てて京に帰る時、(養老七年頃か)常陸娘子が贈った歌である。娘子は遊行女婦のたぐいであろう。「庭に立つ」は、庭に植えたという意。「麻手」は麻のことで、巻十四(三四五四)に、「庭に殖つ麻布小ぶすま」の例がある。類聚古集に拠って「手」は「乎」だとすると分かりよいことは分かりよい。「刈り干し」までは、「しきしぬぶ」の序のようだが、これは意味の通ずる序だから、序詞をも意味の中に取入れていい。地方にいる遊行女婦が、こうして官人を持成し優遇し、別れるにのぞんでは纏綿たる情味を与えたものであろう。そして農家のおとめのような風にして詠んでいるが、軽い諧謔もあって、女らしい親しみのある歌である。「東女」と自ら云うたのも棄てがたい。

巻十四(三四五七)に、「うち日さす宮の吾背は大和女の膝枕くごとに吾を忘らすな」というのがある。これは古代の東歌というよりも、京師から来た官人の帰還する時に詠んだ趣のものでこの歌に似ている。遊行女婦あたりの口吻だから、東歌の中にはこういう種類のものも交っていることが分かる。

○

ここにありて筑紫やいづく白雲の棚引く山の方にしあるらし　〔巻四・五七四〕　大伴旅人

大伴旅人が大納言になって帰京した。太宰府に残って、観世音寺造営に従っていた沙弥満誓から「真十鏡見飽かぬ君に後れてや旦夕にさびつつ居らむ」(巻四・五七二)等の歌を贈った。それに和えた歌である。旅人の歌調は太く、余り剽軽に物をいえなかったところがあった。讃酒歌でも、「猿にかも似る」といっても、人を笑わせないところがある。旅人の歌調は、顫が少いが、家持の歌調よりも太い。

○

君に恋ひいたも術なみ平山の小松が下に立ち
嘆くかも　〔巻四・五九三〕　笠女郎

笠女郎が大伴家持に贈った廿四首の中の一つである。平山は奈良の北にある那羅山で、其処に松が多かったことは、「平山の小松が末の」(巻十一・二四八七)等の歌によっても分かる。これは家持に向って愬えているので、分かりよい、調子のなだらかな歌である。この歌の次に、「わが屋戸の夕影草の白露の消ぬがにもとな念ほゆるかも」(巻四・五九四)というのもあり、極めて流暢に歌いあげている。相当の才女であるが、この時代になると、歌としての修練が既に必要になって来ているから、藤原朝あたりのものとも違って、もっと文学的にならんとしつつあるのである。併し此等の歌でも如何に快いものであるか、後代の歌に較べて、いまだ万葉の実質の

残っていることをおもわねばならない。

○

相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後にぬかづく如し　〔巻四・六〇八〕　笠女郎

笠女郎が家持に贈ったものである。当時の大寺には種々の餓鬼が画図として画かれ、或は木像などとして据えてあったものであろうか。あなたのように幾ら思っても甲斐ない方は、伽藍の中に居る餓鬼像を後ろから拝むようなものではありませんか、というので、才気のまさった諧謔の歌である。仏教の盛な時代であるから、才気の豊かな女等はこのくらいの事は常に云ったかも知れぬが、後代の吾等にはやはり諧謔的に心の働いた面白いものである。そしてこの歌でよいのは女の語気を直接に聞き得るごとくに感じ得る点にある。

○

沖へ行き辺に行き今や妹がため わが漁れる藻
臥束鮒　〔巻四・六二五〕　高安王

高安王が鮒の土産を娘子に呉れたときの歌である。高安王は天平十四年正四位下で卒した

人で、十一年大原真人の姓を賜わっている。一首の意味は、この鮒は、深いところから岸の浅いところ方々歩いて、つかまえた藻の中にいた大鮒だが、おまえに持って来た、というぐらいの意で、「藻臥」は藻の中に住む、藻の中に潜むの意。「束鮒」は一束、即ち一握り(二寸程)ぐらいの長さをいう。この結句の造語がおもしろいので選んで置いた。巻十四(三四九七)の、「河上の根白高萱」などと同じ造語法である。

○

月読の光に来ませあしひきの山を隔てて遠からなくに　〔巻四・六七〇〕　湯原王

湯原王の歌だが、娘子が湯原王に贈った歌だとする説(古義)のあるのは、この歌に女性らしいところがあるためであろう。併しこれはもっと楽に解して、女にむかってやさしく云ってやったともいうことが出来るだろう。また程近い処であるから女に促してやったということも云い得るのである。和うる歌に、「月読の光は清く照らせどまどへる心堪へず念ほゆ」(巻四・六七一)とあるのは、女の語気としてかまわぬであろう。

○

夕闇は路たづたづし月待ちて行かせ吾背子その間にも見む　〔巻四・七〇九〕　大宅女

前国の娘子大宅女の歌である。この娘子の歌は今一首万葉(巻六・九八四)にある。「道たづたづしなど」は、不安心だという意になる。「その間にも見む」は、甘くて女らしい句である。此頃に読むと、感情のあらわし方も細く、姿態も濃やかになっていたものであろう。良寛の歌に「月待ちて光を待ちて帰りませ山路は栗のいがの多きに」とあるのは、此辺の歌の影響だが、良寛は解で万葉を勉強し、むずかしくない、楽なものから入っていたものと見える。

○

ひさかたの雨の降る日をただ独り山辺に居れば鬱せかりけり　〔巻四・七六九〕　大伴家持

大伴家持が紀女郎に贈ったもので、家持はいまだ整わない新都の久邇京にいて、平城にいた紀女郎に贈ったものである。「今しらす久邇の京に妹に逢はず久しくなりぬ行きてはや見な」(巻四・六八八)というのもある。この歌は、もっと上代の歌のように、蒼古というわけには行かぬが、

歌調が伸々として極めて順直なものである。家持の歌の優れた一面を代表する一つであろうか。

巻第五

○

世の中は空しきものと知る時しいよよますます
す悲しかりけり　〔巻五・七九三〕　大伴旅人

大伴旅人は、太宰府に於て、妻大伴郎女を亡くした（神亀五年）。その時京師から弔問が来たのに報えた歌である。なおこの歌には、「禍故重畳し、凶問累に集る。永く崩心の悲みを懐き、独り断腸の泣を流す。但し両君の大助に依りて、傾命纔に継ぐ耳。筆言を尽さず、古今の歎く所なり」という詞書が附いている。傾命は老齢のこと。両君は審かでない。

一首の意は、世の中が皆空・無常のものだということを、現実に知ったので、今迄よりもますます悲しい、というのである。

「知る時し」は、知る時に、知った時にという事であるが、今迄は経文により、説教により、万事空寂無常のことは聞及んでいたが、今現に、自分の身に直接に、眼のあたりに、今の言葉なら、体験したという程のことを、「知る」と云ったのである。同じ用例には、「うつせみの世は常無しと知るものを」（巻三・四六五。家持）、「世の中を常無きものと今ぞ知る」（巻六・一〇四五。

不詳)、「世の中の常無きことは知るらむを」(巻十九・四二一六。家持)等がある。そこで「いよよますます」という語に続くのである。この歌には、仏教が入っているので、「空しきものと知る」というだけでも、当時にあっては、深い道理と情感を伴う語感を持っていただろう。一口にいえば思想的にも新しく且つ深かったものだろう。それが年月によって繰返されているうち、その新鮮の色があせつつ来たのであるが、旅人のこの歌頃までは、いまだ諳記してものを云っているようなところのないのを鑑賞者は見免してはならぬだろう。その証拠には、此処に引いた用例は皆旅人以後で、旅人の口吻の模倣といってよいのである。それから、結句の、「悲しかりけり」であるが、これは漢文なら、「独り断腸の泣を流す」というところを、日本語では、「悲しかりけり」というのである。これを以て、日本語の貧弱を云々してはならぬ。短詩形としての短歌の妙味もむずかしい点も此処に存するものだからである。大体以上の如くであるが、後代の吾等から見れば、此歌を以て満足だというわけには行かぬ。それはなぜかというに、思想的抒情詩はむずかしいもので、誰が作っても旅人程度を出で難いものだからである。併しそれを正面から実行した点につき、この方面の作歌に一つの基礎をなした点につき、旅人に満腔の尊敬を払うて茲に一首を選んだのであった。

旅人の妻、大伴郎女の死した時、旅人は、「愛しき人の纏きてし敷妙の吾が手枕を纏く人あらめや」(巻三・四三八)等三首を作っているが、皆この歌程大観的ではない。序にいうが、巻三(四

四二)に、膳部王を悲しんだ歌に、「世の中は空しきものとあらむとぞこの照る月は満闕しける」という作者不詳の歌がある。王の薨去は天平元年だから、やはり旅人の歌の方が早い。

○

悔しかも斯く知らませばあをによし国内こと
ごと見せましものを　(巻五・七九七)　山上憶良

大伴旅人の妻が死んだ時、山上憶良が、「日本挽歌」(長歌一首反歌五首)を作って、「神亀五年七月二十一日、筑前国守山上憶良上」として旅人に贈った。即ちこの長歌及び反歌は、旅人の心持になって、恰も自分の妻を悼むような心境になって、旅人の妻の死を悼んだものである。それだから、この「山上憶良上」云々という注が無ければ、無論憶良が自分の妻の死を悼んだものとして受取り得る性質のものである。因って鑑賞者は、この歌の作者は憶良でも、旅人の妻即ち大伴郎女の死を念中に持って味うことが必要なのである。

一首の意は、こうして妻に別れねばならぬのが分かっていたら、筑紫の国々を残るくまなく見物させてやるのであったのに、今となって残念でならぬ、というのである。

この歌の「知る」は前の歌の「知る」と稍違って、知れている、分かっている程の意である。次に、「あをによし」という語は普通、「奈良」に懸る枕詞であるのに、憶良は「国内」に続け

ている。そんなら、「国内」は大和・奈良あたりの意味かというに、そう取っては具合が悪い。やはり筑紫の国々と取らねばならぬところである。そこで種々説が出たのであるが、憶良は必ずしも伝統的な日本語を使わぬ事があるので、或は、「あをによし」の意味をただ山川の美しいというぐらいの意に取ったものと考えられる。（憶良は、「あをによし奈良の都に」（巻五・八〇八）とも使っている。）次に、この歌は、初句から、「くやしかも」と置いているのは、万葉集としては珍らしく、寧ろ新古今集時代の手法であるが、憶良は平然としてこういう手法を実行している。もっともこの手法は、「苦しくも降り来る雨か」などという主観句の短いものと看做せば説明のつかぬことはない。

この歌を味うと、内容に質実的なところがあるが、声調が訥々としていて、沁み透るものが尠いので、つまりは常識の発達したぐらいな感情として伝わって来る。併し声調が流暢過ぎぬため、却って軽佻でなく、質朴の感を起こさせるのである。家持の歌に、「かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを」（巻十七・三九五九）というのがある。これは弟の書持の死を悼んだものであるが、この憶良の歌から影響を受けているところを見ると、大伴家に伝わった此等の歌をも読味ったことが分かる。

この日本挽歌一首（長歌反歌）は、憶良が旅人の心になって、旅人の心に同感して、旅人の妻の死を哀悼したという説に従ったが、これは、憶良の妻の死を、憶良が直接悼んでいるのだと解

釈する説があり、岸本由豆流の万葉集攷證にも、「或人の説に、こは憶良の妻身まかりしにはあるべからず、こは大伴卿の心になりて、憶良の作られけるならんといへれど、さる証もなければとりがたし」と云っている程である。（なお、大柳直次氏の同説がある。）併し、歌の中の妻の死んだのも夏であり、その他の種々の関係が、旅人の妻の死を悼んだ歌として解釈する方が穏かのように思える。「筑前国守山上憶良上」をば、憶良自身の妻の死を悼んだ歌を旅人に示したものとして、「大伴卿も同じ思ひに歎かるゝころなれば、かの卿に見せられけるなるべし」（攷證）というのであるが、ただそれだけでは証拠不充分であるし、憶良の妻が筑紫で歿したという記録が無いのだから、これを以て直ぐ憶良の妻の死を悼んだのだと断定するわけにも行かぬのである。併し全体が、自分の妻を哀悼するような口吻であるから、茲に両説が対立することとなるのであるが、鑑賞者は、憶良が此歌を作っても、旅人の妻の死を旅人が歎いているという心持に仮りになって味えば面倒ではないのである。

○

妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに　（巻五・七九八）　山上憶良

前の歌の続で、憶良が旅人の心に同化して旅人の妻を悼んだものである。楝は即ち栴檀で、

初夏のころ薄紫の花が咲く。

一首の意は、妻の死を悲しんで、わが涙の未だ乾かぬうちに、妻が生前喜んで見た庭前の楝の花も散ることであろう、というので、逝く歳月の迅きを歎じ、亡妻をおもう情の切なことを懐うのである。

この楝の花は、太宰府の家にある楝であろう。そして、作者の憶良も太宰府にいて、旅人の心になって詠んだからこういう表現となるのである。この歌は、意味もとおり言葉も素直に運ばれて、調べも感動相応の重みを持っているが、飛鳥・藤原あたりの歌調に比して、切実の響を伝え得ないのはなぜであるか。恐らく憶良は伝統的な日本語の響に真に合体し得なかったのではあるまいか。後に発達した第三句切が既にここに実行せられているのを見ても分かるし、「朝日照る佐太の岡辺に群れゐつつ吾が哭く涙止む時もなし」(巻二・一七七)、「御立せし島を見るとき行潦ながるる涙止めぞかねつる」(巻二・一七八)ぐらいに行くのが寧ろ歌調としての本格であるのに、此歌は其処までも行っていない。この歌は、従来万葉集中の秀歌として評価せられたが、それは、分かり易い、無理のない、感情の自然を保つ、挽歌らしいというような点があるためで、実は此歌よりも優れた挽歌が幾つも前行しているのである。

天平十一年夏六月、大伴家持は亡妾を悲しんで、「妹が見し屋前に花咲き時は経ぬわが泣く涙いまだ干なくに」(巻三・四六九)という歌を作っている。これは明かに憶良の模倣であるから、家

持もまた憶良の此一首を尊敬していたということが分かるのである。恐らく家持は此歌のいいところを味い得たのであっただろう。(もっとも家持は此時人麿の歌をも多く模倣して居る。)

○

大野山霧たちわたる我が嘆く息嘯の風に霧たちわたる　(巻五・七九九)　山上憶良

此歌も前の続である。「大野山」は和名鈔に、「筑前国御笠郡大野」とある、その地の山で、太宰府に近い。「おきそ」は、宣長は、息嘯の略とし、神代紀に嘯之時迅風忽起とあるのを証とした。

一首の意は、今、大野山を見ると霧が立っている、これは妻を歎く自分の長大息の、風の如く強く長い息のために、さ霧となって立っているのだろう、というので、神代紀に、「吹きうつる気噴のさ霧に」、万葉に、「君がゆく海べの屋戸に霧たたば吾が立ち嘆く息と知りませ」(巻十五・三五八〇)、「わが故に妹歎くらし風早の浦の奥べに霧棚引けり」(同・三六一五)、「沖つ風いたく吹きせば我妹子が嘆きの霧に飽かましものを」(同・三六一六)等とあるのと同じ技法である。ただ万葉の此等の歌は憶良のこの歌よりも後であろうか。

此一首も、「霧たちわたる」を繰返したりして強く云っていて、線も太く、能働的であるが、

それでもやはり人麿の歌の声調ほどの顫動が無い。例えば前出の、「ともしびの明石大門に入らむ日や榜ぎわかれなむ家のあたり見ず」(巻三・二五四)あたりと比較すればその差別もよく分かるのであるが、憶良は真面目になって骨折っているので、一首は質実にして軽薄でないのである。なお、天平七年、大伴坂上郎女が尼理願を悲しんだ歌に、「嘆きつつ吾が泣く涙、有間山雲居棚引き、雨に零りきや」(巻三・四六〇)という句があり、同じような手法である。

○

ひさかたの天道は遠しなほなほに家に帰りて
業を為まさに　(巻五・八〇一)　山上憶良

山上憶良は、或る男が、両親妻子を軽んずるのをみて、その不心得を諭して、「惑情を反さしむる歌」というのを作った、その反歌がこの歌である。長歌の方は、「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し、世の中はかくぞ道理」、「地ならば大王います、この照らす日月の下は、天雲の向伏す極、谷蟆のさ渡る極、聞し食す国のまほらぞ」というのが、その主な内容で、現実社会のおろそかにしてはならぬことを云ったものである。

反歌の此一首は、おまえは青雲の志を抱いて、天へも昇るつもりだろうが、天への道は遼遠だ、それよりも、普通並に、素直に家に帰って、家業に従事しなさい、というのである。「なほ

なほに」は、「直直に」で、素直に、尋常に、普通並にの意、「延ふ葛の引かば依り来ね下なほなほに」(巻十四・三三六四或本歌)の例でも、素直にの意である。結句の、「業を為まさに」は、「業を為まさね」で、「ね」と「に」が相通い、当時から共に願望の意に使われるから、この句は、「業務に従事しなさい」という意となる。

この歌も、その声調が流動性でなく、寧ろ佶屈とも謂うべきものである。然るに内容が実生活の事に関しているのだから、声調おのずからそれに同化して憶良独特のものを成就したのである。事が娑婆世界の実事であり、いま説いていることが儒教の道徳観に本づくとせば、縹緲幽遠な歌調でない方が却って調和するのである。由来儒教の観相は実生活の常識であるから、それに本づいて出来る歌も亦結局其処に帰着するのである。憶良は、伝誦されて来た古歌謡、祝詞あたりまで溯って勉強し、「谷ぐくのさわたるきはみ」等というけれども、作る憶良の歌というものは何処か漢文的口調のところがある。併し、万葉集全体から見れば、憶良は憶良らしい特殊の歌風を成就したということになるから、その憶良的な歌の出来のよい一例としてこれを選んで置いた。

○

銀も金も玉もなにせむにまされる宝子に如かめやも　〔巻五・八〇三〕　山上憶良

山上憶良は、「子等を思ふ歌」一首（長歌反歌）を作った。序は、「釈迦如来、金口に正しく説き給はく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しと。又説き給はく、愛は子に過ぎたるは無しと。至極の大聖すら尚ほ子を愛しむ心あり。況して世間の蒼生、誰か子を愛しまざらめや」というものであり、長歌は、「瓜食めば子等思ほゆ、栗食めば況してしぬばゆ、何処より来りしものぞ、眼交にもとな懸りて、安寝し為さぬ」というので、この長歌は憶良の歌としては第一等である。簡潔で、飽くまで実事を歌い、恐らく歌全体が憶良の正体と合致したものであろう。

この反歌は、金銀珠宝も所詮、子の宝には及ばないというので、長歌の実事を詠んだのに対して、この方は綜括的に詠んだ。そして憶良は仏典にも明るかったから、自然にその影響がこの歌にも出たものであろう。「なにせむに」は、「何かせむ」の意である。憶良の語句の仏典から来たのは、「古日を恋ふる歌」（巻五・九〇四）にも、「世の人の貴み願ふ、七種の宝も我は、なにせむに、我が間の生れいでたる、白玉の吾が子古日は」とあるのを見ても分かる。七宝は、金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀または、金・銀・琉璃・頗梨・車渠・瑪瑙・金剛であ

る。そういう仏典の新しい語感を持った言葉を以て、一首を為立て、堅苦しい程に緊密な声調を以て終始しているのに、此一首の佳い点があるだろう。けれども長歌に比してこの反歌の劣るのは、後代の今となって見れば言語の輪廓として受取られる弱点が存じているためである。併し、旅人の讃酒歌にせよ、この歌にせよ、後代の歌人として、作歌を学ぶ吾等にとって、大に有益をおぼえしめる性質のものである。

○

常知らぬ道の長路をくれぐれと如何にか行かむ糧米は無しに　〔巻五・八八八〕　山上憶良

肥後国益城郡に大伴君熊凝という者がいた。天平三年六月、相撲部領使某の従者として京へ上る途中、安芸国佐伯郡高庭駅で病死した。行年十八であった。そして、死なんとした時自ら歎息して此歌を作ったとして、山上憶良が此歌を作った。この歌の詞書に次の如くに書いてある。「臨死むとする時、長歎息して曰く、伝へ聞く仮合の身滅び易く、泡沫の命駐め難し。所以に千聖已に去り、百賢留らず、況して凡愚の微しき者、何ぞも能く逃避せむ。但我が老いたる親並に菴室に在り。我を待つこと日を過さば、自ら心を傷むる恨あらむ。我を望みて時に違はば、必ず明を喪ふ泣を致さむ。哀しきかも我が父、痛ましきかも我が母、一身死に向ふ途を患

へず、唯二親世に在す苦を悲しぶ。今日長く別れなば、何れの世にか覲ることを得む。乃ち歌六首を作りて死りぬ。其歌に曰く」というのである。そして長歌一首短歌五首がある。併しこれは、前言のごとく、熊凝が自ら作ったのではなく、憶良が熊凝の心になって、熊凝臨終のつもりになって作ったのである。

一首の意は、嘗て知らなかった遙かな黄泉の道をば、おぼつかなくも心悲しく、糧米も持たずに、どうして私は行けば好いのだろうか、というのである。「くれぐれと」は、「闇闇と」で、心おぼろに、おぼつかなく、うら悲しく等の意である。この歌の前に、「欝しく何方向きてか」というのがあるが、その「おぼほしく」に似ている。

この歌は六首の中で一番優れて居り、想像で作っても、死して黄泉へ行く現身の姿のようにして詠んでいるのがまことに利いて居る。糧米も持たずに歩くと云ったのも、後代の吾等の心を強く打つものである。糧米をカリテと訓むは、霊異記下巻に糧(可里弖)とあるによっても明かで、乾飯直の義(攷證)だと云われている。一に云、「かれひはなしに」とあるのは、「餉は無しに」で意味は同じい。カレヒは乾飯である。憶良の作ったこのあたりの歌の中で、私は此一首を好んでいる。

○

世間を憂しと恥しと思へども飛び立ちかねつ
鳥にしあらねば　〔巻五・八九三〕　山上憶良

山上憶良の「貧窮問答の歌一首并に短歌」(土屋氏云、憶良上京後、即ち天平三年秋冬以後の作であろう。)の短歌である。長歌の方は、二人貧者の問答の体で、一人が、「風雜り雨降る夜の、……如何にしつつか、汝が世は渡る」といえば、一人が、「天地は広しといへど、あが為は狭くやなりぬる、……斯くばかり術無きものか、世間の道」と答えるところで、万葉集中特殊なもので、また憶良の作中のよいものである。

この反歌一首の意は、こう吾々は貧乏で世間が辛いの恥かしいのと云ったところで、所詮吾々は人間の赤裸々で、鳥ではないのだからして、何処ぞへ飛び去るわけにも行くまい、というのである。「やさし」は、恥かしいということで、「玉島のこの川上に家はあれど君を恥しみ顕さずありき」(巻五・八五四)にその例がある。この反歌も、長歌の方で、細かくいろいろと云ったから、概括的に締めくくったのだが、やはり貧乏人の言葉にして、その語気が出ているのでただの概念歌から脱却している。論語に、邦有レ道、貧且賤焉恥也とあり、魏文帝の詩に、願レ飛安得レ翼、欲レ済河無レ梁とあるのも参考となり、憶良の長歌の句などには支那の出典を見出

し得るのである。

○

慰むる心はなしに雲隠り鳴き往く鳥の哭のみし泣かゆ　〔巻五・八九八〕　山上憶良

山上憶良の、「老身重病経年辛苦、及思二児等一歌七首長一首短六首」の短歌である。長歌の方は、人間には老・病の苦しみがあり、長い病に苦しんで、一層死のうとおもうことがあるけれども、児等のことを思えば、そうも行かずに歎息しているというのである。

この短歌は、そういう風に老・病のために苦しんで、慰めん手段もなく、雲隠れに貌も見えず鳴いてゆく鳥の如く、ただ独りで忍び泣きしてばかりいる、というので、長歌の終に、「彼に此に思ひわづらひ、哭のみし泣かゆ」と止めたのを、この短歌で繰返している。

このくらいの技巧の歌は、万葉には幾つもあるように思う程、取り立てて特色のあるものでないが、何か悲しい響があるようで棄て難かったのである。

○

術もなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど児等に障りぬ　〔巻五・八九九〕　山上憶良

同じく短歌。もう手段も尽き、苦しくて為方がないので、走り出して自殺でもしてしまおうと思うが、児等のために妨げられてそれも出来ない、というので、此は長歌の方で、「年長く病みし渡れば、月累ね憂ひ吟ひ、ことごとは死ななと思へど、五月蠅なす騒ぐ児等を、棄ててはし死は知らず、見つつあれば心は燃えぬ」云々というのが此短歌にも出ている。「障る」は、障礙のことで、「百日しも行かぬ松浦路今日行きて明日は来なむを何か障れる」（巻五・八七〇）にも用例がある。

この歌の好いのは、ただ概括的にいわずに、具体的に云っていることで、こういう場面になると、人麿にも無い人間の現実的な姿が現出して来るのである。「出ではしり去ななともへど」というあたりの、朴実とでも謂うような調べは、憶良の身に即き纏ったものとして尊重していいであろう。なお此処に、「富人の家の子等の着る身無み腐し棄つらむ絹綿らはも」（巻五・九〇〇）、「麁妙の布衣をだに着せ難に斯くや歎かむ為むすべを無み」（同・九〇一）という歌もあるが、これも具体的でおもしろい。そして、これだけの材料を扱いこなす意力をも、後代の吾等は尊

重すべきである。この歌の「絹綿」は原文「絁綿」で、真綿の意であろうが、当時筑紫の真綿の珍重されたこと、また名産地であったことは沙弥満誓の歌のところで既に云ったとおりである。

憶良は娑婆界の貧・老・病の事を好んで歌って居り、どうしても憶良自身の体験のようであるが、筑前国司であった憶良が実際斯くの如く赤貧困窮であったか否か、自分には能く分からないが、自殺を強いられるほどそんなに貧窮ではなかったものと想像する。そして彼は彼の当時教えられた大陸の思想を、周辺の現実に引き移して、如上の数々の歌を詠出したものとも想像している。

○

稚ければ道行き知らじ幣はせむ黄泉の使負ひて通らせ　〔巻五・九〇五〕　山上憶良

「男子名は古日を恋ふる歌」の短歌である。左注に此歌の作者が不明だが、歌柄から見て憶良だろうと云って居る。古日という童子の死んだ時弔った歌であろう。そして憶良を作者と仮定しても、古日という童子は憶良の子であるのか他人の子であるのかも分からない。恐らく他人の子であろう。（普通には、古日は憶良の子で、この時憶良は七十歳ぐらいの老翁だと解せら

れている。なお土屋氏は、古日はコヒと読むのかも知れないと云って居る。）

一首の意は、死んで行くこの子は、未だ幼い童子で、冥土の道はよく分かっていない。冥土の番人よ、よい贈物をするから、どうぞこの子を背負って通してやって呉れよ、というのである。「幣」は、「天にます月読壮子幣はせむ今夜の長さ五百夜継ぎこそ」（巻六・九八五）、「たまぼこの道の神たち幣はせむあが念ふ君をなつかしみせよ」（巻十七・四〇〇九）等にもある如く、神に奉る物も、人に贈る物も、悪い意味の貨賂をも皆マヒと云った。

この一首は、童子の死を悲しむ歌だが、内容が複雑で、人麿の歌の内容の簡単なものなどとは余程その趣が違っている。然かも黄泉の道行をば、恰も現実にでもあるかの如くに生々しく表現して居るところに、憶良の歌の強味がある。歌調がぼきりぼきりとして流動的波動的に行かないのは、一面はそういう素材如何にも因るのであって、こういう素材になれば、こういう歌調をおのずから要求するものともいうことが出来る。

○

布施置きて吾は乞ひ禱む欺かず直に率行きて天路知らしめ　〔巻五・九〇六〕　山上憶良

これも同じ歌で、「布施」は仏教語で、捧げ物の事だから、前の歌の、「幣」と同じ事に落着

く。この歌も、童子の死にゆくさまを歌っているが、この方は黄泉でなく、天路のことを云っている。共に死者の往く道であるが、この方は稍日本的に云っている。初句原文「布施於吉已」は旧訓フシオキテであるが、略解で、「布施はぬさと訓べし。又たゞちにふせとも訓べき也。こゝに乞のむといへるは、仏に乞にて、神に禱るとは事異なれば、幣とはいはで、布施と言へる也。施を絁の誤として、ふしおき(臥起)てとよめるはひがこと也」と云った。いかにもその通りで、「伏し起きて」では意味を成さない。この歌もこれだけの複雑なことを云っていて、相当の情調をしみ出でさせるのは、先ず珍とせねばなるまい。

巻第六

○

山高み白木綿花に落ちたぎつ滝の河内は見れど飽かぬかも　(巻六・九〇九)　笠金村

元正天皇、養老七年夏五月芳野離宮に行幸あった時、従駕の笠金村が作った長歌の反歌である。「白木綿」は楮、穀(穀桑楮)の皮から作った白布、その白木綿の如くに水の流れ落つる状態である。「河内」は、河から繞らされている土地をいう。既に人麿の歌に、「たぎつ河内に船出するかも」(巻一・三九)がある。また、「見れど飽かぬかも」という結句も、人麿の、「珠水激る滝の宮処は、見れど飽かぬかも」(巻一・三六)のほか、万葉には可なりある。

この一首は、従駕の作であるから、謹んで作っているので、その歌調もおのずから華朗で荘重である。けれどもそれだけ類型的、図案的で、特に人麿の歌句の模倣なども目立つのである。併し、この朗々とした荘重な歌調は、人麿あたりから脈を引いて、一つの伝統的なものであり、万葉調といえば、直ちに此種のものを聯想し得る程であるから、後代の吾等は時を以て顧るべき性質のものである。巻九(一七三六)に、「山高み白木綿花に落ちたぎつ夏実の河門見れど飽か

ぬかも」というのがあるのは、恐らく此歌の模倣であろうから、そうすれば金村のこの形式的な一首も、時に人の注意を牽いたに相違ない。

○

奥つ島荒磯の玉藻潮干満ちい隠れゆかば思ほえむかも　〔巻六・九一八〕　山部赤人

聖武天皇、神亀元年冬十月紀伊国に行幸せられた時、従駕の山部赤人の歌った長歌の反歌である。「沖つ島」は沖にある島の意で、此処は玉津島のことである。

一首の意は、沖の島の荒磯に生えている玉藻刈もしたが、今に潮が満ちて来て荒磯が隠れてしまうなら、心残りがして、玉藻を恋しくおもうだろう、というのである。長歌の方で、「潮干れば玉藻苅りつつ、神代より然ぞ尊き、玉津島山」とあるのを受けている。

第四句、板本、「伊隠去者」であるから、「い隠れゆかば」或は「い隠ろひなば」と訓んだが、元暦校本・金沢本・神田本等に、「但隠去者」となっているから、「但」を上につけて「潮干みちて隠ろひゆかば」とも訓んでいる。これは二つの訓とも尊重して味うことが出来る。

この歌は、中心は、「潮干満ちい隠れゆかば思ほえむかも」にあり、赤人的に清淡の調であるが、なかに情感が漂っていて佳い歌である。海の玉藻に対する係恋とも云うべきもので、「思ほえむかも」は、多くは恋人とか旧都などに対して用いる言葉であるが、この歌では「玉藻」に云っている。もっとも集中には、例えば、「飼飯の浦に寄する白浪しくしくに妹が容儀はおもほゆるかも」(巻十二・三二〇〇)、「飫宇海の河原の千鳥汝が鳴けばわが佐保河のおもほゆらくに」(巻三・三七一)の如きがあって、共通して使われている。行幸に供奉し、赤人は歌人としての意識を以てこの歌を作ったのだろうが、必ずしも「宮廷歌人」などという意図が目立たずに、自由に個人としての好みを吐露しているようである。一般が自由でこだわりのなかった聖世を反映していると謂っていい。また、「宮廷歌人」などと云っても、現代の人々の持っている「宮廷歌人」の西洋まがいの概念と違った気持で供奉したことをも知らねばならぬのである。

○

若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る　〔巻六・九一九〕　山部赤人

赤人の歌続き。「若の浦」は今は和歌の浦と書くが、弱浜とも書いた(続紀)。また聖武天皇のこの行幸の時、明光の浦と命名せられた記事がある。「潟」は干潟の意である。

一首の意は、若の浦にだんだん潮が満ちて来て、干潟が無くなるから、干潟に集まっていた沢山の鶴が、葦の生えて居る陸の方に飛んで行く、というのである。

やはり此歌も清潔な感じのする赤人一流のもので、「葦べをさして鶴鳴きわたる」は写象鮮明で旨いものである。また声調も流動的で、作者の気乗していることも想像するに難くはない。

「潟をなみ」は、赤人の要求であっただろうが、微かな「理」が潜んでいて、もっと古いところの歌ならこうは云わない。例えば、既出の高市黒人作、「桜田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる」(巻三・二七一)の如きである。つまり「潟をなみ」の第三句が弱いのである。これはもはや時代的の差違であろう。この歌は、古来有名で、叙景歌の極地とも云われ、遂には男波・女波・片男波の聯想にまで拡大して通俗化せられたが、そういう俗説を洗い去って見て、依然として後にのこる歌である。万葉集を通読して来て、注意すべき歌に標をつけるとしたら、従来の評判などを全く知らずにいるとしても、標のつかる性質のものである。一般にいってもそういういいところが赤人の歌に存じているのである。ただこの歌に先行したのに、黒人の歌があるから黒人の影響乃至模倣ということを否定するわけには行かない。

巻十五に、「鶴が鳴き葦辺をさして飛び渡るあなたづたづし独さ寝れば」(三六二六)、「沖辺より潮満ち来らし韓の浦に求食りする鶴鳴きて騒ぎぬ」(三六四二)等の歌があり、共に赤人の此歌の模倣であるから、その頃から此歌は尊敬せられていたのであろう。

なお、「難波潟潮干に立ちて見わたせば淡路の島に鶴わたる見ゆ」(巻七・一一六〇)、「円方の湊の渚鳥浪立てや妻呼び立てて辺に近づくも」(同・一一六二)、「夕なぎにあさりする鶴潮満てば沖

浪高み己妻喚ばふ」(同・一一六五)というのもあり、赤人の此歌と共に置いて味ってよい歌である。特に、「妻呼びたてて辺に近づくも」、「沖浪高み己妻喚ばふ」の句は、なかなか佳いものだから看過しない方がよいとおもう。

○

み芳野の象山の際の木末には幾許も騒ぐ鳥の
こゑかも　〔巻六・九二四〕　山部赤人

聖武天皇神亀二年夏五月、芳野離宮に行幸の時、山部赤人の作ったものである。「象山」は芳野離宮の近くにある山で、「際」は「間」で、間とか中とかいう意味になる。「奈良の山の山の際にい隠るまで」(巻一・一七)という額田王の歌の「山の際」も奈良山の連なって居る間にという意。此処では、象山の中に立ち繁っている樹木というのに落着く。

一首の意は、芳野の象山の木立の繁みには、実に沢山の鳥が鳴いて居る、というので、中味は単純であるが、それだけ此処に出ている中味が磨をかけられて光彩を放つに至っている。この歌も前の歌の如く下半に中心が置かれ、「ここだも騒ぐ鳥の声かも」に作歌衝迫もおのずから集注せられている。この光景に相対したと仮定して見ても、「ここだも騒ぐ鳥の声かも」とだけに云い切れないから、此歌はやはり優れた歌で、亡友島木赤彦も力説した如く、赤人傑作の一

つであろう。「幾許」という副詞も注意すべきもので、集中、「神柄か幾許尊き」(巻二・二二〇)「妹が家に雪かも降ると見るまでに幾許もまがふ梅の花かも」(巻五・八四四)、「誰が苑の梅の花かも久方の清き月夜に幾許散り来る」(巻十・二三二五)等の例がある。この赤人の「幾許も騒ぐ」は、主に群鳥の声であるが、鳥の姿も見えていてかまわぬし、若干の鳥の飛んで見える方が却っていいかも知れない。また、結句の「かも」であるが、名詞から続く「かも」を据えるのはむずかしいのだけれども、この歌では、「ここだも騒ぐ」に続けたから声調が完備した。そういう点でも赤人の大きい歌人であることが分かる。

○

ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる清き河
原に千鳥しば鳴く　〔巻六・九二五〕　山部赤人

赤人作で前歌と同時の作である。「久木」は即ち歴木、楸樹で赤目柏である。夏、黄緑の花が咲く。一首の意は、夜が更けわたると楸樹の立ちしげっている、景色よい芳野川の川原に、千鳥が頻りに鳴いて居る、というのである。

この歌は夜景で、千鳥の鳴声がその中心をなしているが、今度の行幸に際して見聞した、芳野のいろいろの事が念中にあるので、それが一首の要素にもなって居る。「久木生ふる清き河

原」の句も、現にその光景を見ているのでなくともよく、写象として浮んだものであろう。或は月明の川原とも解し得る、それは「清き」の字で補充したのであるが、月の事がなければやはりこの「清き」は川原一帯の佳景という意味にとる方がいいようである。併しこの歌は、そういう詮議を必要としない程統一せられていて、読者は左程解釈上思い悩むことが無くて済んでいるのは、視覚も聴覚も融合した、一つの感じで無理なく綜合せられて居るからである。或は、この歌は、深夜の千鳥の声だけでは物足りないのかも知れない。「久木生ふる清き河原」という、視覚上の要素が却って必要なのかも知れない。その辺の解明が能く私に出来ないけれども、全体として、感銘の新鮮な歌で、供奉歌人の歌として、人麿の、「見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む」(巻一・三七)とも比較が出来るし、また、笠金村とも同行したのだから、金村の、「万代に見とも飽かめやみ吉野のたぎつ河内の大宮どころ」(巻六・九二一)、「皆人の寿も吾もみ吉野の滝の床磐の常ならぬかも」(同・九二二)の二首とも比較することが出来る。比較して見ると、赤人の歌の方が具体的で、落着いて写生している。なお、声調のうち、第三句の「久木生ふる」という伸びた句と、結句の「しば鳴く」と端的に止めたのを注意していいだろう。

○

島隠り吾が榜ぎ来れば羨しかも大和へのぼる
真熊野の船　〔巻六・九四四〕　山部赤人

山部赤人が、辛荷島を過ぎて詠んだ長歌の反歌である。辛荷島は播磨国室津*の沖にある島である。一首の意は、島かげを舟に乗って榜いで来ると、羨しいことには、大和へのぼる熊野の舟が見える、というので、旅にいて家郷の大和をおもうのは、今から見ればただの常套手段のように見えるが、当時の人には、そういう常套語が、既に一種の感動を伴って聞こえて来たものと見える。「真熊野の舟」は、熊野舟で、熊野の海で多く乗ったものであろう。攷證に、「紀州熊野は良材多かる所なれば、その材もて作りたるよしの謂か。さればそれを本にて、いづくにて作れるをも、それに似たるをば熊野舟といふならん。集中、松浦船・伊豆手船・足柄小船などいふあるも、みなこの類とすべし」とあり、「浦回榜ぐ熊野舟つきめづらしく懸けて思はぬ月も日もなし」(巻十二・三一七二)の例がある。「羨しかも」は、「羨しきかも」と同じだが当時は終止言からも直ぐ続けた。結句は、「真熊野の船」という名詞止めで、「棚無し小船」などの止めと同じだが、「の」が入っているので、それだけの落着がある。第三句の、「羨しかも」は小休止があるので、前の歌の「潟を無み」などと同様、幾らか此処で弛むが、これは赤人的手法

の一つの傾向かも知れない。一首は、羈旅の寂しい情を籠めつつ、赤人的諧調音で統一せられた佳作である。この時の歌に、「玉藻苅る辛荷の島に島回する鵜にしもあれや家思はざらむ」(巻六・九四三)というのがある。これは若し鵜ででもあったら、家の事をおもわずに済むだろう、というので「羨しかも」という気持と相通じている。鵜を捉えて詠んでいるのは写生でおもしろい。

○

風吹けば浪か立たむと伺候に都多の細江に浦隠り居り　〔巻六・九四五〕　山部赤人

赤人作で前歌の続である。「都多の細江」は姫路から西南、現在の津田*・細江**あたりで、船場川の川口になっている。当時はなるべく陸近く舟行し、少し風が荒いと船を泊めたので、こういう歌がある。一首の意は、この風で浪が荒く立つだろうと、心配して様子を見ながら、都多の川口のところに船を寄せて隠れておる、というのである。第三句、原文「伺候爾」は、旧訓マツホドニ。代匠記サモラフニ。古義サモラヒニ。この「さもらふ」は、「東の滝の御門にさもらへど」(巻二・一八四)の如く、伺候する意が本だが、転じて様子を伺うこととなった。「大御舟泊ててさもらふ高島の三尾の勝野の渚し思ほゆ」(巻七・一一七一)、「朝なぎに舳向け榜がむと、

さもらふと」（巻二十・四三九八）等の例がある。

この歌も、羈旅の苦しみを念頭に置いているようだが、そういう響はなくて、寧ろ清淡とも謂うべき情調がにじみ出でている。ことに結句の、「浦隠り居り」などは、なかなか落着いた句である。そして読過のすえに眼前に光景の鮮かに浮んで来る特徴は赤人一流のもので、古来赤人を以て叙景歌人の最大なものと称したのも偶然ではないのである。吾等は短歌を広義抒情詩と見立てるから、叙景・抒情をば截然と区別しないが、総じて赤人のものには、激越性が無く、静かに落着いて、物を観ている点を、後代の吾等は学んでいるのである。

○

ますらをと思へる吾や水茎の水城のうへに涕拭はむ　（巻六・九六八）　大伴旅人

大伴旅人が大納言に兼任して、京に上る時、多勢の見送人の中に児島という遊行女婦が居た。旅人が馬を水城（貯水池の大きな堤）に駐めて、皆と別を惜しんだ時に、児島は、「凡ならば左も右も為むを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも」（巻六・九六五）、「大和道は雲隠りたり然れども我が振る袖を無礼と思ふな」（同・九六六）という歌を贈った。それに旅人の和えた二首中の一首である。

一首の意は、大丈夫だと自任していたこの俺も、お前との別離が悲しく、此処の「水茎の」（枕詞）水城のうえに、涙を落すのだ、というのである。

児島の歌も、軽佻でないが、旅人の歌もしんみりしていて、決して軽佻なものではない。「涙のごはむ」の一句、今の常識から行けば、諧謔を交えた誇張と取るかも知れないが、実際はそうでないのかも知れない、少くとも調べの上では戯れではない。「大丈夫とおもへる吾や」はその頃の常套語で軽いといえば軽いものである。当時の人々は遊行女婦というものを軽蔑せず、真面目にその作歌を受取り、万葉集はそれを大家と共に並べ載せているのは、まことに心にくいばかりの態度である。

「真袖もち涙を拭ひ、咽びつつ言問すれば」（巻二十・四三九八）のほか、「庭たづみ流るる涙とめぞかねつる」（巻二・一七八）、「白雲に涙は尽きぬ」（巻八・一五二〇）等の例がある。

○

千万の軍なりとも言挙せず取りて来ぬべき男をとぞ念ふ　（巻六・九七二）　高橋虫麿

天平四年八月、藤原宇合（不比等の子）が西海道節度使（兵馬の政を掌る）になって赴任する時、高橋虫麿の詠んだものである。「言挙せず」は、「神ながら言挙せぬ国」（巻十三・三二五三）、「言挙

せず妹に依り寝む」(巻十二・二九一八)等の例にもある如く、彼此と言葉に出していわないことである。

一首の意は、縦い千万の軍勢なりとも、彼此と言葉に云わずに、前触などせずに、直ちに討取って来る武将だとおもう、君は、というので、威勢をつけて行を盛にしたものである。虫麿の此処の長歌も技法に屈折のあるものだが、虫麿歌集の長歌にもなかなか佳作があって、作者の力量をおもわしめるが、この短歌一首も、調べを強く緊めて、武将を送るにふさわしい声調を出している。彼此いっても、この万葉調がもはや吾等には出来ない。

○

丈夫の行くとふ道ぞ凡ろかに念ひて行くな丈夫の伴　(巻六・九七四)　聖武天皇

聖武天皇御製。天平四年八月、節度使の制を東海・東山・山陰・西海の四道に布いた。聖武天皇が其等の節度使等が任に赴く時に、酒を賜わり、この御製を作りたもうた。その長歌の反歌である。

一首は、今出で立つ汝等節度使の任は、まさに大丈夫の行くべき行旅である。ゆめおろそかに思うな、大丈夫の汝等よ、と宣うので、功をおさめて早く帰れという大御心が含まれている。

「行くとふ」の「とふ」は「といふ」で、天地のことわりとして人のいう意である。「おほろかに」は、おおよそに、軽々しく、平凡にぐらいの意で、「百種の言ぞ隠れるおほろかにすな」(巻八・一四五六)、「おほろかに吾し思はば斯くばかり難き御門を退り出めやも」(巻十一・二五六八)等の例がある。御製は、調べ大きく高く、御慈愛に満ちて、闊達至極のものと拝誦し奉る。「大君の辺にこそ死なめ」の語のおのずからにして口を漏るるは、国民の自然のこえだということを念わねばならぬ。短歌はかくの如くであるが、長歌は、「食国の遠の御朝廷に、汝等が斯く罷りなば、平らけく吾は遊ばむ、手抱きて我は御在さむ、天皇朕がうづの御手もち、掻撫でぞ労ぎたまふ、うち撫でぞ労ぎたまふ、還り来む日相飲まむ酒ぞ、この豊御酒は」というのであり、「平らけく吾は遊ばむ、手抱きて我はいまさむ」とは、慈愛遍照する現神のみ声である。

○

士やも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして　(巻六・九七八)　山上憶良

山上憶良の痾に沈める時の歌一首で、巻五の、沈痾自哀文と思子等歌は、天平五年六月の作であるから、此短歌一首もその時作ったものであろう。また此歌の左注に、憶良が病んだ時、藤原朝臣八束(藤原真楯)が、河辺朝臣東人を使として病を問わしめた、その時の作だとある。

一首の意は、大丈夫たるものは、万代の後まで語り伝えられるような功名もせず、空しく此世を終るべきであろうか、というので、名も遂げずに此儘死するのは残念だという意である。憶良は渡海して支那文化に直接接したから、此思想も彼には身に即いていて切実なものであったに相違ない。そこで此一首の調べも、重厚で、浮々していないし、また憶良の歌にしては連続流動的声調を持っているが、ただ後代の吾等にとっては稍大づかみに響くというだけである。結句原文、「名者不立之而」は旧訓ナハ・タタズシテであったのを、古義でナハ・タテズシテと訓んだ。旧訓の方が古調のようである。

巻十九に、大伴家持が此歌に追和した長歌と短歌が載っている。長歌の方に、「あしひきの八峯踏み越え、さしまくる情障らず、後代の語りつぐべく、名を立つべしも」(四一六四)とあり、短歌の方に、「丈夫は名をし立つべし後の代に聞き継ぐ人も語りつぐがね」(四一六五)とある。家持は憶良の此一首をも尊敬していたことが分かる。

○

振仰けて若月見れば一目見し人の眉引おもほ
ゆるかも　〔巻六・九九四〕　大伴家持

大伴家持の作った、初月の歌である。大伴家持の年代の明かな歌中、最も早期のもので、家

持十六歳ぐらいの時だろうといわれている。「眉引」は眉墨を以て眉を画くことで、薬師寺所蔵の吉祥天女、或は正倉院御蔵の樹下美人などの眉の如き最も具体的な例である。書紀仲哀巻に、譬如二美女之睩一、有二向津国一。睩、此云二麻用弭枳一。古事記中巻、応神天皇御製歌に、麻用賀岐許邇加岐多礼、和名鈔容飾具に、黛、和名万由須美。集中の例は、「おもはぬに到らば妹が嬉しみと笑まむ眉引おもほゆるかも」(巻十一・二五四六)、「我妹子が笑まひ眉引面影にかかりてもとな思ほゆるかも」(巻十二・二九〇〇)等がある。

一首の意は、三日月を仰ぎ見ると、ただ一目見た美人の眉引のようである、というので、少年向きの美しい歌である。併し家持は少年にして斯く流暢な歌調を実行し得たのであるから、歌が好きで、先輩の作や古歌の数々を勉強していたものであろう。この歌で、「一目見し」に家持は興味を持っている如くであるが、「一目見し人に恋ふらく天霧らし零り来る雪の消ぬべく念ほゆ」(巻十・二三四〇)、「花ぐはし葦垣越しにただ一目相見し児ゆゑ千たび歎きつ」(巻十一・二五六五)等の例が若干ある。家持の歌は、斯く美しく、覚官的でもあるが、彼の歌には、なお、「なでしこが花見る毎に処女らが笑ひのにほひ思ほゆるかも」(巻十八・四一一四)、「秋風に靡く川びの柔草のにこよかにしも思ほゆるかも」(巻二十・四三〇九)の如き歌をも作っている。「笑ひのにほひ」は青年の体に即いた語でなかなか旨いところがある。併し此等の歌を以て、万葉最上級の歌と伍せしめるのはいかがとも思うが、万葉鑑賞にはこういう歌をもまた通過せねばな

らぬのである。

○

御民われ生ける験あり天地の栄ゆる時に遇へらく念へば　〔巻六・九九六〕　海犬養岡麿

天平六年、海犬養岡麿が詔に応えまつった歌である。一首の意は、天皇の御民である私等は、この天地と共に栄ゆる盛大の御世に遭遇して、何という生き甲斐のあることであろう、というのである。「験」は効験、結果、甲斐等の意味に落着く。「天ざかる鄙の奴に天人し斯く恋すらば生ける験あり」（巻十八・四〇八二）という家持の用例もある。一首は応詔歌であるから、謹んで歌い、荘厳の気を漲らしめている。そして斯く思想的大観的に歌うのは、此時代の歌には時々見当るのであって、その思想を統一して一首の声調を完うするだけの力量がまだこの時代の歌人にはあった。それが万葉を離れるともはやその力量と熱意が無くなってしまって、弱々しい歌のみを辛うじて作るに止る状態となった。此の歌などは、万葉としては後期に属するのだが、聖武の盛世にあって、歌人等も競い勉めたために、人麿調の復活ともなり、かかる歌も作らるるに至った。

○

児等しあらば二人聞かむを沖つ渚に鳴くなる鶴の暁の声　〔巻六・一〇〇〇〕　守部王

聖武天皇天平六年春三月、難波宮に行幸あった時、諸人が歌を作った。此一首は守部王（舎人親王の御子）の歌である。一首は、若し奈良に残して来た孀も一しょなら、二人で聞くものを、沖の渚に鳴いて居る鶴の暁のこえよ、何とも云えぬ佳い声よ、という程の歌である。なぜ私は此一首を選んだかというに、特に集中で秀歌というのでなく、結句が「鳴くなる鶴の暁のこゑ」の如く名詞止めであるのみならず、後世新古今時代に発達した、名詞止めの歌調が此歌に既にあって、新古今調と違った、重厚なゆらぎを有っているのに目を留めたゆえであった。なお、巻十九（四一四三）に、「もののふの八十をとめ等が挹みまがふ寺井のうへの堅香子の花」、巻十九（四一九三）に、「ほととぎす鳴く羽触にも散りにけり盛過ぐらし藤浪の花」という歌の結句も、上代の古調歌には無い名詞止めの歌である。

○

春日山おして照らせるこの月は妹が庭にも清けかりけり　〔巻七・一〇七四〕　作者不詳

作者不詳、雑歌、詠レ月である。一首の意は、春日山一帯を照らして居る今夜の月は、妹の庭にもまた清く照って居る、というのである。作者は現在通って来た妹の家に居る趣で、春日山の方は一般の月明(通って来る道すがら見た)を云っているのである。ただ妹の家は春日山の見える処にあったことは想像し得る。伸々とした濁りの無い快い歌で、作者不明の民謡風のものだが、一定の個人を想像しても相当に味われるものである。やはり、「妹が庭にも清けかりけり」という句が具体的で生きているからであろう。

「この月」は、現に照っている今夜の月という意味で、此巻に、「常は嘗て念はぬものをこの月の過ぎ隠れまく惜しき宵かも」(一〇六九)、「この月の此処に来れば今とかも妹が出で立ち待ちつつあらむ」(一〇七八)があり、巻三に、「世の中は空しきものとあらむとぞこの照る月は満ち闕けしける」(四四二)がある。「おして照らせる」の表現も万葉調の佳いところで、「我が屋戸に

月おし照れりほととぎす心あらば今夜来鳴き響もせ」(巻八・一四八〇)、「窓越しに月おし照りてあしひきの嵐吹く夜は君をしぞ思ふ」(巻十一・二六七九)等の例がある。此歌で、「この月は」と、「妹が庭にも」との関係に疑う人があったため、古義のように、「妹が庭にも清けかるらし」の意だろうというように解釈する説も出でたが、これは作者の位置を考えなかった錯誤である。

○

海原の道遠みかも月読の明すくなき夜はふけにつつ　〔巻七・一〇七五〕　作者不詳

作者不詳、海岸にいて、夜更にのぼった月を見ると、光が清明でなく幾らか霞んでいるように見える。それをば、海上遙かなために、月も能く光らないと云うように、作者が感じたから、斯ういう表現を取ったものであろう。巻三(二九〇)に、「倉橋の山を高みか夜ごもりに出で来る月の光ともしき」とあるのも全体が似て居るが、この巻七の歌の方が、何となく稚く素朴に出来ている。それだけ常識的でなく、却って深みを添えているのだが、常識的には理窟に合わぬところがあると見えて、解釈上の異見もあったのである。

○

痛足河河浪立ちぬ巻目の由槻が岳に雲居立てるらし　〔巻七・一〇八七〕　柿本人麿歌集

柿本人麿歌集にある歌で、詠雲の中に収められている。痛足河は、大和磯城郡纒向村*にあり、纒向山(巻向山)と三輪山との間に源を発し、西流している川で今は巻向川と云っているが、当時は痛足川とも云っただろう。近くに穴師(痛足)の里がある。由槻が岳は巻向山の高い一峰だというのが大体間違ない。一首の意は、痛足河に河浪が強く立っている。恐らく巻向山の一峰である由槻が岳に、雲が立ち雨も降っていると見える、というので、既に由槻が岳に雲霧の去来しているのが見える趣である。強く荒々しい歌調が、自然の動運をさながらに象徴すると看ていい。第二句に、「立ちぬ」、結句に「立てるらし」と云っても、別に耳障りしないのみならず、一首に三つも固有名詞を入れている点なども、大胆なわざだが、作者はただ心の儘にそれを実行して毫もこだわることがない。そしてこの単純な内容をば、荘重な響を以て統一している点は実に驚くべきで、恐らくこの一首は人麿自身の作だろうと推測することが出来る。結句、原文「雲居立有良志」だから、クモヰタテルラシと訓んだが、「有」の無い古鈔本もあり、従ってクモヰタツラシとも訓まれている。この訓もなかなか好いから、認容してかまわな

い。

○

あしひきの山河の瀬の響るなべに弓月が岳に雲立ち渡る　〔巻七・一〇八八〕　柿本人麿歌集

同じく柿本人麿歌集にある。一首の意は、近くの痛足川に水嵩が増して瀬の音が高く聞こえている。すると、向うの巻向の由槻が岳に雲が湧いて盛に動いている、というので、二つの天然現象を「なべに」で結んでいる。「なべに」は、と共に、に連れて、などの意で、「雁がねの声聞くなべに明日よりは春日の山はもみぢ始めなむ」(巻十・二一九五)、「もみぢ葉を散らす時雨の零るなべに夜さへぞ寒き一人し寝れば」(巻十・二二三七)等の例がある。

この歌もなかなか大きな歌だが、天然現象が、そういう荒々しい強い相として現出しているのを、その儘さながらに表現したのが、写生の極致ともいうべき優れた歌を成就したのである。なお、技術上から分析すると、上の句で、「の」音を続けて、連続的・流動的に云いくだして来て、下の句で「ユツキガタケニ」と屈折せしめ、結句を四三調で止めて居る。ことに「ワタル」という音で止めて居るが、そういうところにいろいろ留意しつつ味うと、作歌稽古上にも有益を覚えるのである。次に、此歌は河の瀬の鳴る音と、山に雲の動いている現象とを詠んだもの

だが、或は風もあり雨も降っていたかも知れぬ。併し其風雨の事は字面には無いから、これは奥に隠して置いて味う方が好いようである。そういう事をいろいろ詮議すると却って一首の気勢を損ずることがあるし、この歌の季についても亦同様であって、夏なら夏と極めてしまわぬ方が好いようである。この歌も人麿歌集出だが恐らく人麿自身の作であろう。巻九(一七〇〇)に、「秋風に山吹の瀬の響むなべ天雲翔る雁に逢へるかも」とあって、やはり人麿歌集にある歌だから、これも人麿自身の作で、上の句の同一手法もそのためだと解釈することが出来る。

○

大海に島もあらなくに海原のたゆたふ浪に立
てる白雲　〔巻七・一〇八九〕　作者不詳

作者不明だが、「伊勢に駕に従へる作」という左注がある。代匠記に、「持統天皇朱鳥六年ノ御供ナリ」と云ったが、或はそうかも知れない。一首の意は、大海のうえには島一つ見えない、そして漂動している波には、白雲が立っている、というので、「たゆたふ」は、進行せずに一処に猶予している気持だから、海上の波を形容するには適当であり、第一その音調が無類に適当している。それから、「あらなくに」は、「無いのに」という意で、其処に感慨をこもらせているのだが、そう口訳すると、理に堕ちて邪魔するところがあるから、今の口語ならば、「島も見

えず」、「島も無くして」ぐらいでいいとおもう。つまり、島一つ無いというのが珍らしく、其処に感動が籠っているので、「なくに」が、「立てる白雲」に直接続くのではない。若し関聯せしめるとせば、普段大和で山岳にばかり雲の立つのを見ていたのだから、海上のこの異様の光景に接して、その儘、「大海に島もあらなくに」と云ったと解することも出来る。調子に流動的に大きいところがあって、藤原朝の人麿の歌などに感ずると同じような感じを覚える。ウナバラノ・タユタフ・ナミニあたりに、明かにその特色が見えている。普通従駕の人でなおこの調をなす人がいたというのは、まことに尊敬すべきことである。

「見まく欲り吾がする君もあらなくに奈何か来けむ馬疲るるに」(巻二・一六四)、「磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありといはなくに」(同・一六六)、「かくしてやなほや老いなむみ雪ふる大あらき野の小竹にあらなくに」(巻七・一三四九)等、例が多い。皆、この「あらなくに」のところに感慨がこもっている

○

御室斎く三輪山見れば隠口の初瀬の檜原おも
ほゆるかも　〔巻七・一〇九五〕　作者不詳

山を詠んだ、作者不詳の歌である。「御室斎く」は、御室に斎くの意で、神を祀ってあること

であり、三輪山の枕詞となった。「隠口」は、隠り国の意で、初瀬の地勢をあらわしたものだが、初瀬の枕詞となった。一首の意は、神を斎き祀ってある奥深い三輪山の檜原を見ると、谿谷ふかく同じく繁っておる初瀬の檜原をおもい出す、というので、三輪の檜原、初瀬の檜原といって、檜樹の密林が鬱蒼として居り、当時の人の尊崇していたものと見える。上の句と下の句との聯絡が、「おもほゆるかも」で収めてあるのは、古代人的に素朴簡浄で誠によいものである。なお此種の簡潔に山を詠んだ歌は幾つかあるが、いまは此一首を以て代表せしめた。

○

ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しも嵐かも疾き　〔巻七・一一〇一〕　柿本人麿歌集

柿本人麿歌集にある、詠河歌である。一首の意は、夜になると、巻向川の川音が高く聞こえるが、多分嵐が強いかも知れん、というので、内容極めて単純だが、この歌も前の歌同様、流動的で強い歌である。無理なくありの儘に歌われているが、無理が無いといっても、「ぬばたまの夜さりくれば」が一段、「巻向の川音高しも」が一段、共に伸々とした調であるが、結句の、「嵐かも疾き」は、強く緊まって、厳密とでもいうべき語句である。おわりが二音で終った結句は、万葉にも珍らしく、「独りかも寝む」(巻三・二九八等)、「あやにかも寝も」(巻二十・四四二二)、

「な踏みそね惜し」(巻十九・四二八五)、「高円の野ぞ」(巻二十・四二九七)、「実の光るも見む」(巻十九・四二二六)、「御船かも彼」(巻十八・四〇四五)、「櫛造る刀自」(巻十六・三八三二)、「やどりする君」(巻十五・三六八八)等は、類似のものとして拾うことが出来る。この歌も前の歌と共通した特徴があって、人麿を彷彿せしむるものである。

○

いにしへにありけむ人も吾が如か三輪の檜原に挿頭折りけむ　〔巻七・一一一八〕　柿本人麿歌集

詠葉歌、人麿歌集にある。一首の意は、古人も亦、今の吾のように、三輪山の檜原に入来て、挿頭を折っただろう、というので、品佳く情味ある歌である。巻二(一九六)の人麿の歌に、「春べは花折り挿頭し、秋たてば黄葉挿頭し」とある如く、梅も桜も萩も瞿麦も山吹も柳も藤も挿頭にしたが、檜も梨もその小枝を挿頭にしたものと見える。詠葉とことわっていても、題詠でなく、広義の恋愛歌として、象徴的に歌ったものであろう。人麿の歌に、「古にありけむ人も吾が如か妹に恋ひつつ宿ねがてずけむ」(巻四・四九七)というのがある。さすれば此は伝誦の際に民謡風に変化したものか、或は人麿が二ざまに作ったものか、いずれにしても、二つ並べつつ鑑賞して好い歌である。

○

山の際に渡る秋沙の行きて居むその河の瀬に
浪立つなゆめ　〔巻七・一一二二〕　作者不詳

詠レ鳥、作者不明。「秋沙」は、鴨の一種で普通秋沙鴨、小鴨などと云っている。一首の意は、山のあいを今飛んで行く秋沙鴨が、何処かの川に宿るだろうから、その川に浪立たずに呉れ、というので、不思議に象徴的な匂いのする歌である。作者はほんのりと恋愛情調を以て詠んだのだろうが、情味が秋沙鴨に対する情味にまでなっている。これならば近代人にも直ぐ受納れられる感味で、万葉にはこういう歌もあるのである。「行きて居む」の句を特に自分は好んでいる。「明日香川七瀬の淀に住む鳥も心あれこそ波立てざらめ」(巻七・一三六六)は、寄レ鳥の譬喩歌だから、此歌とは違うが、譬喻は譬喩らしくいいところがある。

○

宇治川を船渡せをと喚ばへども聞えざるらし
楫の音もせず　〔巻七・一一三八〕　作者不詳

「山背にて作れる」歌の一首である。「渡せを」の「を」は呼びかける時、命令形に附く助詞

で、「よ」に通う。一首は、宇治河の岸に来て、船を渡せと呼ぶけれども、呼ぶのが聞こえないらしい、榜いで来る櫂の音がしない、というので、多分夜の景であろうが、宇治の急流を前にして、規模の大きいような、寂しいような変な気持を起させる歌である。これは、「喚ばへども聞えざるらし」のところにその主点があるためである。

なお此歌の処に、「宇治河は淀瀬無からし網代人舟呼ばふ声をちこち聞ゆ」(巻七・一一三五)、「千早人宇治川浪を清みかも旅行く人の立ち難にする」(同・一一三九)等の歌もある。網代人は網代の番をする人。千早人は氏に続き、同音の宇治に続く枕詞である。皆、旅中感銘したことを作っているのである。

○

しなが鳥猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿は無くして　〔巻七・一一四〇〕　作者不詳

摂津にて作れる歌である。「しなが鳥」は猪名につづく枕詞で、しなが鳥即ち鳰鳥が、居並ぶの居と猪とが同音であるから、猪名の枕詞になった。猪名野は摂津、今の豊能川辺両郡に亙った、猪名川流域の平野である。有間山は今の有馬温泉のあるあたり一帯の山である。結句の「宿はなくして」は、前出の、「家もあらなくに」などと同一筆法だが、これは旅の実際を歌っ

たもののようである。それだから作者不明でも、誰の心にも通ずる真実性があると看ねばならぬ。それから現在吾々が注意するのは、「有間山夕霧たちぬ」と切ったところにある。有間山は万葉にはただ二カ処だけに出ているが、後になると、「有間山猪名の笹原かぜふけばいでそよ人を忘れやはする」などの如く歌名所になった。

○

家にして吾は恋ひむな印南野の浅茅が上に照りし月夜を　（巻七・一一七九）　作者不詳

羇旅の歌。印南野で見た、浅茅の上の月の光を、家に帰ってからもおもい出すことだろうというので、印南野を過ぎて来てからの口吻のようだが、それは「照りし月夜を」にあるので、併し縦い過ぎて来たとしても、印象が未だ新しいのだから、「照れる月夜を」ぐらいの気持で味ってもいい歌である。

いずれにしても、広い印南野の月光に感動しているところで、「恋ひむな」といっても、天然を恋うるので、そこにこの歌の特色がある。この歌の側に、「印南野は行き過ぎぬらし天づたふ日笠の浦に波たてり見ゆ」（巻七・一一七八）というのがあるが、これも佳い歌である。

○

たまくしげ見諸戸山を行きしかば面白くして
いにしへ念ほゆ　（巻七・一二四〇）　作者不詳

「見諸戸山」は、即ち御室処山の義で、三輪山のことである。「面白し」は、感深いぐらいの意で、万葉では、何怜とも書いて居る。「生ける世に吾はいまだ見ず言絶えて斯く何怜く縫へる嚢は」（巻四・七四六）、「ぬばたまの夜わたる月を何怜み吾が居る袖に露ぞ置きにける」（巻七・一〇八一）、「おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひは生ふるがに」（巻十四・三四五二）、「おもしろみ我を思へか、さ野つ鳥来鳴き翔らふ」（巻十六・三七九一）等の例があり、現代の吾等が普段いう、「面白い」よりも深みがあるのである。そこで、此歌は、三輪山の風景が佳くて神秘的にも感ぜられるので、「いにしへ思ほゆ」即ち、神代の事もおもわれると云ったのである。平賀元義の歌に、「鏡山雪に朝日の照るを見てあな面白と歌ひけるかも」というのがあるが、この歌の「面白」も、「おもしろくして古おもほゆ」の感と相通じているのである。

○

暁と夜烏鳴けどこの山上の木末の上はいまだ
静けし　〔巻七・一二六三〕　作者不詳

第三句、「山上」は代匠記に「みね」とも訓んだ。もう夜が明けたといって夜烏が鳴くけれど、岡の木立は未だひっそりとして居る、というのである。「木末の上」は、繁っている樹木のあたりの意、万葉の題には、「時に臨める」とあるから、或る機に臨んで作ったものであろう。そして、烏等は、もう暁天になったと告げるけれども、あのように岡の森は未だ静かなのですから、も少しゆっくりしておいでなさい、という女言葉のようにも取れるし、或は男がまだ早いから、も少しゆっくりしようということを女に向って云ったものとも取れるし、或は男が女の許から帰る時の客観的光景を詠んだものとも取れる。いずれにしても、暁はやく二人が未だ一しょにいる時の情景で、こういう事をいっているその心持と、暁天の清潔とが相待って、快い一首を為上げて居る。鑑賞の時、どうしても意味を一つに極めなければならぬとせば、やはり女が男にむかって云った言葉として受納れる方がいいのではあるまいか。略解にも、「男の別れむとする時、女の詠めるなるべし」と云っている。

次手に云うと、この歌の一つ前に、「あしひきの山椿咲く八峰越え鹿待つ君が斎ひ妻かも」（巻七・一二六二）というのがある。これは、猟師が多くの山を越えながら鹿の来るのを、心に期待して、隠れ待っている気持で、そのように大切に隠して置く君の妻よというのである。「斎ひ妻」などいう語は、現代の吾等には直ぐには頭に来ないが、繰返し読んでいるうちに馴れて来るのである。つまり神に斎くように、粗末にせず、大切にする妻というので、出て来る珍らしい獲物の鹿を大切にする気持と相通じて居る。「鹿待つ」までは序詞だが、こういう実際から来た誠に優れた序詞が、万葉になかなか多いので、その一例を此処に示すこととした。

○

巻向の山辺とよみて行く水の水泡のごとし世
の人吾は　〔巻七・一二六九〕　柿本人麿歌集

人麿歌集にある歌で、「児等が手を巻向山は常なれど過ぎにし人に行き纏かめやも」（巻七・一二六八）と一しょに載っている。これで見ると、妻の亡くなったのを悲しむ歌で、「行き纏かめやも」は、通って行って一しょに寝ることがもはや出来ないと歎くのだから、この「水泡の如し」の歌も、妻を悲しんだ歌なのである。

一首の意は、巻向山の近くを音たてて流れゆく川の水泡の如くに果敢ないもので吾身があるよ、というのである。

この歌では、自身のことを詠んでいるのだが、それは妻に亡くなられて悲しい余りに、自分の身をも悲しむのは人の常情であるから、この歌は単に大観的に無常を歌ったものではないのである。其処をはっきりさせないと、結論に錯誤を来すので、「もののふの八十うぢ河の網代木にいさよふ波の行方知らずも」(巻三・二六四)でもそうであるが、この歌も、単に仏教とか支那文学とかの影響を受け、それ等の文句を取って其儘詠んだというのでなく、巻向川(痛足川)の、白く激つ水泡に観入して出来た表現なのである。恐らく此歌は人麿自身の作として間違は無いとおもうが、一寸見には、ただ口に任せて調子で歌っているようにも聞こえるがそうではないのである。巻二に、人麿の妻を痛む歌があるが、この歌もああいう歌と関聯があるのかも知れず、又紀伊の海岸で詠んだ歌も妻を悲しみ追憶した歌だから、一しょにして味ってもいいだろう。

○

春日すら田に立ち疲る君は哀しも若草の嬬無き君が田に立ち疲る　〔巻七・一二八五〕　柿本人麿歌集

此処に、柿本人麿歌集に出づという旋頭歌が二十三首あるが、その一首だけ抜いて見た。旋頭歌は万葉にも数が少く、人麿でも人麿作と明かにその名の見えているのは一首も無い。けれ

ども此処の旋頭歌も、巻十一巻頭の旋頭歌も人麿歌集に出づというのであるから、人麿はこの形態の歌をも作ったのかも知れず、技法はなかなかの力量を思わしめるものである。併し内容は殆ど民謡的恋愛歌だから、そういう種類の古歌謡を人麿が整理したのだとも考えることが出来る。

この一首は、この長閑な春の日ですら、お前は田に働いて疲れる、妻のいない一人ぼっちの、お前は田に働いて疲れる、というので、民謡でも労働歌というのに類し、旋頭歌だから、上の句と、下の句とどちらから歌ってもかまわないのである。「君がため手力疲れ織りたる衣ぞ、春さらばいかなる色に摺りてば好けむ」(巻七・一二八一)なども、女の気持であるが、やはり労働歌で、機織りながらうたう女の歌の気持である。

○

冬ごもり春の大野を焼く人は焼き足らねかも吾が情熾く　〔巻七・一三三六〕　作者不詳

譬喩歌で、「草に寄する」歌であるが、劇しい恋愛の情をその内容として居る。「冬ごもり」は春の枕詞。一首の意は、こんなに胸が燃えて苦しくて為方ないのは、あの春の大野を焼く人達が焼き足りないで、私の心までもこんなに焼くのか知らん、というので、譬喩的にいったから、

おのずからこういう具合に聯想の歌となるのである。この聯想はただ軽く気を利かして云ったもののようにもおもえるが、繰返して読めば必ずしもそうでないところがある。つまり恋情と、春の野火との聯想が、ただ軽くつながって居るのでなく、割合に自然に緊密につながっているというのである。そんならなぜ軽くつながっているように取られるかというに、「焼く人は」と、「吾が情熾く」と繰返されているために、其処が調子が好過ぎて軽く響くのである。併しこれは民謡風のものだから自然そうなるので、奈何ともしがたいのである。この歌は明治になってから古今の傑作のように評価せられたが、今云ったように民謡風なものの中の佳作として鑑賞する方が好いであろう。

家持が、坂上大嬢に贈ったのに、「夜のほどろ出でつつ来らく遍多数くなれば吾が胸截ち焼く如し」(巻四・七五五)というがあり、「わが情焼くも吾なりはしきやし君に恋ふるもわが心から」(巻十三・三二七一)、「我妹子に恋ひ術なかり胸を熱み朝戸あくれば見ゆる霧かも」(巻十二・三〇三四)というのがあるから、参考として味うことが出来る。

○

秋津野に朝ゐる雲の失せゆけば昨日も今日も
亡き人念ほゆ　〔巻七・一四〇六〕　作者不詳

挽歌の中に載せている。吉野離宮の近くにある秋津野に朝のあいだ懸かっていた雲が無くなると(この雲は火葬の烟である)、昨日も今日も亡くなった人がおもい出されてならない、というのである。人麿が土形娘子を泊瀬山に火葬した時詠んだのに、「隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ」(巻三・四二八)とあるのは、当時まだ珍しかった、火葬の烟をば亡き人のようにおもった歌である。また出雲娘子を吉野に火葬した時にも、「山の際ゆ出雲の児等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く」(同・四二九)とも詠んでいるので明かである。此一首は取りたてて秀歌と称する程のものでないが、挽歌としての哀韻と、「雲の失せゆけば」のところに心が牽かれたのであった。

○

福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が音を聞く　〔巻七・一四一一〕　作者不詳

自分は恋しい妻をもう亡くしたが、白髪になるまで二人とも健かで、その妻の声を聞くことの出来る人は何と為合せな人だろう、羨しいことだ、というので、「妹が声を聞く」というのが特殊でもあり一首の眼目でもあり古語のすぐれたところを示す句でもある。現代人の言葉などにはこういう素朴で味のあるいい方はもう跡を絶ってしまった。

一般的なようなことを云っていて、作者の身と遊離しない切実ないい方で、それから結句に、「こゑを聞く」と結んでいるが、「聞く」だけで詠歎の響があるのである。文法的には詠歎の助詞も助動詞も無いが、そういうものが既に含まっているとおもっていい。

○

吾背子を何処行かめとさき竹の背向に宿しく
今し悔しも　〔巻七・一四一二〕　作者不詳

これも挽歌の中に入っている。すると一首の意は、私の夫がこのように、死んで行くなどとは思いもよらず、生前につれなくして、後ろを向いて寝たりして、今となってわたしは悔しい、ということになるであろう。「さき竹の」は枕詞だが、割った竹は、重ねてもしっくりしないので、後ろ向に寝るのに続けたものであろう。また、「背向に宿しく」は、男女云い争った後の行為のように取れて一層哀れも深いし、女らしいところがあっていい。

然るに、巻十四、東歌の挽歌の個処に、「愛し妹を何処行かめと山菅の背向に宿しく今し悔しも」(三五七七)というのがあり、二つ共似ているが、巻七の方が優っている。巻七の方ならば人情も自然だが、巻十四の方は稍調子に乗ったところがある。おもうに、巻七の方は未だ個人的歌らしく、つつましいところがあるけれども、それが伝誦せられているうち民謡的に変形して

巻十四の歌となったものであろう。気楽に一しょになってうたうのには、「かなし妹を」の方が調子に乗るだろうが、切実の度が薄らぐのである。

参考地名一覧

頁

一　＊　奈良県五条市坂合部町。
一五　＊　和歌山県御坊市名田町野島。
一九　＊　三重県一志郡一志町八太。
二二　＊　奈良県橿原市高殿町。
四一　＊　奈良県宇陀郡大宇陀町。
四六　＊　静岡県浜松市三方原町。
〃　＊＊　静岡県浜松市曳馬町。
五〇　＊　静岡県浜名郡新居町。
五五　＊　大阪市住吉区の海岸。
六一　＊　奈良県天理市永原町・長柄町。
六二　＊　三重県一志郡久居町新家。
六三　＊　奈良市の西北郊、佐紀東・西・中・新の各町。
七二　＊　奈良県高市郡明日香村小原。
八一　＊　島根県那賀郡国府町上府・下府。
〃　＊＊　島根県江津市都野津町。
八五　＊　和歌山県西牟婁郡白浜町湯崎。
一〇一　＊　奈良県高市郡明日香村島ノ庄。
一〇四　＊　奈良県桜井市初瀬町。
一〇五　＊　奈良県橿原市高殿町。
〃　＊＊　奈良県橿原市大軽町・和田町・石川町・五条野町。
一〇八　＊　香川県坂出市。
一〇九　＊　島根県邑智郡邑智町粕淵・湯抱。
一一一　＊　奈良県高市郡明日香村雷。
一一四　＊　大阪市大淀区豊崎西通・東通。
一一六　＊　兵庫県津名郡北淡町野島。

一一七　＊　兵庫県三原郡南淡町沼島。
一一八　＊　兵庫県高砂市。
一二二　＊　兵庫県三原郡西淡町湊。
一二三　＊　奈良県高市郡明日香村八釣。
一二六　＊　大阪府貝塚市神前町。
一二〇　＊　名古屋市南区桜台町・元桜田町・桜木町。
一二二　＊　愛知県幡豆郡幡豆町。
一二二　＊　滋賀県高島郡高島町勝野。
一二三　＊　京都府綴喜郡井手町多賀。
一二五　＊　静岡県清水市興津清見寺町。
一二八　＊　奈良県吉野郡吉野町菜摘。
一二〇　＊　福島県相馬郡鹿島町。
一二一　＊　奈良県桜井市池ノ内町。
一二三　＊　福岡県田川郡香春町鏡山。
一九八　＊　兵庫県揖保郡御津町室津。
一九九　＊　兵庫県姫路市飾磨区今在家。
〃　＊＊　同区川内、中・西・北・南の各細江町。
二二〇　＊　奈良県桜井市穴師町。
二二七　＊　大阪府池田市、兵庫県川西市・伊丹市・尼崎市。

改版に際して

本書は、昭和十三年十一月二十日第一刷発行以来、現在までに、上巻は四十三刷五十一万部、下巻は四十刷四十万部をこえる部数に達した。さきに昭和二十八、九年に改版した紙型が痛んだので、今回四度版を起こすことになった。この機会に、著者の原文の尊重を基本として、現代の読者のために読みやすく親しみやすい形にしたいという岩波書店編集部の希望があり、斎藤家でも賛成せられたので、編集部と協議して、次のような変更を行なうことにした。

一、字体は、すべて当用漢字字体表による新字体を採用した。

一、かなづかいは、歌、および引用の歌句、文章は旧版の歴史的かなづかいのままとし、著者の文章は現代かなづかいとした。

一、万葉集において、江戸時代以来、野、角、慕ぶ、楽しなどと訓まれてきた一群の語は、橋本進吉博士の上代特殊かなづかいの説によって、現在では一般に、野、角、慕ぶ、楽しなどに、つまりヌをノに訓み改めることになっている。しかし本書の著者は、この問題については旧来のようにヌとすべきであるという強い意見を持っていたので、この点に関してはもとのままにしておくことにした。

一、原則として当用漢字表にない漢字の用いられた語、特に現在多くの人々に難読と思われる語、また固

有名詞で必要と思われるものなどには、ふりがなをつけた。これらは初出の語につけることにしたが、しばしば現われる語には、繰り返してふりがなをつけた場合もある。もともと旧版にある固有名詞のふりがなには、現在ではいかがと思われるものも見当るが、すべてもとのままとした。

一、引用文にも、難読と思われるところには、ふりがなをつけたが、この場合、もともと旧版にあるふりがなは、片かな、平がな、それぞれそのままとし、今回新しく加えたふりがなは、原文が片かなであると、平がなであるとにかかわらず、すべて平がなとした。

一、旧版の小活字のところは、その内容により、原拠を示す場合などの外は、多く本文と同じ大きさの活字とした。

一、引用された歌の巻数や国歌大観の番号の示し方が、まちまちになっていたところは、今回改めて統一した。長歌の句切れについても、今回原則として五七の二句を一つにして読点を付けることに統一した。

一、本書に現われた地名のその後変更されているものは、参考までに本文に＊を付し、現在の地名を本文の終りに一覧として掲げておくことにした。なお、原則として重出のものについては、これを省いた。

一、旧版の誤りで、単に文字を改める程度のものは、これを正したが、著者の文章を変改することになる場合は、これを避けてもとのままとした。本書以後の学説の進展によって、改められるべきところもあるわけであるが、しかしそれらの多くは、本書として重要な点ではないようである。以上改版のことにつき、岩波書店榎本和歌男氏、山田洋子氏の尽力を感謝する。（昭和四十三年十月　柴生田　稔）

斎藤茂吉

1882-1953年
1910年東京帝国大学医科大学卒業
専門―精神医学，歌人
著書―『赤光』『あらたま』『寒雲』
『白き山』『童馬漫語』
『柿本人麿』
『斎藤茂吉全集』(全36巻)

万葉秀歌 上巻 （全2冊） 岩波新書(赤版)5

1938年11月20日 第 1 刷発行
1953年 7 月31日 第 22 刷改版発行
1968年11月25日 第 44 刷改版発行
2013年 9 月20日 第 107 刷発行

著 者 斎藤茂吉（さいとう もきち）
発行者 岡本 厚
発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111
http://www.iwanami.co.jp/
新書編集部 03-5210-4054
http://www.iwanamishinsho.com/
印刷・三秀舎 カバー・半七印刷 製本・中永製本

ISBN 4 00 400002 5 Printed in Japan

岩波新書新赤版一〇〇〇点に際して

ひとつの時代が終わったと言われて久しい。だが、その先にいかなる時代を展望するのか、私たちはその輪郭すら描きえていない。二〇世紀から持ち越した課題の多くは、未だ解決の緒を見つけることのできないままであり、二一世紀が新たに招きよせた問題も少なくない。グローバル資本主義の浸透、憎悪の連鎖、暴力の応酬――世界は混沌として深い不安の只中にある。

現代社会においては変化が常態となり、速さと新しさに絶対的な価値が与えられた。消費社会の深化と情報技術の革命は、種々の境界を無くし、人々の生活やコミュニケーションの様式を根底から変容させてきた。ライフスタイルは多様化し、一面では個人の生き方をそれぞれが選びとる時代が始まっている。同時に、新たな格差が生まれ、様々な次元での亀裂や分断が深まっている。社会や歴史に対する意識が揺らぎ、普遍的な理念に対する根本的な懐疑や、現実を変えることへの無力感がひそかに根を張りつつある。そして生きることに誰もが困難を覚える時代が到来している。

しかし、日常生活のそれぞれの場で、自由と民主主義を獲得し実践することを通じて、私たち自身がそうした閉塞を乗り超え、希望の時代の幕開けを告げてゆくことは不可能ではあるまい。そのために、いま求められていること――それは、個と個の間で開かれた対話を積み重ねながら、人間らしく生きることの条件について一人ひとりが粘り強く思考することではないか。その営みの糧となるものが、教養に外ならないと私たちは考える。歴史とは何か、よく生きるとはいかなることか、世界そして人間はどこへ向かうべきなのか――こうした根源的な問いとの格闘が、文化と知の厚みを作り出し、個人と社会を支える基盤としての教養となった。まさにそのような教養への道案内こそ、岩波新書が創刊以来、追求してきたことである。

岩波新書は、日中戦争下の一九三八年一一月に赤版として創刊された。創刊の辞は、道義の精神に則らない日本の行動を憂慮し、批判的精神と良心的行動の欠如を戒めつつ、現代人の現代的教養を刊行の目的とする、と謳っている。以後、青版、黄版、新赤版と装いを改めながら、合計二五〇〇点余りを世に問うてきた。そして、いままた新赤版が一〇〇〇点を迎えたのを機に、人間の理性と良心への信頼を再確認し、それに裏打ちされた文化を培っていく決意を込めて、新しい装丁のもとに再出発したいと思う。一冊一冊から吹き出す新風が一人でも多くの読者の許に届くこと、そして希望ある時代への想像力を豊かにかき立てることを切に願う。

（二〇〇六年四月）